
南埼玉郡菖蒲町

神ノ木遺跡

県営水道幸手幹線敷設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告

2000

埼玉県企業局

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



神ノ木遺跡遠景



第1号古墳跡付近出土遺物

発刊によせて

21世紀の到来を目前に控え、わが国の社会経済情勢は少子・高齢化、高度情報化、環境問題、財政再建など時々刻々と変わるさまざまな問題を抱えております。

本県では、こうした問題や変化に的確に対応し、県民一人ひとりが真の豊かさを実感できる「豊かな彩の国」を実現するために、「環境優先」「生活重視」の基本理念のもと、計画的な県政の運営に努めております。

なかでもライフラインである水道水の安定的確保は、県民の生活や社会活動を支えるための重要な社会基盤形成のひとつであります。私共は、県民に安全で良質な水を安定して供給することを重要な課題に掲げ、水道施設の合理的運用や水道水の安定的給水体制の整備に努めてまいりました。とりわけ本県は急増する人口に対応するため給水区域の拡大が急務であったため、鋭意推し進めてきたものであります。

県南と県中央部への水道水の安定供給を賄う県営水道幸手幹線建設事業につきましては、各浄水場間の相互融通を可能にし、施設の合理的な運用を図ることを目的に計画されたものであります。工事は平成10年度に始まり、現在菖蒲町内の整備を進めているところであります。

菖蒲町は、近年では菖蒲の花やラベンダーの町としても著名であります。菖蒲城や県指定文化財である全長107mを誇る前方後円墳天王山塚古墳が所在するなど古い歴史を有する町としても良く知られています。

こうした歴史を伝える遺跡は県営水道幸手幹線の建設予定地内にも所在し、すでにいくつかの遺跡が発掘調査され、貴重な成果があがっております。今回報告いたします神ノ木遺跡でも古墳跡が発見されるなど新たな成果を得ることができました。

ここに成果をまとめた報告書が刊行の運びとなりましたので、県民文化の向上のためにご利用いただければ幸いです。

平成12年9月

埼玉県公営企業管理者 三 澤 邁 策

序

首都圏の「北の玄関」にあたる埼玉県では、急激な人口の増加に対応するために安定した水道水を供給する水道幹線供給事業を、重要な施策のひとつとして位置付けてまいりました。

県営水道幸手幹線敷設事業は吉見町から幸手市間約30kmの幹線送水管で、県南中央地域を対象に水道水を供給しようとするものです。幸手幹線の通過する菖蒲町は、埼玉県の東部に位置し、田園都市として発展してきました。また、全長107mの前方後円墳である天王山塚古墳や菖蒲城など数多くの遺跡が存在する地域としても知られております。

県営水道幸手幹線敷設事業地内（菖蒲町）にも今回調査対象となった神ノ木遺跡が所在しておりました。その取り扱いにつきましては、関係諸機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置をとることとなりました。調査につきましては埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、埼玉県第二水道建設事務所への委託を受け、当事業団が実施いたしました。

今回の調査では、隣接する丸谷下遺跡と同様に縄文時代の土器が数多く発見されました。また、同時に古墳跡も発見され、付近から出土した土器から辛亥銘鉄剣で有名な稲荷山古墳と同じ頃につくられたことなどの貴重な成果も得ることができました。

本書はこれらの成果をまとめたものです。本書が埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及啓発の参考資料として、広く活用していただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査から報告書刊行に至るまで諸調整にご尽力いただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、埼玉県第二水道建設事務所、菖蒲町教育委員会並びに地元関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成12年9月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 中野健一

例 言

1. 本書は、埼玉県南埼玉郡菖蒲町に所在する、神ノ木遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番および発掘調査届けに対する指示通知は、以下のとおりである。
神ノ木遺跡（KMNK）
南埼玉郡菖蒲町大字柴山枝郷1,531番地1他
平成12年1月5日付け 教文第2-120号
3. 発掘調査は県営水道管敷設工事に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県第二水道建設事務所の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第I章の組織により実施した。本事業のうち発掘調査については、宮井英一、伴瀬宗一が担当して平成12年1月6日から平成12年1月31日まで実施した。整理・報告書刊行事業については昼間孝志が担当し、平成12年7月1日から平成12年9月30日まで実施した。
5. 遺跡の基準点測量は、(株)東京航業研究所に委託した。
6. 発掘調査における写真撮影は、宮井と伴瀬が行い、遺物写真撮影は大屋道則が行った。
7. 出土品の整理および図版の作成は、真野目洋子の協力を得て昼間が行った。本書の執筆はI-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、IV-1-(1)・(2)を金子直行、IV-1-(3)・V-1を上野真由美が行い、その他の記述は昼間が行った。
8. 本書の編集は調査部資料整理担当の昼間が行った。
9. 本書にかかる資料は、平成13年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。
10. 本書の作成にあたり、下記の方々からご教示、ご協力を賜った。記して感謝の意を表します。(敬称略)
三ツ木貞夫 山崎 武 菖蒲町教育委員会

凡 例

1. 挿図中のX、Yによる座標表示は、国家標準直角座標第IV系に基づく座標値を示す。また、各挿図における方位表示は、すべて座標北を示す。
2. グリッドは、国家標準直角座標に基づいて設定し、10m×10m方眼である。グリッドの名称は、方眼の北西隅の杭番号である。
3. 遺構の表記記号は以下のとおりである。
S J…………住居跡 S D…………溝跡
S S…………古墳跡 S K…………土壇
4. 遺構の名称は原則として、調査時のものを使用した。
5. 挿図の縮尺は、遺構1/60、遺物1/4を基本とするが、例外もある。例外については別記した。
6. 遺構断面図における水準の数値は、すべて海拔標高である。
7. 遺構図中に示した遺物の番号は、遺物の出土位置および接合関係を示し、遺物実測図と一致する。
8. 土師器実測図のスクリーントーンは赤彩された範囲を示す。
9. 遺物観察表は次のとおりである。
 - ・口径、器高、底径は、cmを単位とする。
 - ・()内の数値は推定値である。
 - ・胎土は肉眼で観察できるものを次のように示した。
A—白色粒子 B—角閃石 C—石英
D—雲母 E—長石 F—赤色粒子
針—白色針状物 片—片岩
 - ・焼成は良好、普通、不良の三段階に分けた。
 - ・残存率は図示した器形に対し、5%単位で示した。
10. 地形図の作成にあたっては、以下の地図を使用した。
国土地理院1/50000地形図「鴻巣」
菖蒲町平面図 (No.12) 1/2500

目次

発刊によせて

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	(1) 検出された遺構	9
1. 調査に至る経過	1	(2) 遺構出土の遺物	12
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	(3) グリッド出土遺物	28
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3	2. 古墳時代の調査	53
II 遺跡の立地と環境	4	3. その他	54
III 遺跡の概要	7	V まとめ	55
IV 遺構と出土遺物	9	1. 縄文時代の土器群について	55
1. 縄文時代の調査	9	2. 神ノ木遺跡周辺の古墳について	57

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	4	第20図 グリッド出土遺物(2)	30
第2図 周辺の遺跡	5	第21図 グリッド出土遺物(3)	31
第3図 神ノ木遺跡調査位置図	7	第22図 グリッド出土遺物(4)	32
第4図 神ノ木遺跡全体図	8	第23図 グリッド出土遺物(5)	33
第5図 土壇(1)	10	第24図 グリッド出土遺物(6)	35
第6図 土壇(2)	11	第25図 グリッド出土遺物(7)	36
第7図 土壇(3)	12	第26図 グリッド出土遺物(8)	38
第8図 土壇出土遺物(1)	13	第27図 グリッド出土遺物(9)	39
第9図 土壇出土遺物(2)	15	第28図 グリッド出土遺物(10)	41
第10図 土壇出土遺物(3)	16	第29図 グリッド出土遺物(11)	43
第11図 土壇出土遺物(4)	18	第30図 グリッド出土遺物(12)	44
第12図 土壇出土遺物(5)	19	第31図 グリッド出土遺物(13)	45
第13図 土壇出土遺物(6)	20	第32図 グリッド出土遺物(14)	46
第14図 土壇出土遺物(7)	21	第33図 グリッド出土遺物(15)	48
第15図 土壇出土遺物(8)	23	第34図 グリッド出土遺物(16)	50
第16図 土壇出土遺物(9)	24	第35図 第1号古墳跡	52
第17図 土壇出土遺物(10)	26	第36図 第1号古墳跡出土遺物	53
第18図 土壇出土遺物(11)	27	第37図 第1号・第2号溝跡	54
第19図 グリッド出土遺物(1)	29		

表 目 次

第1表 土壙計測表 51 第2表 第1号古墳跡出土遺物観察表 53

写真図版目次

図版1	遺跡全景 第1号古墳跡	図版5	第6号土壙出土遺物 第8号土壙出土遺物
図版2	第1号土壙 第4号土壙 第6号土壙 第8号土壙 第9号・第10号・第18号土壙 第14号土壙 第21号土壙 第1号溝跡	図版6	第10号土壙出土遺物 第15号土壙出土遺物
図版3	第2号土壙出土遺物 第4号土壙出土遺物 第6号土壙出土遺物 第17号土壙出土遺物 第20号土壙出土遺物 グリッド出土遺物	図版7	第16号土壙出土遺物 第17号土壙出土遺物(1)
図版4	第4号土壙出土遺物(1) 第4号土壙出土遺物(2)	図版8	第17号土壙出土遺物(2) 第20号土壙出土遺物
		図版9	グリッド出土遺物
		図版10	グリッド出土遺物
		図版11	グリッド出土遺物
		図版12	グリッド出土遺物
		図版13	グリッド出土遺物
		図版14	グリッド出土遺物
		図版15	グリッド出土遺物
		図版16	グリッド出土遺物
		図版17	グリッド出土遺物
		図版18	グリッド出土遺物

I 発掘調査の概要

1. 調査に至る経過

埼玉県では、豊かなくにつくりに向けて、安全で良質な飲料水を供給し、安定的な生活用水を供給するため、水質監視の強化や上下水道の整備を進めるために、埼玉県水道用水供給事業を行っている。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課では、このような施策の推進と文化財の保護について、従前から関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

埼玉県水道用水供給事業の一環として計画された、県営水道管敷設工事に伴う埋蔵文化財の所在および取扱については、平成10年10月6日付け企局二水第245号で、埼玉県第二水道建設事務所長から埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課長あて照会があった。

文化財保護課では確認調査を実施し、その結果をもとに、平成11年7月15日付け教文第378号で、神ノ木遺跡の取扱について次のように回答した。

1 埋蔵文化財の所在

工事予定地内には以下の埋蔵文化財包蔵地が所在する。

名称	種別	時代	所在地
神ノ木遺跡 (84-007)	集落跡	縄文・古墳	菖蒲町大字柴山字神ノ木

2 取扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地は、現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状を変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づく文化庁長官当への発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

発掘調査については、実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と第二水道建設事務所及び文化財保護課の三者により調査方法、期間、経費などを中心に協議が行われた。その結果、平成12年1月6日から1月31日までの期間で実施することになった。

埼玉県企業局公営企業管理者から文化財保護法第57条の3の規定による埋蔵文化財発掘通知が提出され、調査に先立ち、第57条1項の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査に係る通知は以下のとおりである。

神ノ木遺跡

平成12年1月5日付け 教文第2-120号

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

神ノ木遺跡の発掘調査は、平成12年1月6日から平成12年1月31日まで実施した。調査面積は372㎡である。

事前に埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、菖蒲町教育委員会、埼玉県企業局水道部との発掘調査に関する協議・打ち合わせを行い、12月20日から現場事務所の設置、発掘器材の運搬等を行った。その後、調査範囲を確認し、安全対策として囲柵工事を行った。

1月6日から重機による表土剥ぎを実施した。表土は平均して約40cmあり、調査区の南側に向かって傾斜していた。遺物は表土剥ぎの段階から確認できていたが、主に斜面部となる台地南西側に多く見られた。表土剥ぎが終了した後、遺構確認調査を行い、古墳跡1基、土壇21基、溝跡2条を検出した。遺物は縄文時代の土器・石器が多く、特に斜面部に確認された土壇群を覆う包含層のように出土した。また、発掘調査に先立って行われた文化財保護課による試掘調査では、古墳時代後期の土器が完形に近い状態で今回検出された古墳跡の周辺から出土している。

1月11日より遺構の調査を開始した。古墳跡は遺構確認面においても上層には黒褐色の土が覆っており、当時の生活面の可能性も考えられた。周溝は古墳全体の約 $\frac{1}{2}$ が確認されたが、出土遺物は縄文時代の土器が破片で確認されただけで、古墳時代の遺物はなかった。また、古墳の周溝を分断するように溝が1条検出されたが、出土遺物もなく時期を特定できないが、溝の断面などを観察する限り、古墳の墳丘が存在した段階に掘り込まれた溝とは考え難く、墳丘が消滅してから掘

られたと考えるのが妥当と判断した。縄文時代の遺構の多くは斜面部で確認された。遺物は斜面を覆うように分布していたが、土壇内からも数多く出土した。1月中旬には遺物の取り上げ、各遺構の断面図の作成、遺物出土状況写真を撮り、遺構全体を掘りきった。

1月20日からは各遺構の個別写真、全景写真、航空写真撮影等を行った。また、遺構平面図、全体図の作成も行い、発掘現場内での作業を終了した。その後、囲柵の撤去、調査区内の埋め戻し、発掘器材・遺物の搬出、現場事務所の撤去の順で作業を進め、1月末日にすべての発掘調査事業を終了した。

整理・報告書刊行

報告書刊行事業は、平成12年7月1日から平成12年9月30日まで行った。

7月上旬、遺物の洗浄・注記を行い、直ぐに接合・復元を開始した。また、同時に遺構図面の整理を進め、第二次原図の作成を行った。7月中旬、遺物の接合・復元が終了し、実測する遺物と断面実測する遺物に分類し、実測に入った。また、断面実測する遺物については拓本をとった。遺構図は第二次原図の作成が終了し、トレースに入った。7月下旬、すべての遺物実測が終了し、直ちにトレースを行った。また、同時に実測した遺物の写真撮影も行った。その後遺構図の版組を開始し、遅れて遺物図版、写真図版を組み、全体の割付を行った。原稿の執筆は割付後、直ちに開始した。

8月上旬入稿し、3回の校正を経て9月30日に財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第262集 神ノ木遺跡として刊行した。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査 (平成11年度)

理事長 荒井 桂
副理事長 飯塚 誠一郎
常務理事兼管理部長 広木 卓

管理部

副部長兼経理課長 関野 栄一
主任 福田 昭美
主任 腰塚 雄二
主任 菊池 久
庶務課長 金子 隆
主任 田中 裕二
主任 江田 和美
主任 長滝 美智子

調査部

調査部長 増田 逸朗
調査部副部長 水村 孝行
主席調査員 杉崎 茂樹
(調査第四担当)
統括調査員 宮井 英一
主任調査員 伴瀬 宗一

(2) 整理・報告書刊行 (平成12年度)

理事長 中野 健一
副理事長 飯塚 誠一郎
常務理事兼管理部長 広木 卓

管理部

副部長 関野 栄一
主席(庶務担当) 阿部 正浩
主席(施設担当) 野中 廣幸
主任 菊池 久
主席(経理担当) 江田 和美
主任 長滝 美智子
主任 福田 昭美
主任 腰塚 雄二

調査部

調査部長 高橋 一夫
資料副部長 鈴木 敏昭
(資料整理担当)
主席調査員 磯崎 一
統括調査員 昼間 孝志

II 遺跡の立地と環境

菖蒲町は埼玉県の東部に位置し、主に大宮台地の北東部と加須低地から成っている。大宮台地は南は川口市から北は吹上町に至る県東部の主要な台地で、標高は西側に高く、東側に低くなっている。また、東側ほど谷地形が複雑に入り、小支台の多い地形が創り出され、その延長線上には埋没ローム台地の存在も確認されている。加須低地は利根川と中川による氾濫で形成されたもので、西は行田市付近、東は中川を境にしてそれぞれ妻沼低地、中川低地と境を成している。菖蒲町は大宮台地北部に所在しながらも東側に位置しているため、標高は西側に位置する桶川市が約20mであるのに対して12m前後と低い。

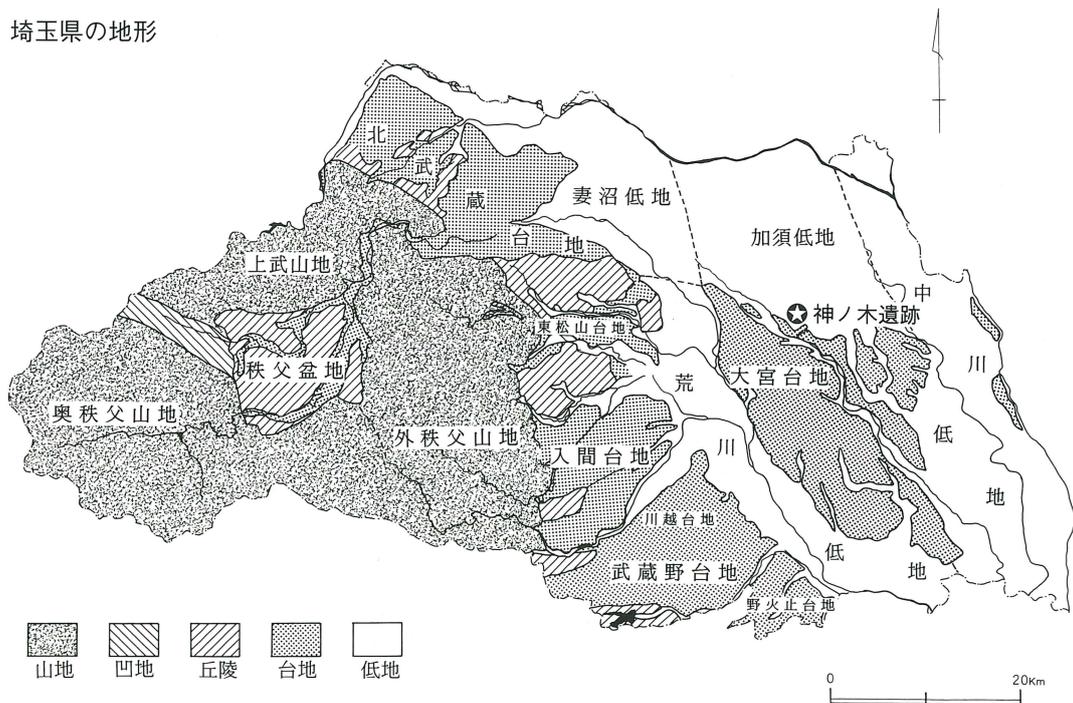
神ノ木遺跡は菖蒲町の南東、蓮田市と伊奈町と接する付近に位置し、標高約12mの北西から南東方向に延びる長さ約3kmの台地上に立地している。神ノ木遺跡をのせる台地は西側の縁辺を野通川が流れ、東側を見沼代用水が流れ、遺跡は両河川に挟まれるような位置にある。このような台地と谷が織りなす複雑な地形は、やがて人々に居住空間をもたらし、付近には多くの遺

跡が点在することとなった。

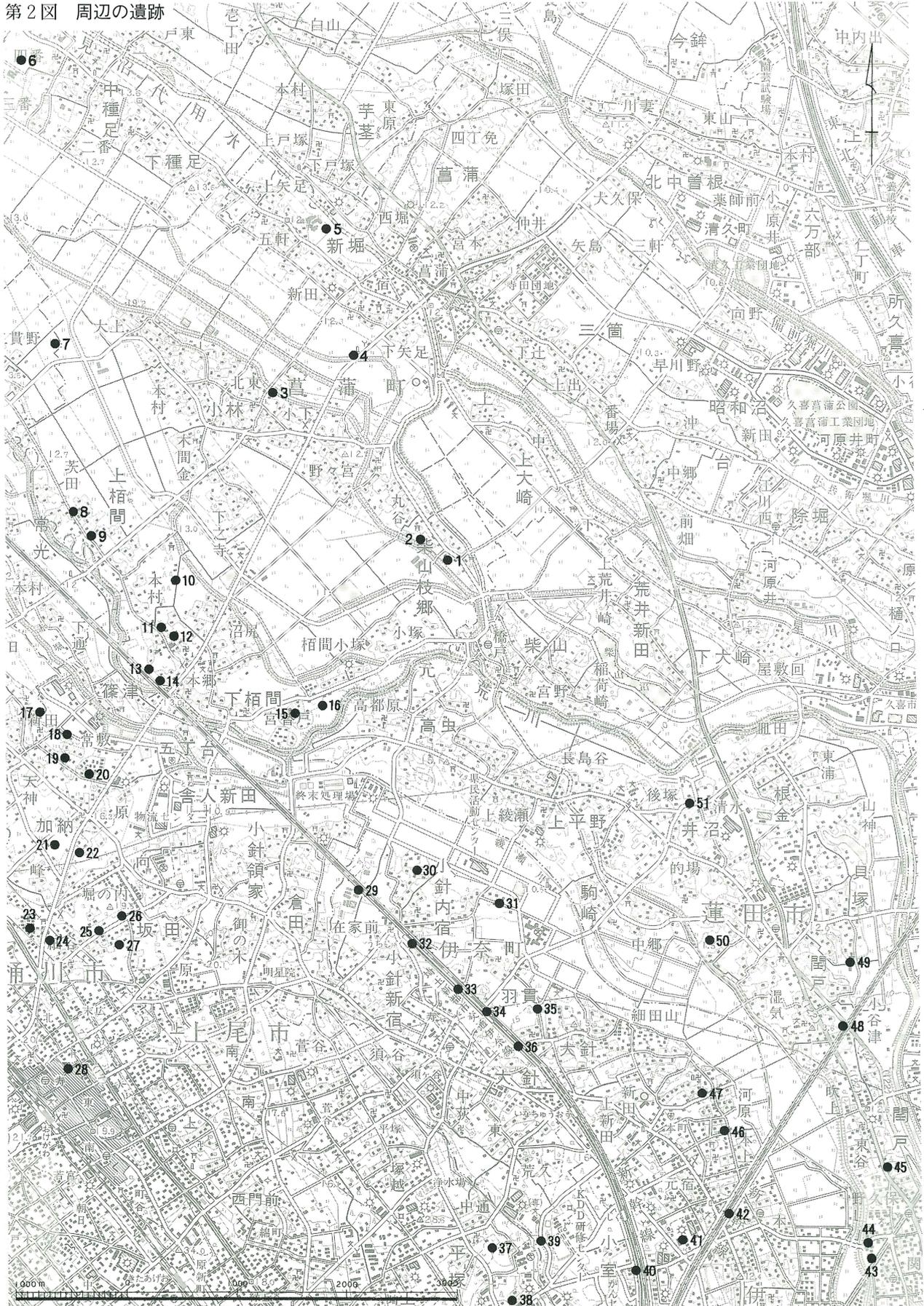
周辺の縄文時代の遺跡では、丸谷下遺跡と地獄田遺跡がある。神ノ木遺跡の北西約200mにある縄文中期を中心とした丸谷下遺跡では、中期加曾利E式期の住居跡1軒と前期諸磯式期の土器群が出土している。また、この他に古墳時代中期の住居跡も1軒検出されている。地獄田遺跡は神ノ木遺跡の西、約4kmの低地(埋没ローム)上に位置する後晩期の集落跡で、安行式期の住居跡が5軒検出されている。この他の縄文時代の集落は桶川市の後谷遺跡(18 後期)、伊奈町では大針貝塚(35 前期)、北遺跡・原遺跡(34 中期)・志久遺跡(41 中期)、戸崎前遺跡(31 中期・後期・晩期)、蓮田市では関山貝塚(44 前期)、雅楽谷遺跡・ささら遺跡(後晩期)、大宮市では冰川神社裏遺跡(46)・今羽丸山遺跡(後期・晩期)などがある。

弥生時代の遺跡はこの付近では殆ど確認されていない。桶川市に砂ヶ谷戸遺跡の調査例があるが、多くは大宮市以南に多くみられる。古墳時代になると、前期の集落は比較的多いが、中期・後期の集落は意外に少

第1図 埼玉県の地形



第2図 周辺の遺跡



ない。前期の集落では伊奈町の薬師堂根遺跡(30)、戸崎前遺跡(31)、向原遺跡(29)、上尾市の尾山台遺跡などがあり、向原遺跡からは方形周溝墓も検出されている。後期の遺跡では大山遺跡で確認されている他は、確認されていない。

周辺の古墳及び古墳群については、比較的菖蒲町以北及び以西に広がりを見せ、大宮台地東辺部には殆ど確認されていない。寧ろ菖蒲町にみられるように大宮台地の東側に広がる小支台上に存在している場合が多く、低地からみて小高い丘状の地形を好んで構築したものとみられる。菖蒲町の南東に位置する蓮田市ささら遺跡では横穴式石室をもつ円墳が3基調査され、礫床面からは鉄刀、刀子、耳環などが出土している。宮代町では前方後円墳と考えられる姫宮神社古墳を中心として十数基からなる古墳群の存在も明らかにされている。菖蒲町では全長107mの前方後円墳である天王山塚古墳をはじめ、全長約60mの東浦古墳、全長約30mの夫婦塚古墳などの前方後円墳、大日塚古墳などの円墳が数十基点在している。東浦古墳からは周溝内より、鳥形埴輪や人物埴輪の破片も出土しているが、注目されるのは白色を帯びた円筒埴輪が出土していることである。白色の埴輪は行田市稻荷山古墳や鴻巣市新屋敷遺跡などのこの付近における後期初頭の古墳から徐々にみられるようになってくるものである。

奈良・平安時代の遺跡では、戸崎前遺跡(31)、向原遺跡(29)、神明神社東遺跡(10)などがあげられるが、相対的に遺跡の数は少ない。また、菖蒲城跡では常陸国分寺系の軒丸瓦も出土している。

中世以降では、菖蒲城跡(4)、加納城址(20)、天王山塚北遺跡(11)、薬師堂根遺跡(30)、閩戸多利遺跡(48)などがある。いずれも元荒川の流域に立地する中世から近世にかけての城館跡、寺院跡であるが、実態は不明瞭な部分が多い。菖蒲城跡は康正2(1447)年に金田式部則綱によって築かれたと伝えられるが、徳川家康が関東に入部する天正18(1590)年に後北条氏の滅亡とともに廃城になっている。加納城址は元荒川を挟んで、菖蒲城の南西約4.5kmに位置する。城跡の全体像は不明瞭であるが、確認調査で青磁・白磁の碗類、瀬戸美濃産の碗・皿・鉢類、常滑産の鉢・甕類などが出土している。薬師堂根遺跡からは方形に巡る溝で囲まれた区画内から建物跡、墓壇などが検出され、隣接する戸崎前遺跡でも土橋を伴う方形に巡る溝跡が検出されている。出土遺物から薬師堂根遺跡は14世紀、戸崎前遺跡は13世紀と考えられている。また、寺院関係では天王山塚北遺跡は中世寺院跡と推定され、堀跡が検出されている。この他相野谷遺跡からは掘立柱建物跡を想定させる柱穴群と中世瓦が確認されている。

周辺の遺跡

- | | | | |
|-----------|-----------------|------------------|-------------|
| 1 神ノ木遺跡 | 2 丸谷下遺跡 | 3 東浦古墳 | 4 菖蒲城跡 |
| 5 物見塚古墳 | 6 小沼耕地遺跡 | 7 地獄田遺跡 | 8 夫婦塚古墳 |
| 9 禿塚古墳 | 10 神明神社東遺跡 | 11 天王山塚古墳・天王山北遺跡 | 12 押出塚古墳 |
| 13 下栢間遺跡 | 14 富士塚古墳・富士塚前遺跡 | 15 大日塚古墳 | 16 小塚遺跡 |
| 17 新田遺跡 | 18 後谷遺跡 | 19 加納入山遺跡 | 20 加納城址 |
| 21 峰遺跡 | 22 笹原Ⅱ遺跡 | 23 細谷Ⅰ遺跡 | 24 細谷Ⅱ遺跡 |
| 25 堀の内Ⅰ遺跡 | 26 堀の内Ⅱ遺跡 | 27 南遺跡 | 28 稻荷神社境内遺跡 |
| 29 向原遺跡 | 30 薬師堂根遺跡 | 31 戸崎前遺跡 | 32 相野谷遺跡 |
| 33 八幡谷遺跡 | 34 原・谷畑遺跡 | 35 大針貝塚 | 36 北遺跡 |
| 37 平塚氷川遺跡 | 38 谷津Ⅰ遺跡 | 39 小室天神前遺跡 | 40 丸山遺跡 |
| 41 志久遺跡 | 42 久保山遺跡 | 43 坂堂貝塚 | 44 関山貝塚 |
| 45 十三塚古墳 | 46 氷川神社裏遺跡 | 47 小貝戸貝塚 | 48 閩戸足利遺跡 |
| 49 綾瀬貝塚 | 50 栗崎貝塚 | 51 井沼館跡 | |

Ⅲ 遺跡の概要

神ノ木遺跡は南埼玉郡菖蒲町大字柴山枝郷1531番地1他に所在する。調査面積は372㎡である。神ノ木遺跡は菖蒲町の南東部、加須低地に突き出た大宮台地の北端部、標高約12mの南北に細長い低台地上に立地している。この低台地の西側には台地裾に沿って江戸時代に開削された野通川が南流する。現況では台地と野通川との比高差は約3mである。神ノ木遺跡の北西約200mには縄文中期・古墳・平安時代の遺構・遺物が検出された丸谷下遺跡があり、谷を隔てた西側には下栢山遺跡などがある。

調査区は南北10～13m、東西約30mの長方形に近く、東側から西側に向かって緩やかに傾斜している。表土の厚さは約40cmで、低地に向かう西側ほど厚みを増す。

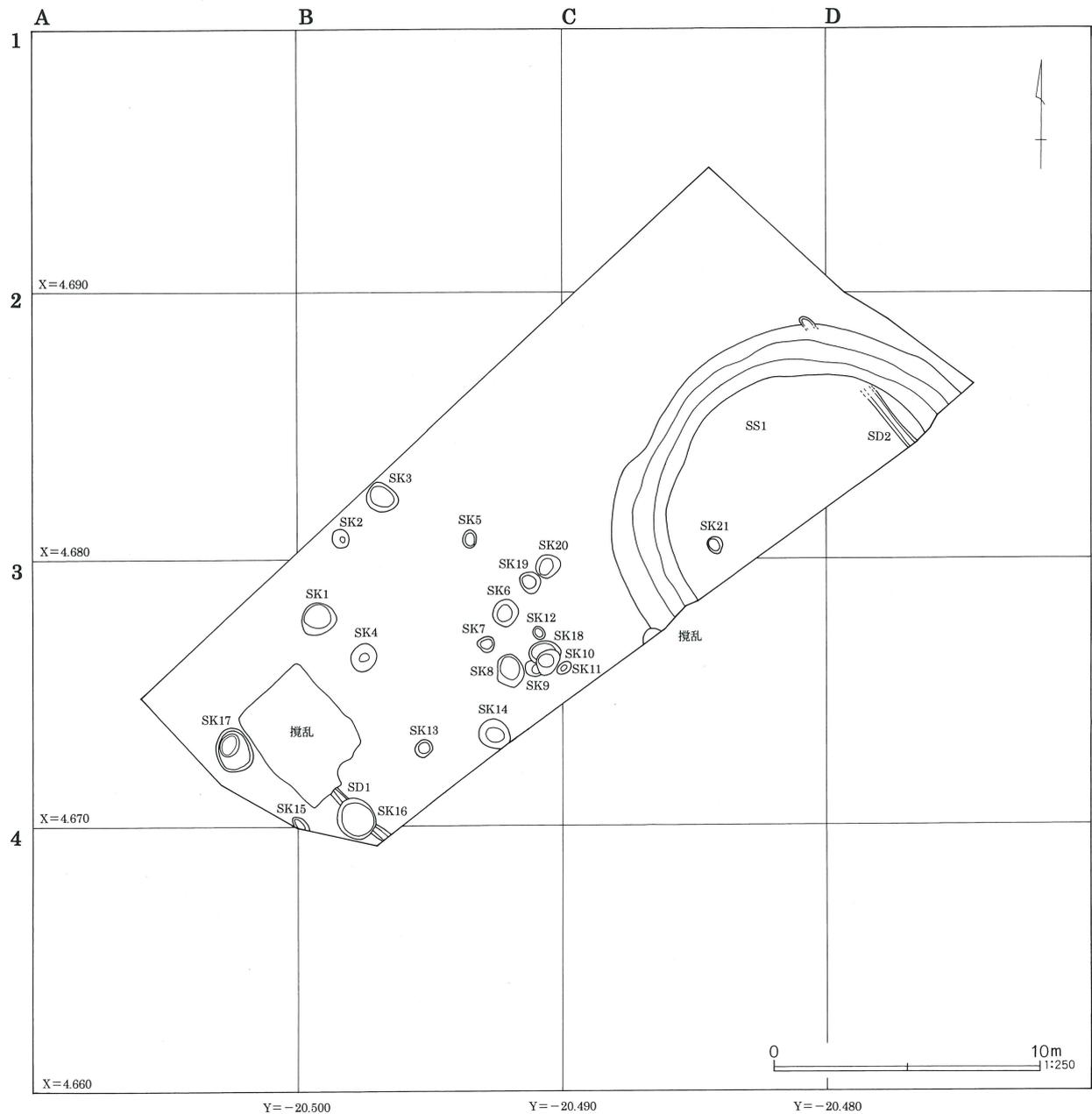
検出された遺構は古墳跡1基、土壇21基、溝跡2条であった。土壇は出土遺物から縄文時代中期～後期に該当するものである。

土壇は調査区の西より、低地に寄った地域に多く見られた。土壇の規模は60～100cm、深さ40cm程の円形または楕円形が多いが、中には直径120cm、深さ100cmを超える円筒状のものも3基検出された。また、これらの土壇の上層には厚さ20cm程の縄文時代の包含層が調査区の西側を中心にほぼ全面にわたって認められた。包含層は本来開削される以前の野通川付近まで形成されていたものと思われ、周辺にある程度の広がりをもつものと想定される。土器量の豊富さから当初は住居跡の存在も考慮されたが、縄文時代の包含層は黑色土

第3図 神ノ木遺跡調査位置図



第4図 神ノ木遺跡全体図



にあることで住居跡の形態を捉えられないことや炉跡にあたる焼土の溜まりなども確認できなかったため、検出には至らなかった。出土遺物は土器類が多く、石器類は少なかった。

古墳跡は調査区の北東部で、約半分が検出された。半分だけの検出であるため、不確定な要素を含むが、形態などから円墳跡とみられる。この古墳跡は既に墳丘はなく、周溝部分だけが検出されたが、試掘調査において墳丘の裾部と思われる付近から古墳時代後期の土師器坏類が3点出土している。古墳周溝内などから

の出土ではないため問題も残るが、古墳周溝内からは多量の縄文時代の土器類が出土した他は古墳時代の遺物が出土しなかったため、この古墳跡の年代を決める重要な手掛かりであることには変わりない。6世紀初頭頃とみられる。また、古墳跡の周溝を含まない直径は10~11mと比較的小規模であった。

溝跡は2条検出され、規模も小さく、遺物を伴っていないため、性格や時期については確定できなかった。

IV 遺構と出土遺物

1. 縄文時代の調査

(1) 検出された遺構

a) 土壙

第1号土壙 (第5図)

B-3グリッドに位置する。平面プランは楕円形を呈し、底面は平坦である。長径122cm×短径108cm×深さ42cmを測る。

第2号土壙 (第5図)

B-2グリッドに位置する。平面プランはほぼ円形を呈するが、底面が不均一でピット状に落ち込む部分がある。長径66cm×短径62cm×深さ28cmを測る。

第3号土壙 (第5図)

B-2グリッドに位置する。平面プランは楕円形を呈し、底面はやや凹凸がある。長径116cm×短径108cm×深さ43cmを測る。

第4号土壙 (第5図)

B-3グリッドに位置する。平面プランはほぼ円形を呈し、底面が小さく、挿鉢状を呈する。覆土中より多量の土器片が出土する。長径100cm×短径95cm×深さ45cmを測る。

第5号土壙 (第5図)

B-2グリッドに位置する。平面プランは楕円形で、底面はほぼ平坦である。長径64cm×短径49cm×深さ26cmを測る。

第6号土壙 (第5図)

B-3グリッドに位置する。平面プランは楕円形で、底面は平坦である。長径92cm×短径84cm×深さ59cmを測る。

第7号土壙 (第5図)

B-3グリッドに位置する。平面プランは楕円形で、底面は皿状を呈する。長径58cm×短径52cm×深さ16cmを測る。

第8号土壙 (第5図)

B-3グリッドに位置する。平面プランは楕円形で、底面は平坦である。長径124cm×短径108cm×深さ64cm

を測る。

第9・10・18号土壙 (第6図)

B-3グリッドに位置する。土壙3基の重複であるが、第9号土壙が新しく、第10号土壙が古い。一番古い土壙は第18号土壙である。プランはみな楕円形で、底面もみな皿状を呈する。第9号土壙は長径78cm×深さ36cm、第10号土壙は長径92cm×短径78cm×深さ50cm、第18号土壙は長径117cm×深さ32cmを測る。

第11号土壙 (第5図)

B-3～C-3グリッドにかけて位置する。平面プランは楕円形で、底面は平坦である。長径64cm×短径52cm×深さ30cmを測る。

第12号土壙 (第6図)

B-3グリッドに位置する。平面プランは楕円形で、底面はやや凹凸が見られる。長径51cm×短径44cm×深さ26cmを測る。

第13号土壙 (第6図)

B-3グリッドに位置する。平面プランはほぼ円形で、底面は皿状を呈する。長径64cm×短径62cm×深さ14cmを測る。

第14号土壙 (第6図)

B-3グリッドに位置し、一部が調査区外に当たる。平面プランは楕円形であるが、底面は円形で平坦であり、井戸状の土壙である。長径110cm×短径82cm×深さ99cmを測る。

第15号土壙 (第6図)

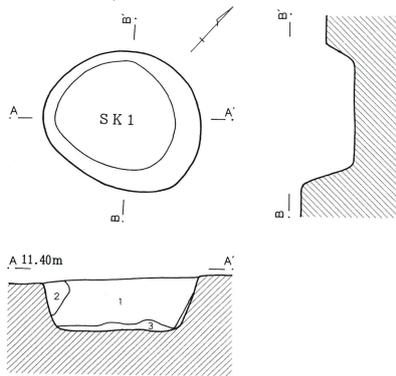
A-3～B-3グリッドにかけて位置する。一部調査区外に当たる。平面プランは楕円形で、底面は皿状を呈する。長径70cm×短径40cm×深さ16cmを測る。

第16号土壙 (第6図)

B-3～4グリッドにかけて位置する。平面プランは楕円形で、底面は平坦である。長径158cm×短径138cm×深さ81cmを測る。

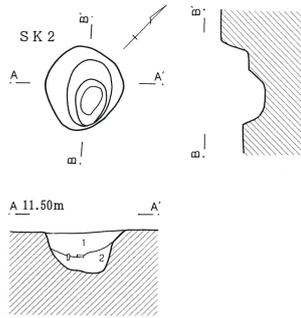
第17号土壙 (第6図)

第5図 土壌(1)



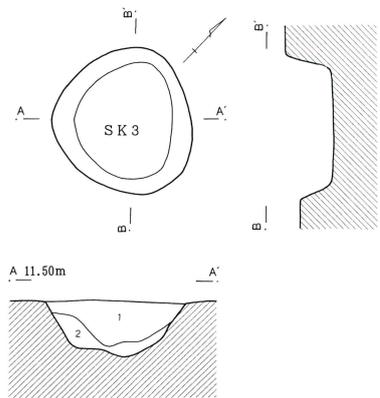
SK 1

- 1 暗褐色土 炭化粒子、ローム粒子多量含む。
- 2 灰褐色土 ローム多量含む。
- 3 褐色土 ローム粒子多量含む。



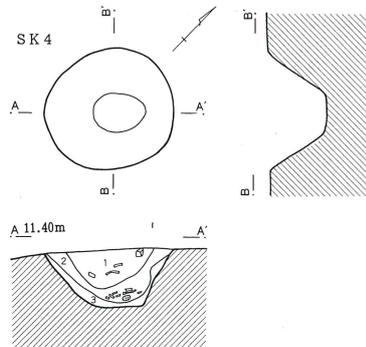
SK 2

- 1 暗褐色土 炭化粒子少量含む。
- 2 褐色土 ローム粒子多量含む。



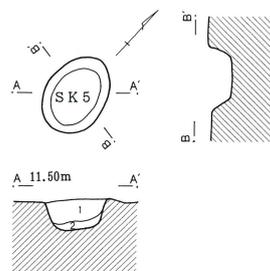
SK 3

- 1 黒褐色土 炭化粒子、ローム粒子少量含む。
- 2 灰褐色土 ローム粒子多量含む。



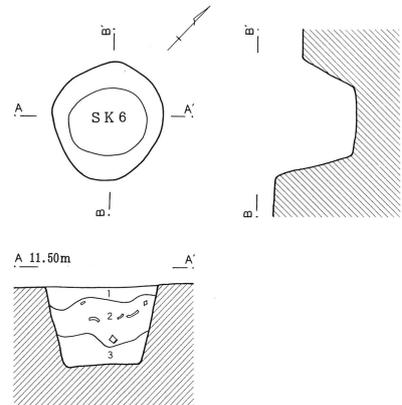
SK 4

- 1 黒褐色土 炭化粒子、ロームブロック少量、ローム粒子多量含む。
- 2 灰褐色土 ローム粒子多量含む。
- 3 褐色土 ローム粒子多量含む。



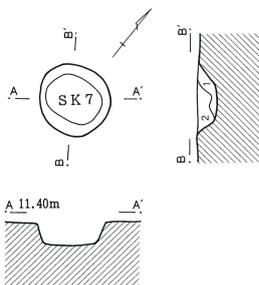
SK 5

- 1 暗褐色土 炭化粒子少量含む。
- 2 褐色土 ローム粒子多量含む。



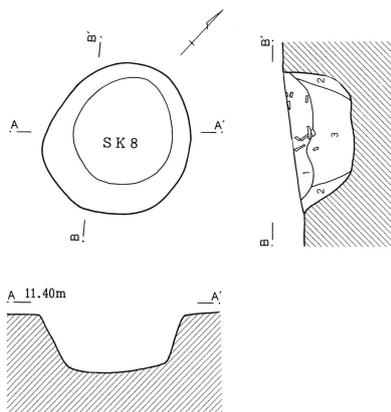
SK 6

- 1 暗褐色土 炭化粒子少量含む。
- 2 黒褐色土 炭化粒子、ロームブロック少量、ローム粒子多量含む。
- 3 灰褐色土 ローム粒子含む。



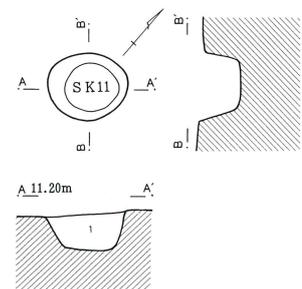
SK 7

- 1 褐色土 ローム粒子多量含む。
- 2 暗褐色土 炭化粒子少量含む。



SK 8

- 1 黒褐色土 炭化粒子多量含む。
- 2 褐色土 ローム粒子多量含む。
- 3 黒褐色土 ローム粒子多量含む。

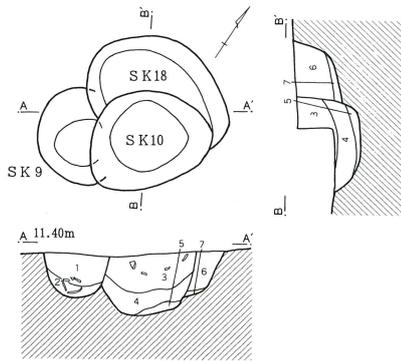


SK 11

- 1 暗褐色土 炭化粒子少量含む。

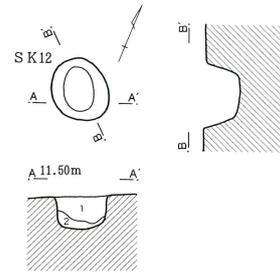


第6図 土壌 (2)



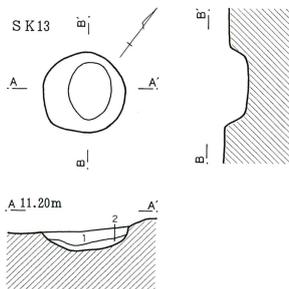
SK 9・10・18

- 1 黒褐色土 炭化粒子少量含む。
- 2 褐色土 ローム粒子多量含む。
- 3 暗褐色土 炭化粒子少量含む。
- 4 黒褐色土 炭化粒子、ロームブロック少量、ローム粒子多量含む。
- 5 褐色土 ローム粒子多量含む。
- 6 暗褐色土 炭化粒子少量含む。
- 7 褐色土 ローム粒子多量含む。



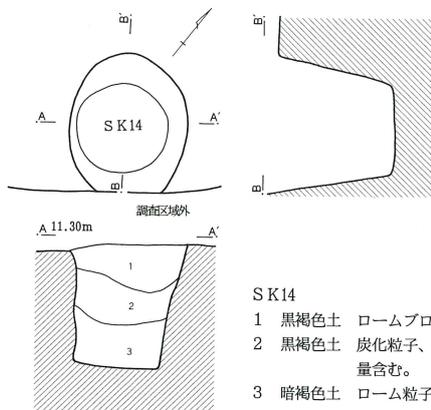
SK12

- 1 黒褐色土 炭化粒子、ロームブロック少量、ローム粒子多量含む。
- 2 褐色土 ローム粒子多量含む。



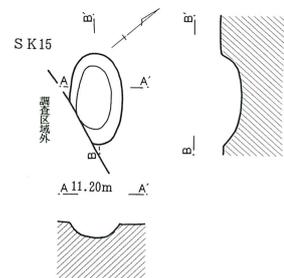
SK13

- 1 暗褐色土 炭化粒子少量含む。
- 2 褐色土 ローム粒子多量含む。

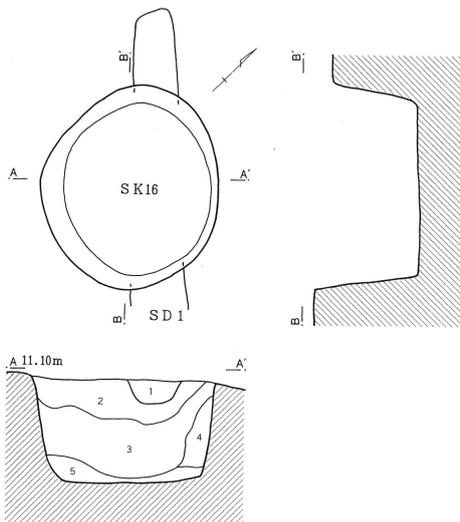


SK14

- 1 黒褐色土 ロームブロック多量含む。
- 2 黒褐色土 炭化粒子、ローム粒子少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子少量含む。

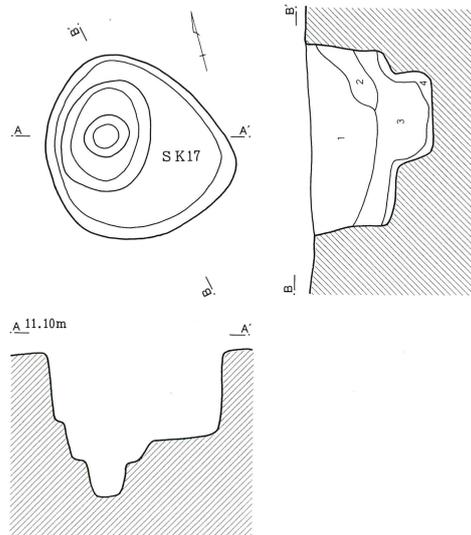


SK15



SK16

- 1 黒褐色土 SD2覆土。ロームブロック多量含む。
- 2 黒褐色土 炭化粒子多量含む。
- 3 黒褐色土 炭化粒子、ローム粒子少量含む。
- 4 暗褐色土 炭化粒子多量、ローム粒子少量含む。
- 5 褐色土 ローム粒子多量含む。

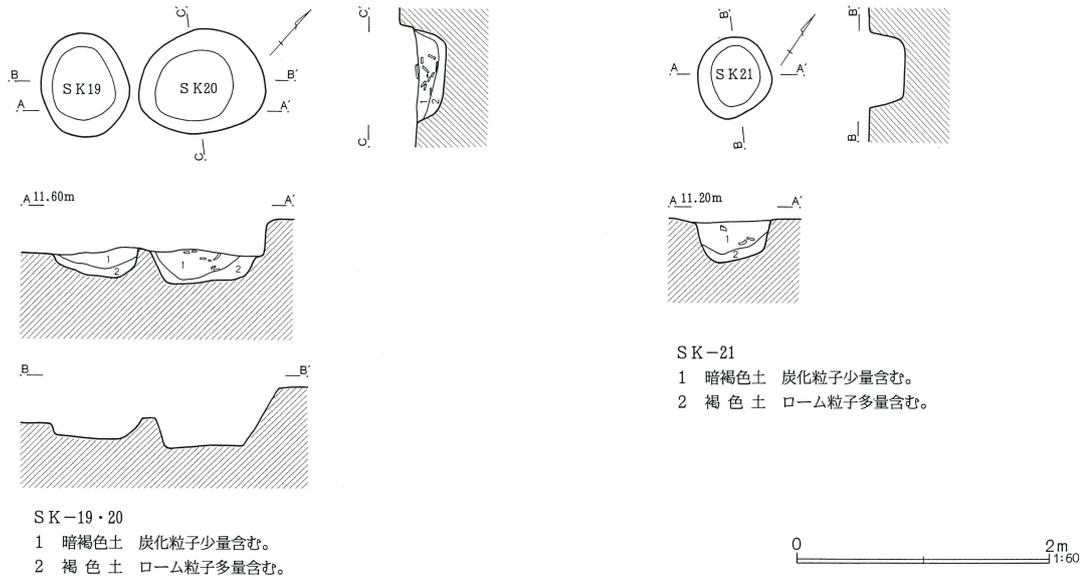


SK17

- 1 黒褐色土 炭化粒子多量含む。
- 2 暗褐色土 炭化粒子多量、ローム粒子少量含む。
- 3 暗褐色土 炭化粒子多量、ローム粒子少量含む。



第7図 土壇（3）



A-3グリッドに位置する。平面プランは楕円形で、底面は3段落ち状を呈する。長径140cm×短径134cm×深さ112cmを測る。

第19号土壇（第7図）

B-3グリッドに位置する。平面プランは楕円形で、底面は皿状を呈する。長径82cm×短径68cm×深さ26cmを測る。

第20号土壇（第7図）

B~C-3グリッドにかけて位置する。平面プランは楕円形で、底面は平坦である。長径98cm×短径82cm×深さ28cmを測る。

第21号土壇（第7図）

C-2グリッドに位置する。平面プランは楕円形で、長径66cm×短径59cm×深さ33cmを測る。

(2) 遺構出土の遺物

出土遺物の大半は縄文土器と石器であり、遺構出土遺物の説明に当たって、縄文土器を以下の様に大まかに分類した。項目の詳細に付いては、グリッド出土土器の分類に譲る。

第I群土器

早・前期の土器群。

第II群土器

中・後期の加曾利E式系土器群。

第III群土器

後期初頭の称名寺式系土器群。

第IV群土器

後期前葉の堀之内I式系土器群。

第V群土器

堀之内I式終末からII式系にかけての土器群。

第VI群土器

縄文系土器群。

第VII群土器

条線文系土器群。

第VIII群土器

無文系土器群。

第1号土壇出土遺物（第8図1~26）

1は口縁部を断面三角の隆起線で区画する加曾利E系のII群土器で、緩やかな波状を呈する。

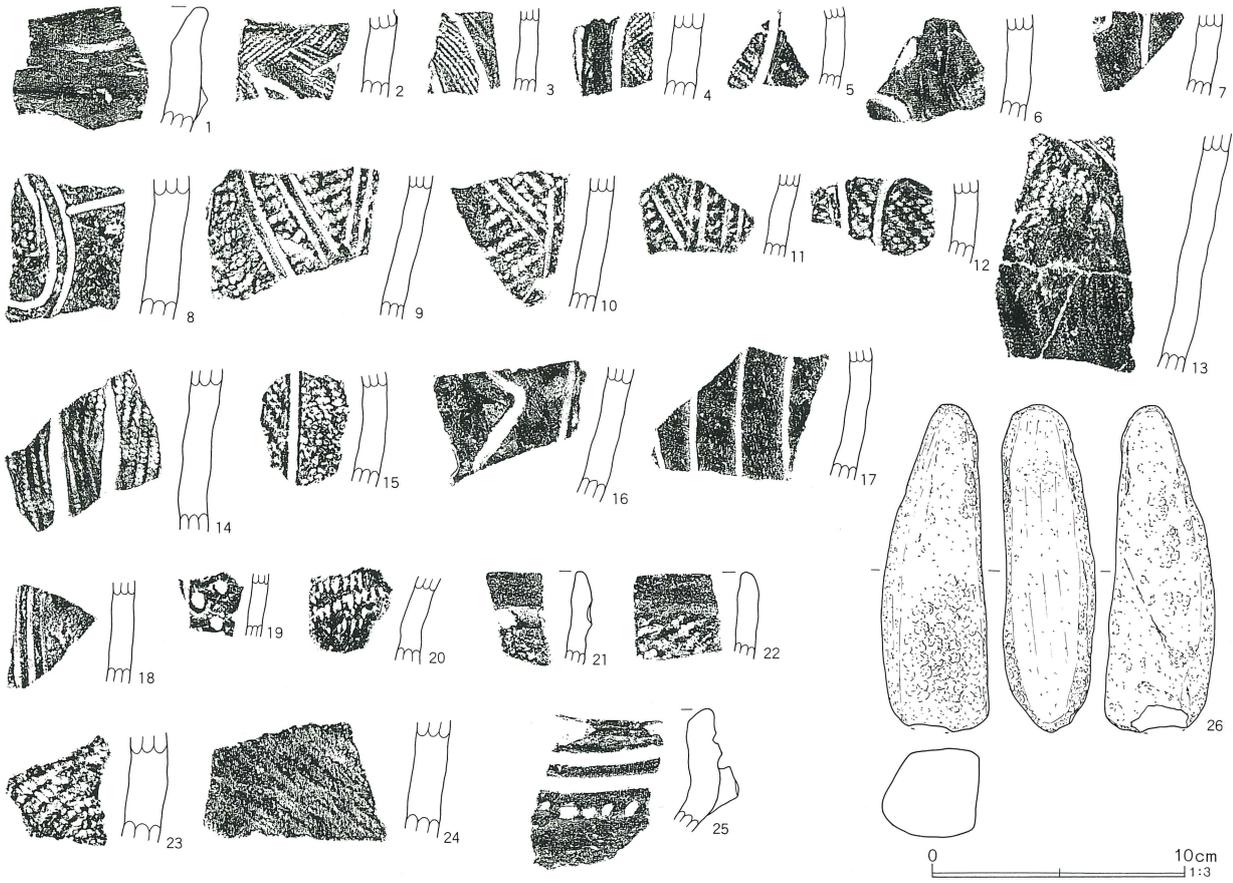
2~5は縄文を施文する称名寺系のIII群土器で、縄文は全て単節LRの充填縄文である。

6~18は堀之内I系のIV群土器で、6、7、16~18は無文上に沈線の懸垂するモチーフを描く。6は上下対のU字状沈線文を施文し、16は蛇行沈線を垂下する。

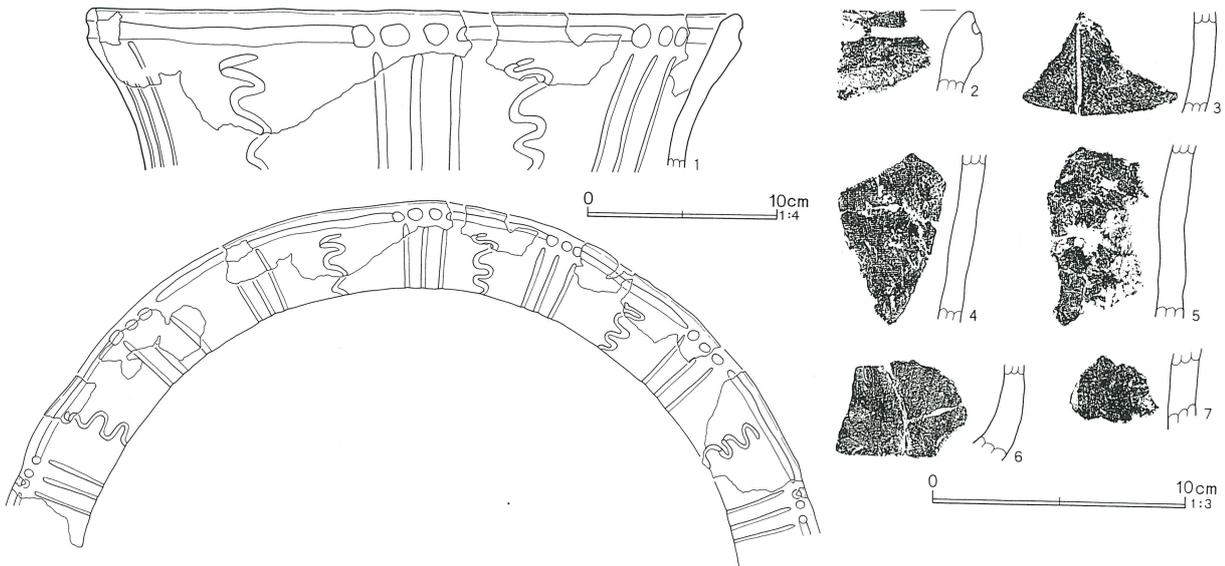
8~15は地文縄文上に沈線で垂下文系のモチーフを描

第8图 土壤出土遺物 (1)

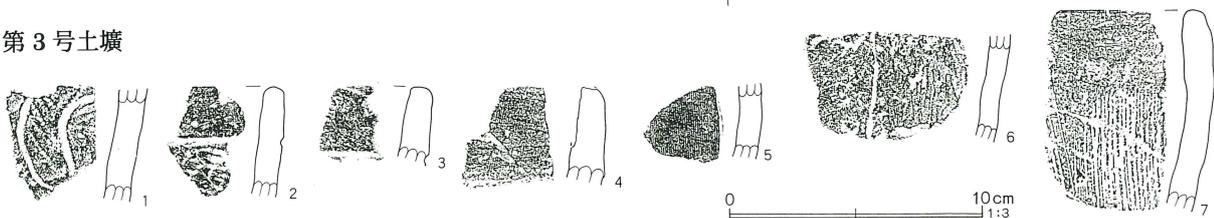
第1号土壤



第2号土壤



第3号土壤



く。8は楕円形のモチーフを連結し、9～11は懸垂文に斜行沈線を連結するモチーフを描く。19は沈線懸垂文と複列の刺突文を施文するもので、Ⅲ群の可能性もあるが、Ⅳ群段階のものと判断した。

20は櫛歯状の刺突文であるが、条線文と組み合わせられて施文されているため、Ⅶ群の条線文土器として分類した。21～23は縄文のみ施文されているⅥ群土器で、21は口縁部に盲孔を繋ぐ浅い沈線が巡る。24は無文のⅧ群土器である。

25は浅鉢、もしくは胴部の括れる小仙塚系の口縁部破片と思われるⅣ群土器である。

26は敲石で、縦12.9cm、横4.4cm、厚さ3.8cm、重さ278.6gを測る。

第2号土壙出土遺物(第8図1～7)

1はⅣ群の深鉢形土器で、沈線のみ懸垂文系土器である。口縁部がやや開き、胴部がやや括れる器形で、口縁部の約7割程度が現存する。口縁部は3孔対の盲孔を6単位に配し、盲孔下に3本沈線を懸垂させ、懸垂文間に蛇行懸垂文を垂下させている。推定口径39cm、現存高8cmを測る。

2は1に類似する口縁部破片である。3は浅い沈線が垂下する破片で、7にも沈線が見られる。4、5は無文であるが、1の無文部である可能性が高い。6は底部付近の破片である。

第3号土壙出土遺物(第8図1～7)

1～7は称名寺系のⅢ群土器と思われ、1は沈線の曲線モチーフ内に充填縄文を施文する。2～3は口縁部に沈線が巡り、胴部に縄文を施文する土器である。2は胴部に単節LR縄文を縦位施文する。称名寺段階のこのタイプの土器は、縄文の縦位施文が特徴となる。5は基面が良く研磨された土器で、沈線部分で割れている。6は無文土器、7はⅦ群の条線文系土器であるが、口縁部に沈線を施文しないものの、称名寺段階の可能性が高い土器である。

第4号土壙出土遺物(第9図1～20・第10図21～23)

1は双頭の山形把手が3単位に付く、平口縁の深鉢形土器である。把手下に蛇行沈線懸垂文が垂下して、

胴部を3単位に分割し、懸垂文間に斜行する沈線文と、その間に挟まれた入り組み沈線文を施文する構成を採る。口縁部には弧状沈線文を施文する。堀之内Ⅰ系のⅣ群土器で、無地文の懸垂文系土器である。推定口径約21cm、現存高20.5cmを測る。

3は称名寺系の縄文土器で、Ⅲ群土器である。

4～20は堀之内Ⅰ系のⅣ群土器である。4、5は同一個体と思われる深鉢形土器で、口縁部を2本沈線で区画し、盲孔を持つ円形貼付文と、円形刺突文を上下に施文する。モチーフの沈線区画内に縄文を施文し、胴部は列点文を挟む沈線懸垂文を垂下して区画する。口縁部の円形貼付文は、その上の円形刺突文と一緒に、8字状添付文の祖型を彷彿させる。

6～8は深鉢の口縁部であるが、6、7は胴部が大きく括れ、文様帯が分割される小仙塚系の土器と思われ得る。6は口縁の山形突起を中心にして、非対称の沈線モチーフが展開する。7は口縁下端部に斜位の刻みを施し、8は円孔を中心に、左右に盲孔を配し、浅い沈線を巡らせる。

9、10は堀之内Ⅰ式の縄文系土器で、胴部には縄文地文上に蕨手状沈線文を垂下する。9は頸部を沈線で区画し、10は口縁部に盲孔を繋ぐ沈線を巡らす。

11～17は無文系のⅧ群土器であるが、11の口縁外端部には、幅広工具による円形状の連続押し引き刺突文を施文する。

20は橋状把手の付く壺形土器で、把手の付け根部分の上下に盲孔を穿ち、上端部では左右に沈線を繋ぐ盲孔を配置している。把手の下端部から、垂下する沈線と、斜行沈線を施文する。

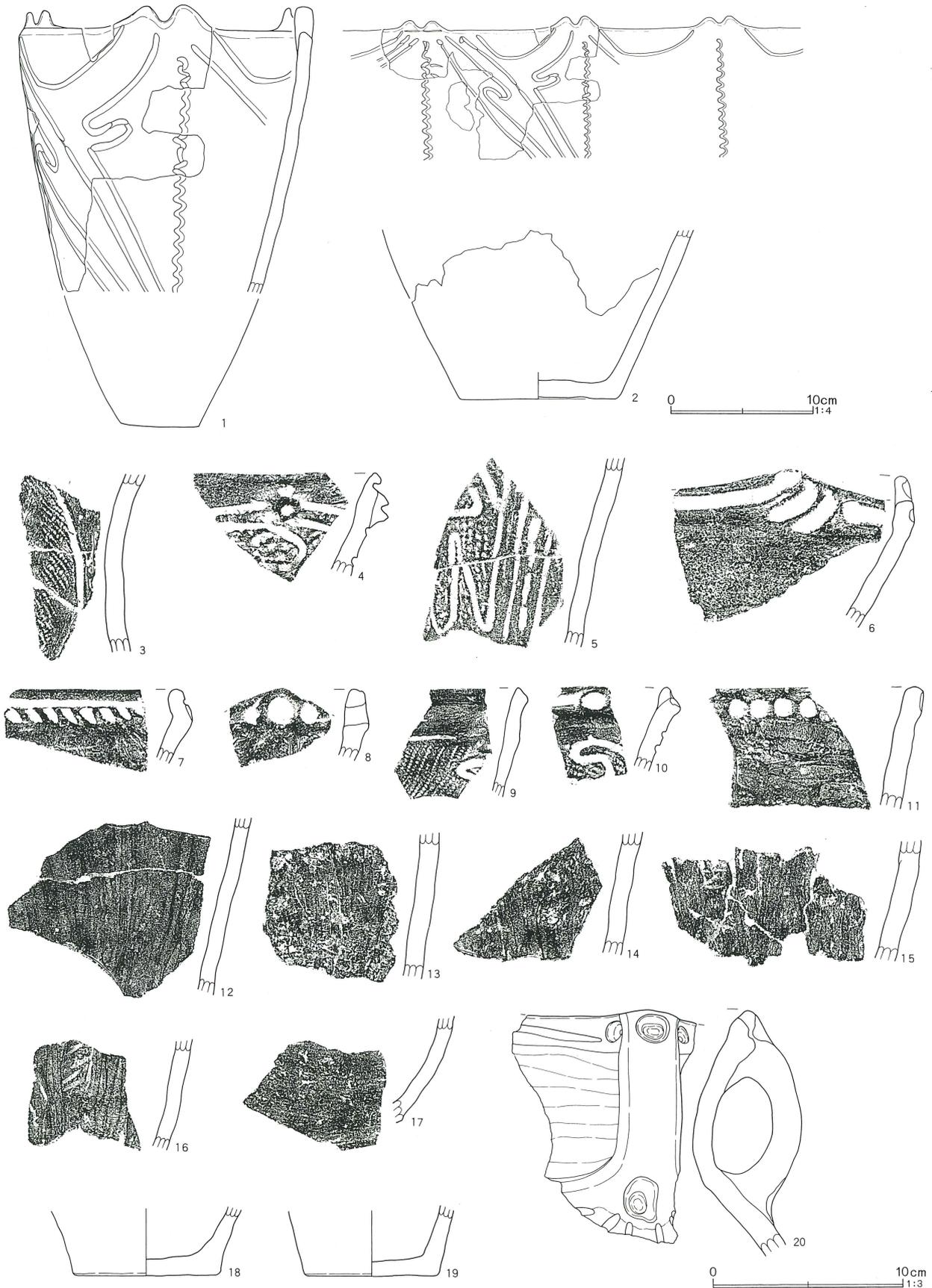
2、18、19は底部で、2は底径11.2cm、現存高12cmを測る。18は底径8cm、19は推定底径7cmを測る。

石器は3点出土した。21は閃緑岩製の石皿で縦15.6cm、横16.7cm、厚さ3.7cm、重さ1215.8gを測る。22、23は磨石で、22は閃緑岩製で、欠損するが縦5.7cm、横7cm、厚さ2.6cm、重さ109.8gを測る。23は安山岩製で、縦14.2cm、横6.2cm、厚さ4.3cm、重さ658.4gを測る。

第5号土壙出土遺物(第10図1～4)

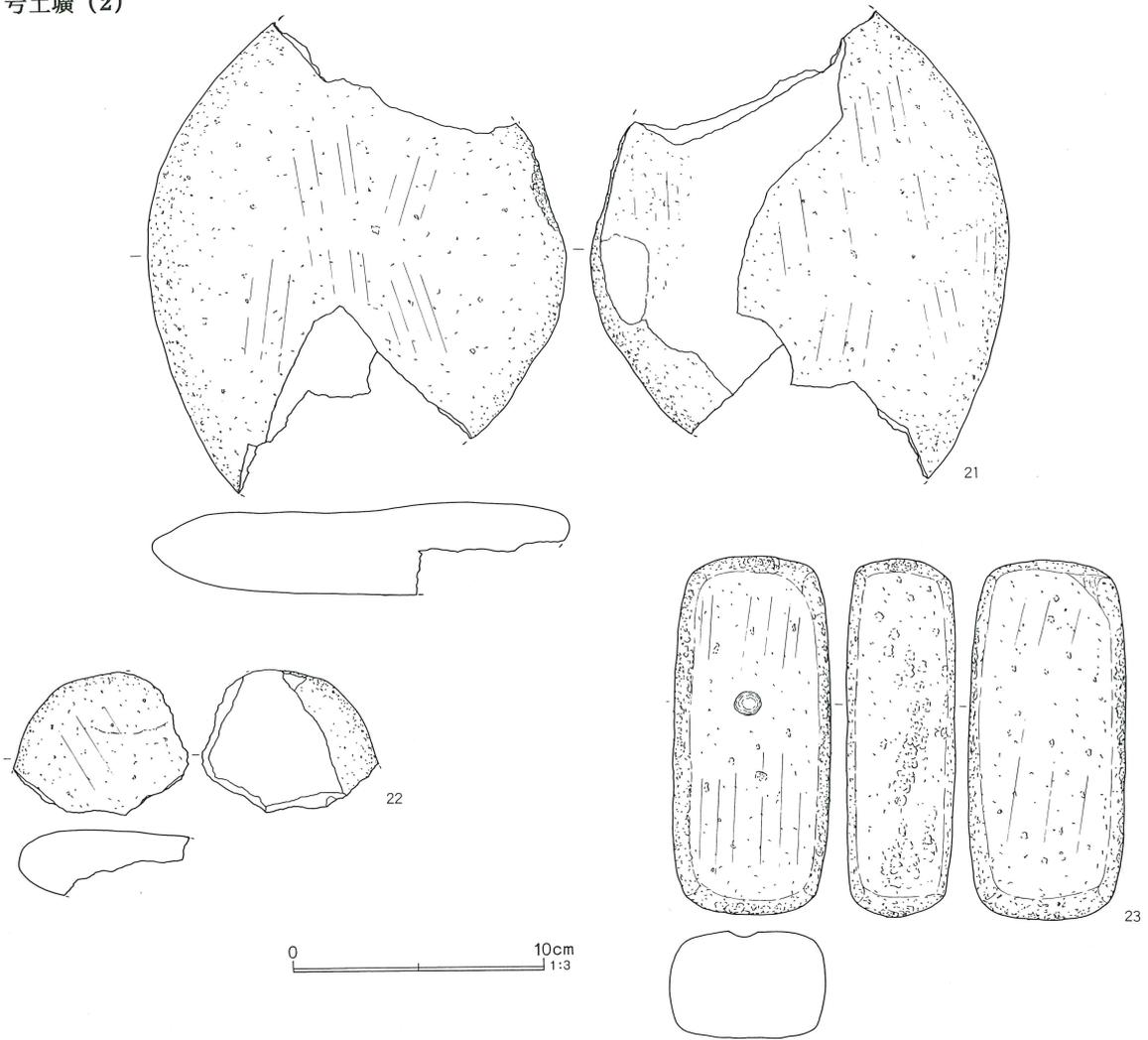
第9图 土壤出土遺物(2)

第4号土坑(1)

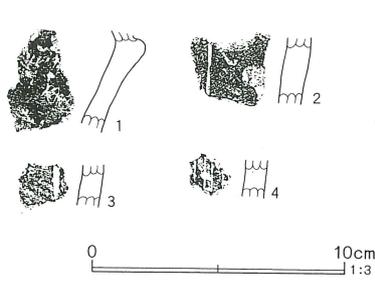


第10図 土壙出土遺物 (3)

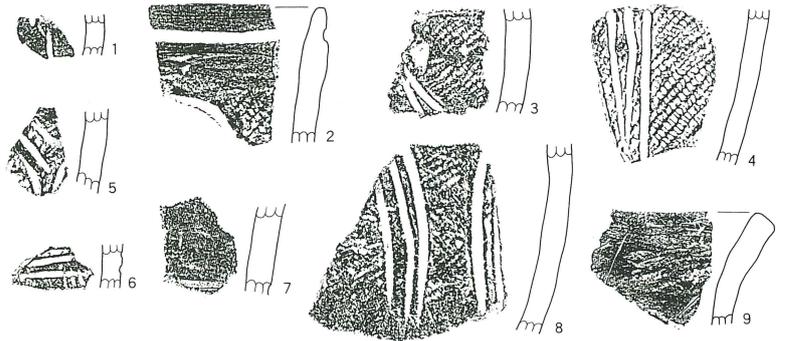
第4号土壙 (2)



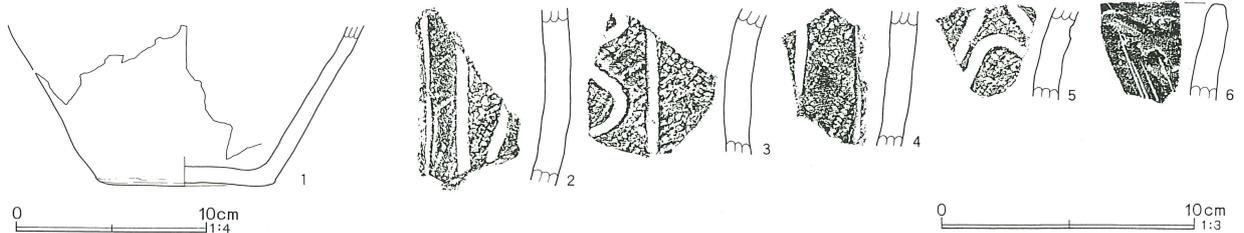
第5号土壙



第7号土壙



第9号土壙



土器の碎片のみ出土した。1～4はⅣ群土器で、1は口縁部に沈線を巡らす深鉢形土器である。2は沈線系の土器で、沈線懸垂文が垂下する。3は縄文系の土器で、垂下沈線と縄文を施文する。4はⅦ群の条線文系土器である。

第6号土壙出土遺物（第11図1～12）

1は胴部が大きく膨れるⅣ群土器で、堀之内Ⅰ式系の無地文懸垂文系の深鉢形土器である。口縁部の4分の1程が現存し、大小対の楕円区画文の組合わせで口縁部文様帯が構成される。口縁は小楕円区画の起点部を頂点として、4単位の緩い波状縁を呈するものと思われ、波頂部下に3本単位の蛇行沈線懸垂文を垂下し、波底部下に3本単位の沈線懸垂文を垂下する。大きな土器で、推定口径約43cm、現存高31cmを測る。

3も1同様懸垂文系土器で、口縁部に盲孔を繋ぐ沈線を巡らし、胴部に3本単位の沈線懸垂文を垂下する。

4～6は同一個体で、縄文のみ施文するⅥ群土器で、口縁部に円形の盲孔列を巡らせる。縄文は浅い単節LRである。7は単節LRのみ施文する縄文土器である。

9、10は胴部が括れ、文様帯を分割する小仙塚系の深鉢形土器で、同一個体と思われる。9は口縁部に盲孔を繋ぐ沈線を巡らせ、10は胴部に3本沈線の横位連結するモチーフを施文する。単節LRを施文する。

11は口縁部が「く」字状に屈曲する浅鉢で、口縁部に沈線の楕円区画を施す。

12は橋状把手の付く壺形土器で、把手上面に盲孔を繋ぐ沈線を施文する。口縁内面は、蓋の受口状を呈する。

2は無文のⅧ群土器で、推定口径約25cm、現存高31.2cmを計る。8は無文のミニチュア土器で、粗いケズリで器面整形が成される。推定口径約6.5cm、器高7.2cmを測る。

第7号土壙出土遺物（第10図1～9）

全て堀之内Ⅰ式系のⅣ群土器である。1は沈線のみ垂下する懸垂文系土器、2～8は縄文系、6～8は小仙塚系である。2は口縁部に沈線が巡り、胴部に蕨手状懸垂文を垂下する。3、5は斜行する沈線を、4は

3本懸垂文を縄文地文上に施文する。8は胴下半部の破片で、「U」字状に対向垂下する3本沈線懸垂文を、単節LR地文上に施文する。9は口縁部が大きく外反する無文のⅧ群土器である。

第8号土壙出土遺物（第12図1～31・第13図32～49）

3～16は称名寺系のⅢ群土器で、16以外は縄文系の土器である。4は刻みを施す隆帯が垂下して、胴部を分割する。16は沈線区画内に、条線を施文するものである。

1、2、17～31は堀之内Ⅰ式系のⅣ群土器である。1は壺形土器の胴部破片と思われ、頸部付近に区画沈線と派生するモチーフが描かれる。現存推定最大径は約43cm、現存高24cmを測る。

17は口縁部に円形把手が付き、盲孔のまわりを沈線が巡る。18から22は胴部の括れる小仙塚系の土器群で、18は円形貼付文を起点とした曲線文を描く。19は3本沈線間を磨消す沈線文でモチーフを連結する。20は口唇部直下の盲孔から、低隆帯が垂下する。22は胴部モチーフが多条沈線化しており、Ⅴ群になる可能性もある。

23～31は縄文系の土器群で、23、25、26は口縁部に盲孔を繋ぐ沈線が巡る。24は波状口縁で、波頂部から沈線懸垂文を垂下する。27～31は縄文地文上に沈線懸垂文を垂下する。

2は底部のみ現存し、底径9.6cm、現存高9.5cmを測る。

32～34は沈線の懸垂文系土器で、32、33は太い蛇行沈線を垂下し、34は沈線懸垂文を垂下する。

35～40は条線文系のⅦ群土器で、36、39はやや間隔を開けて施文し、37は格子目状に施文する。

41～47は縄文系のⅥ群土器、48は無文系のⅧ群土器である。

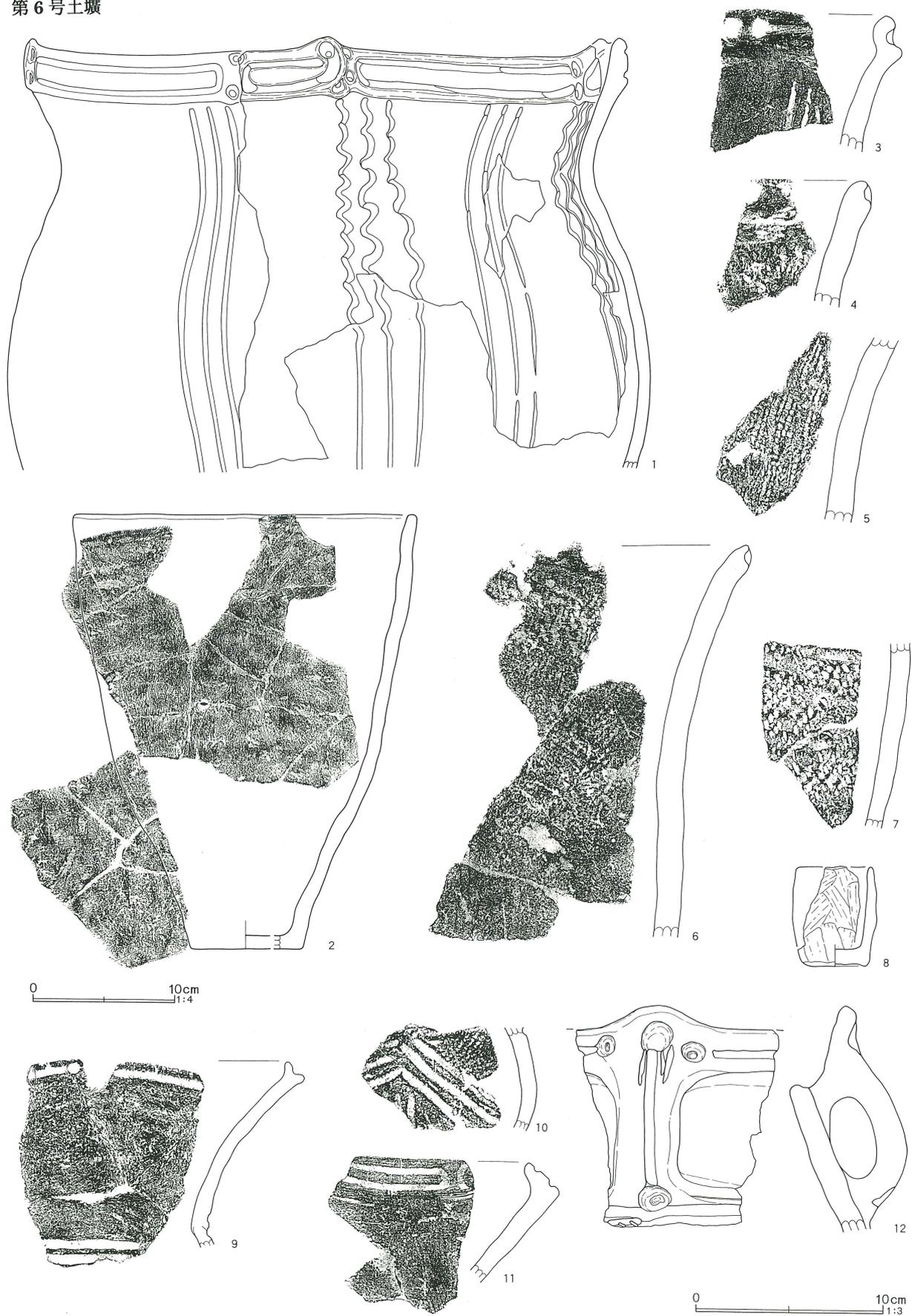
49は耳飾で、約3分の1程が現存する。整形はケズリ状で粗いが、薄く仕上げられた耳飾である。推定径5.7cm、厚さ0.45cmを測る

第9号土壙出土遺物（第10図1～6）

全て堀之内Ⅰ式系のⅣ群土器である。2～5は縄文

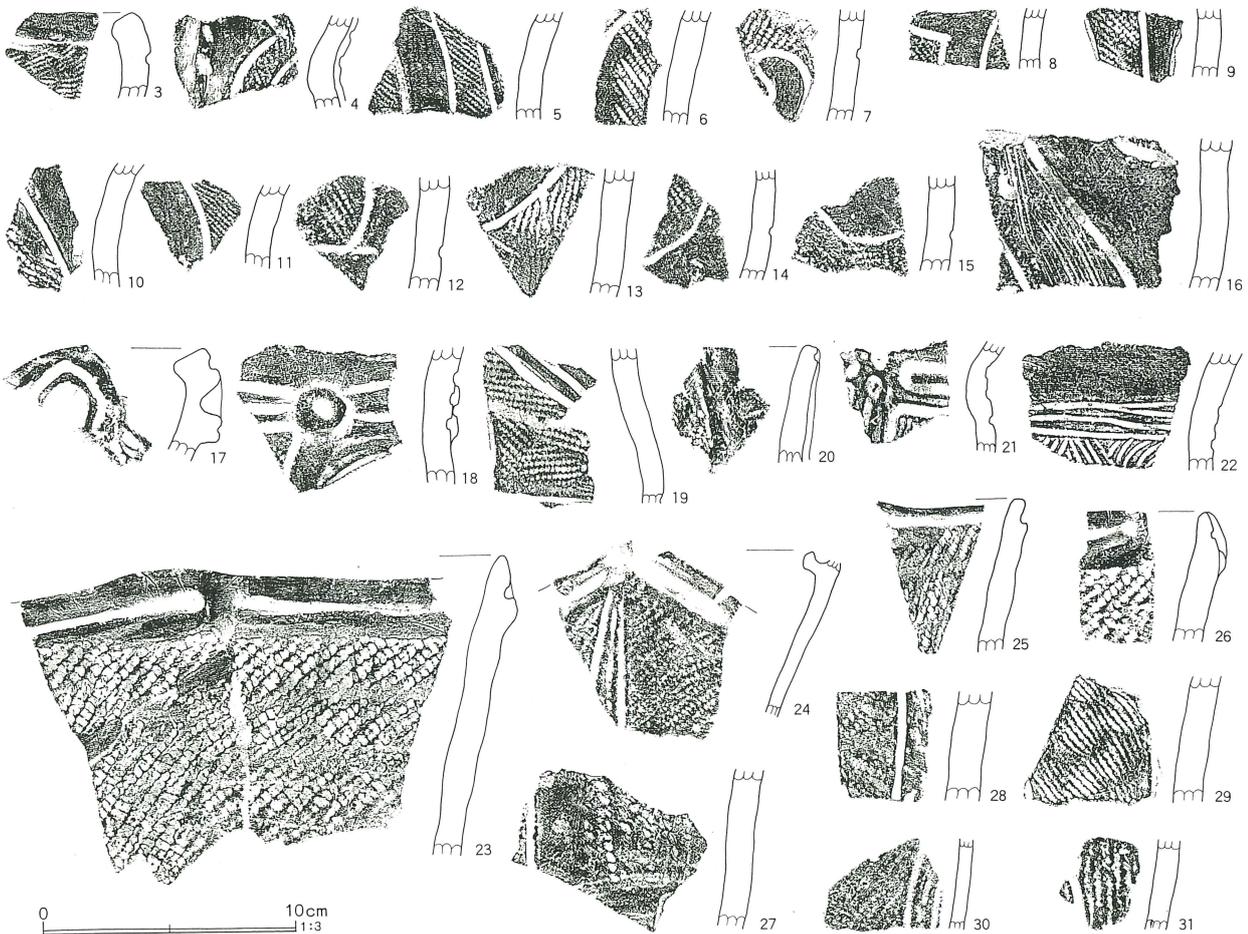
第11图 土壤出土遺物 (4)

第6号土壤



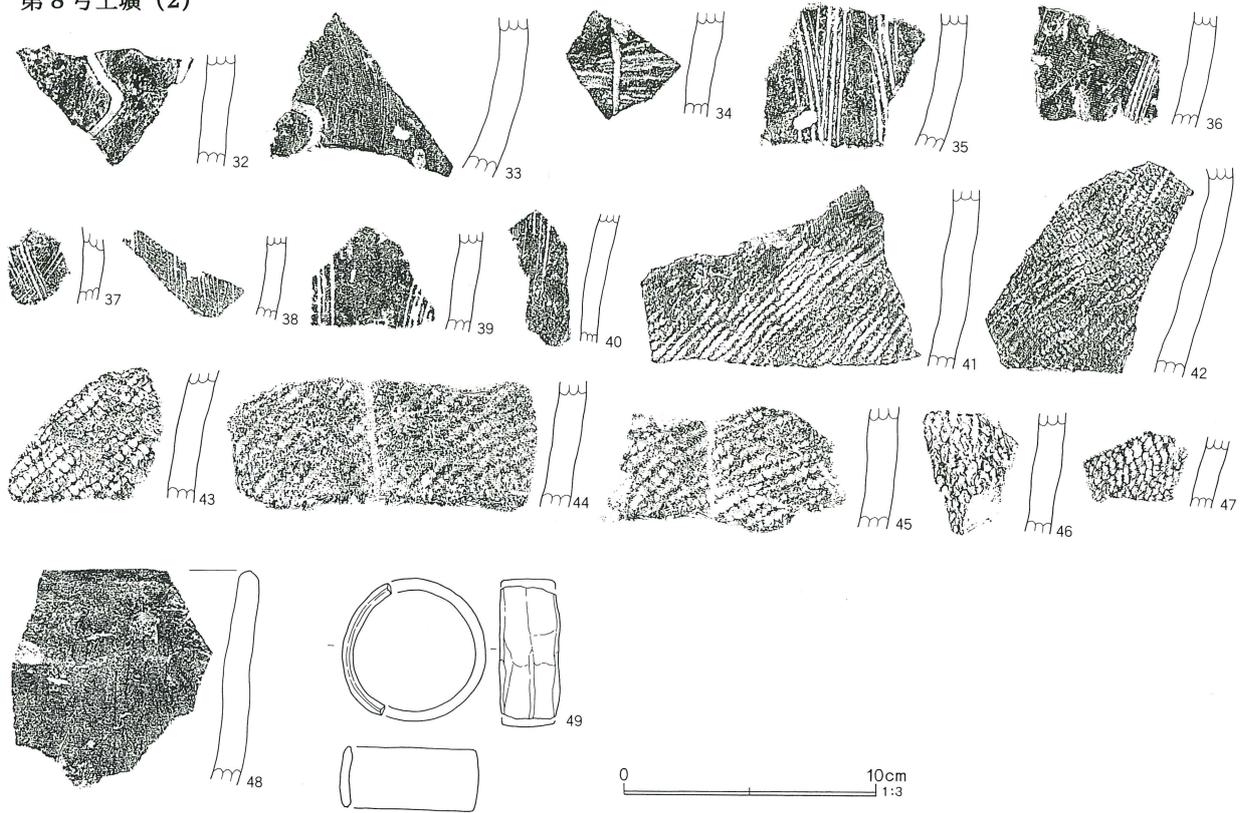
第12图 土壤出土遺物 (5)

第8号土壤 (1)

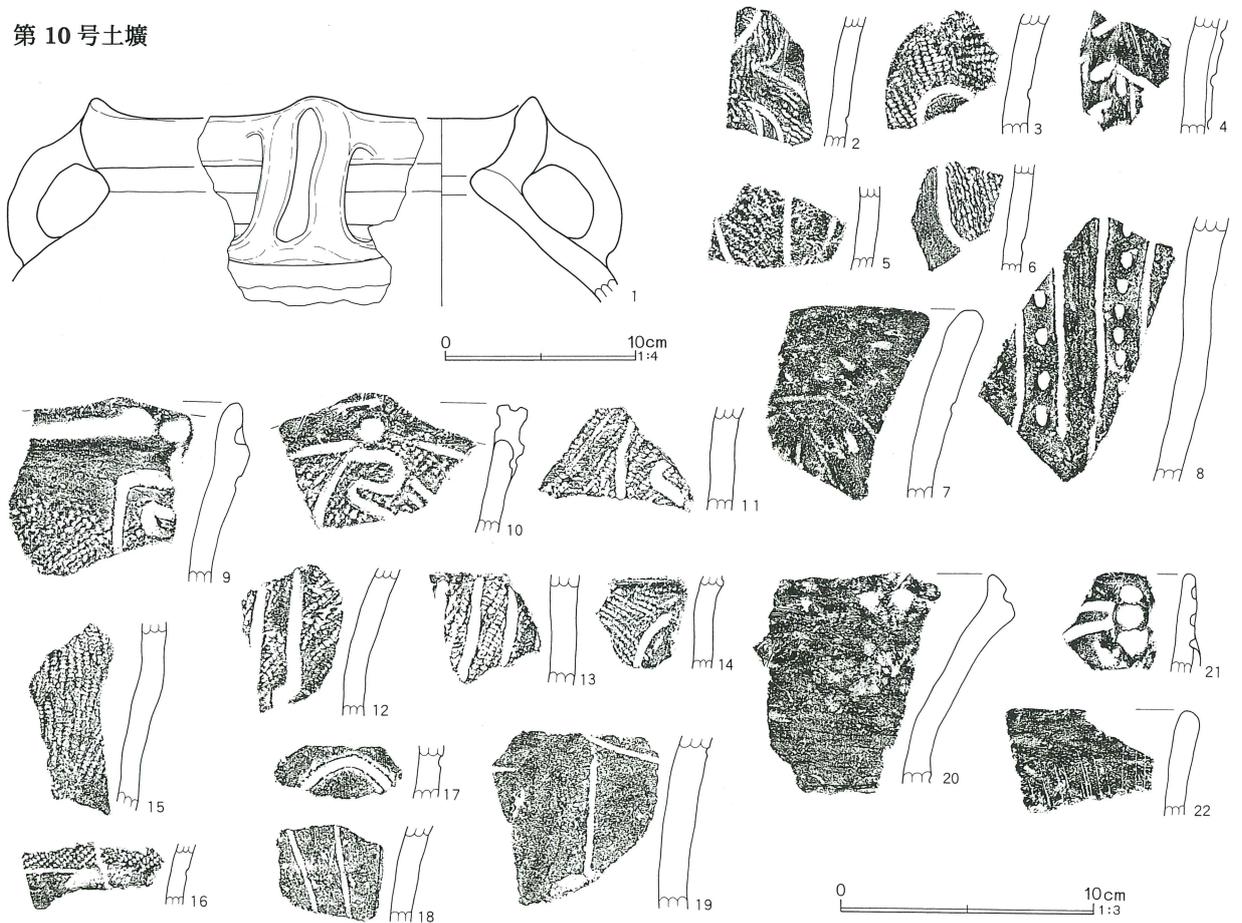


第13图 土壤出土遗物(6)

第8号土壤(2)



第10号土壤

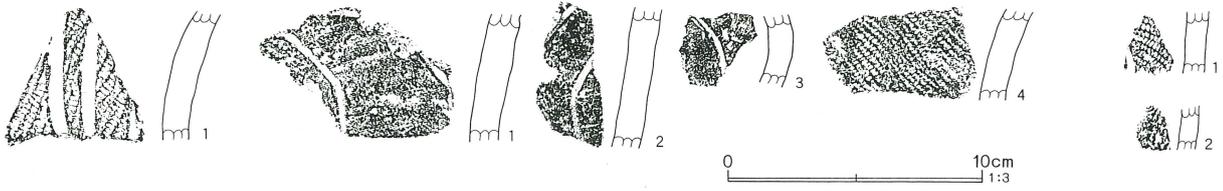


第14图 土壤出土遺物 (7)

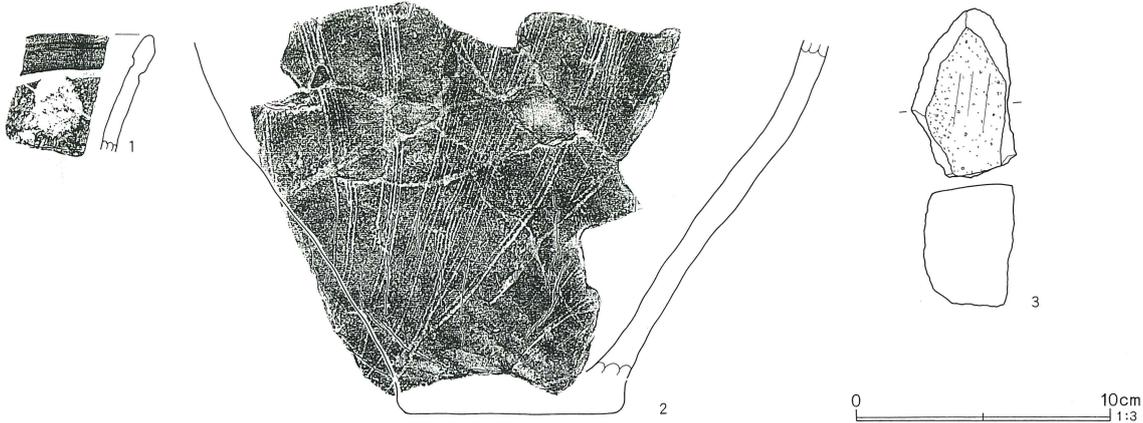
第 11 号土壤

第 12 号土壤

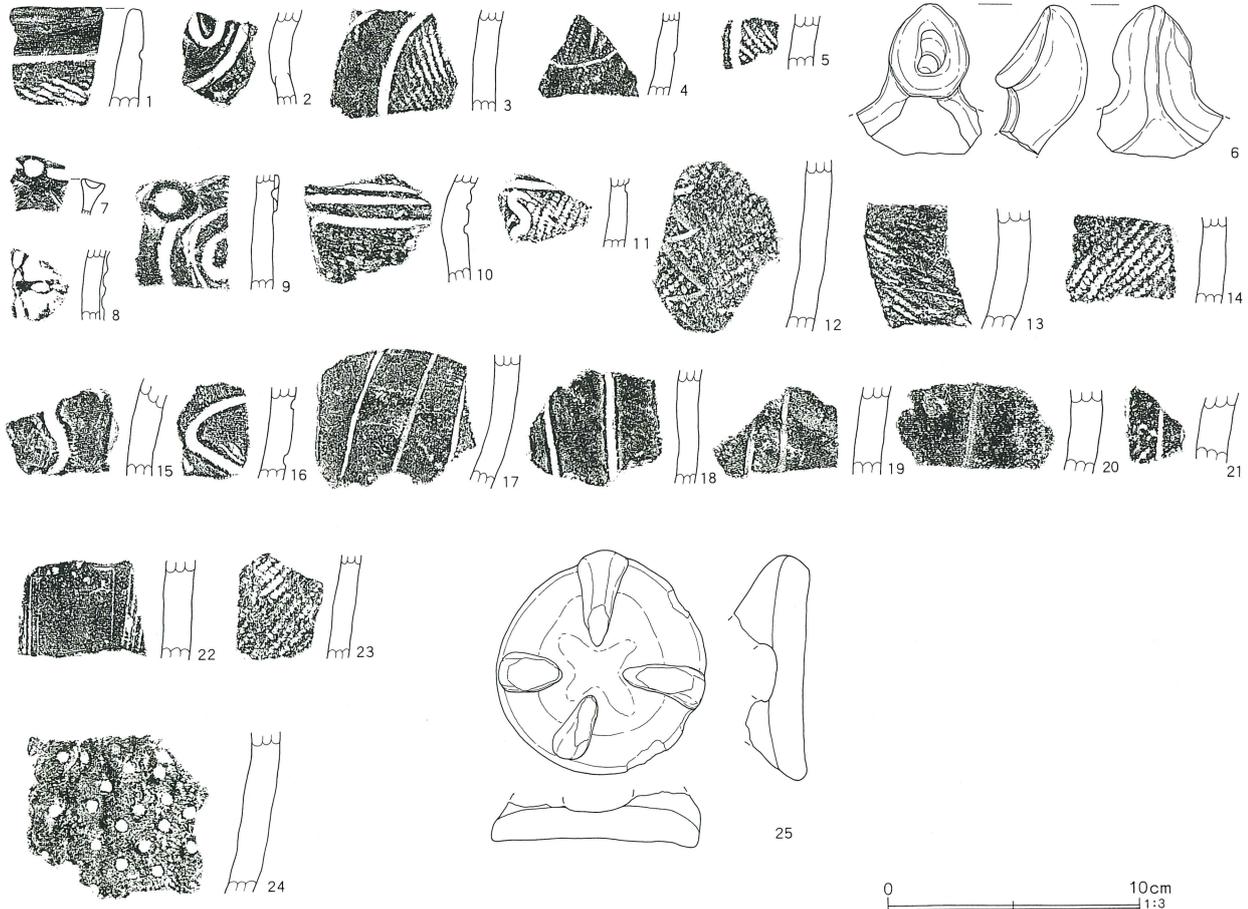
第 13 号土壤



第 14 号土壤



第 15 号土壤



系で、縄文地文上に懸垂文や蛇行沈線を垂下させる。6は、条線文系のⅦ群土器である。1は無文の底部で、底径9.5cm、現存高8.4cmを測る。

第10号土壙出土遺物（第13図1～22）

1はⅣ群の橋状把手付きの壺形土器で、口縁部の破片から復元した。口縁部は把手部分が突起状に突出した緩い波状口縁を呈し、把手上面に縦位の凹線状の沈線を施文する。口縁部内面には、蓋の受け口状の凸帯が巡る。推定口径23.5cm、現存高11.2cmを測る。

2～8は称名寺系のⅢ群土器である。2、3、5、6は縄文系の土器群で、4は刻みを施す隆帯が垂下する。7、8は列点文系の土器群で、沈線区画内に7は押引状の長い列点、8は短い単列の列点を充填施文する。

9～15、17～22は堀之内Ⅰ系のⅣ群土器である。9～15は縄文系の土器群で、縄文地文上に沈線懸垂文を垂下させる。9、10は緩い波状口縁を呈し、口縁部に沈線を巡らせ、波頂部下に蕨手状の沈線懸垂文を垂下する。縄文は全て単節LRである。

17～19は沈線文系の土器群で、17は胴部に曲線文を、18は垂下する沈線文を、19は称名寺に系譜を引くモチーフを施文する。

20、21は胴部が括れる小仙塚系の土器群で、20は口縁部に3孔対の盲孔を施文する。21は口縁部に盲孔が縦位に3孔穿たれ、垂下する隆帯に繋がっている。22は条線を施文する、Ⅶ群土器である。

16は堀之内Ⅱ式系のⅤ群土器で、胴部を横位沈線で区画し、単節LRの磨消縄文を施文する。

第11号土壙出土遺物（第14図1）

図示し得たものは1点のみであるが、堀之内Ⅰ系のⅣ群土器である。縄文系で、縄文単節LR地文上に、太い沈線で垂下するモチーフを描く。

第12号土壙出土遺物（第14図1～4）

全て堀之内Ⅰ系のⅣ群土器で、沈線系の土器群と思われる。1、2は同一個体で、称名寺系の沈線モチーフを描く。3も同様に、沈線の曲線モチーフを描く。4は縄文を施文するⅥ群土器で、単節LRを縦位施文

する。4の縄文施文を参考にすると、Ⅲ群に位置付けられる可能性もある。

第13号土壙出土遺物（第14図1、2）

1、2ともⅣ群土器で、縄文系の破片である。1は縄文地文上に沈線文を施文する。2は細片で、詳細は不明である。

第14号土壙出土遺物（第14図1～3）

1は器面が良く研磨されており、光沢を帯びている。表面の器面が剥落しているため詳細は不明であるが、裏面に沈線が巡るため、Ⅴ群土器と思われる。

2は条線を施文するⅦ群土器で、底部付近の大形破片である。堀之内Ⅰ式段階と思われる。

3は安山岩製の石皿の破片で、縦6.7cm、横4cm、厚さ4.9cm、重さ148.4gである。

第15号土壙出土遺物（第14図1～25）

1～6は称名寺系のⅢ群土器で、縄文系の土器群である。1は口縁部を沈線で区画し、胴部に無節Lを縦位施文する。2～5は沈線の曲線区画内に縄文を充填施文する。6は把手で、称名寺式の終末から堀之内Ⅰ式の初頭にかけての土器である。胴部が括れる器形を呈する。

7～23は堀之内Ⅰ系のⅣ群土器で、7～10は胴部の括れる小仙塚系土器である。7は口唇上に盲孔を繋ぐ沈線が巡り、8は押圧を施す隆帯で胴部を区画し、口縁部からも垂下する。9、10は沈線で胴部を区画し、環状貼付文を起点として渦巻状のモチーフを施す。

11～14は縄文系の破片で、11、12は縄文地文上に蛇行沈線文を垂下する。13、14は沈線懸垂文を施文することが、破片の割れ口から判断される。

15～21は沈線文系の土器群で、15、16は蛇行懸垂文、17～21は沈線懸垂文を垂下する。

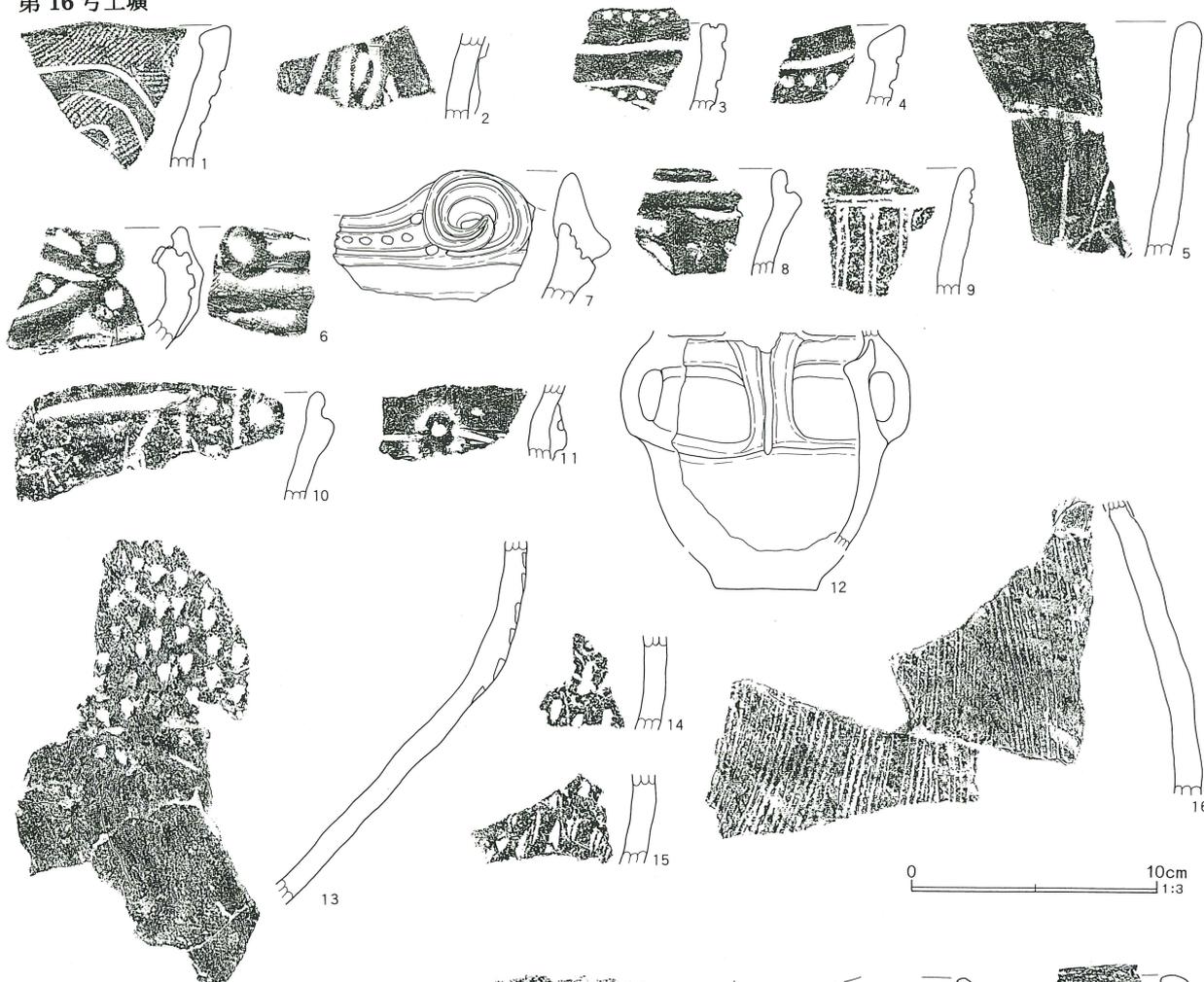
22は条線文を施文するⅦ群土器、23は縄文を施文するⅥ群土器である。

24は器面全面に円形刺突文をランダムに施文するもので、北陸の三十稲場式系の土器である。

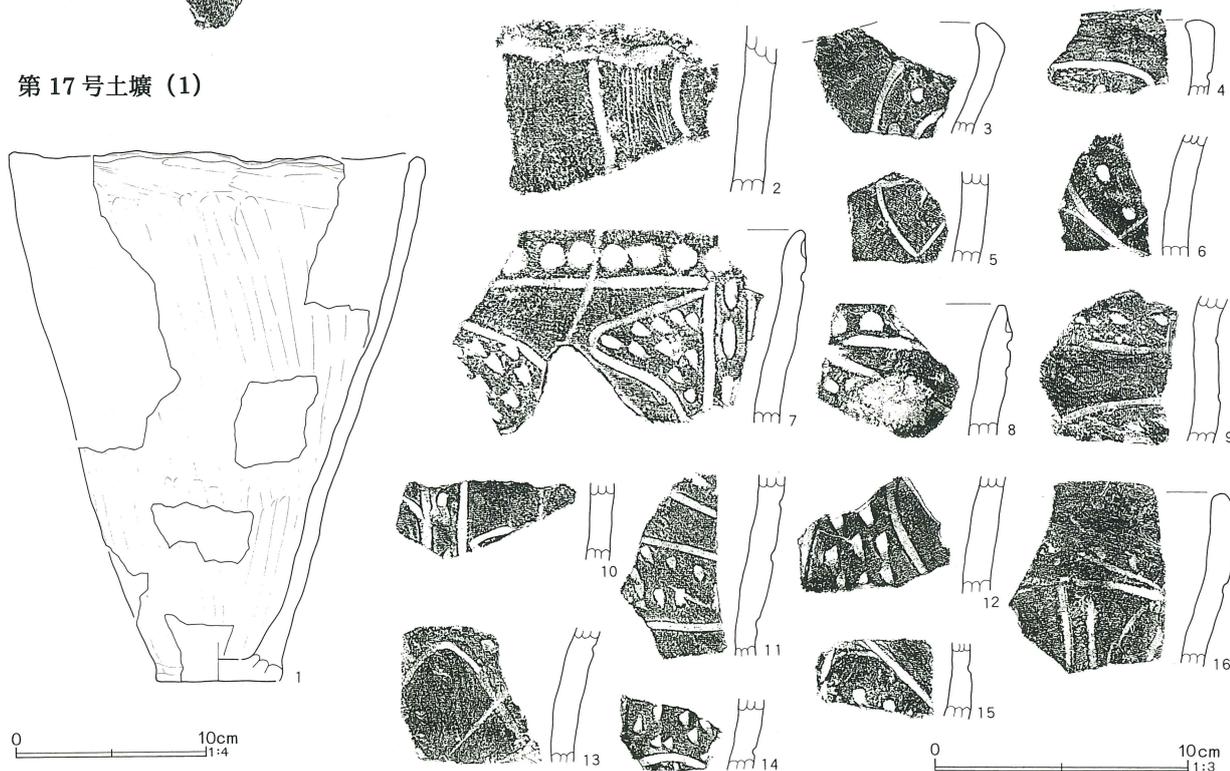
25は土製の蓋である。4方向から把手が付き、合わせ部分はずつまみ状になるが、欠損する。ほぼ円形で、

第15图 土壤出土遺物 (8)

第16号土壤

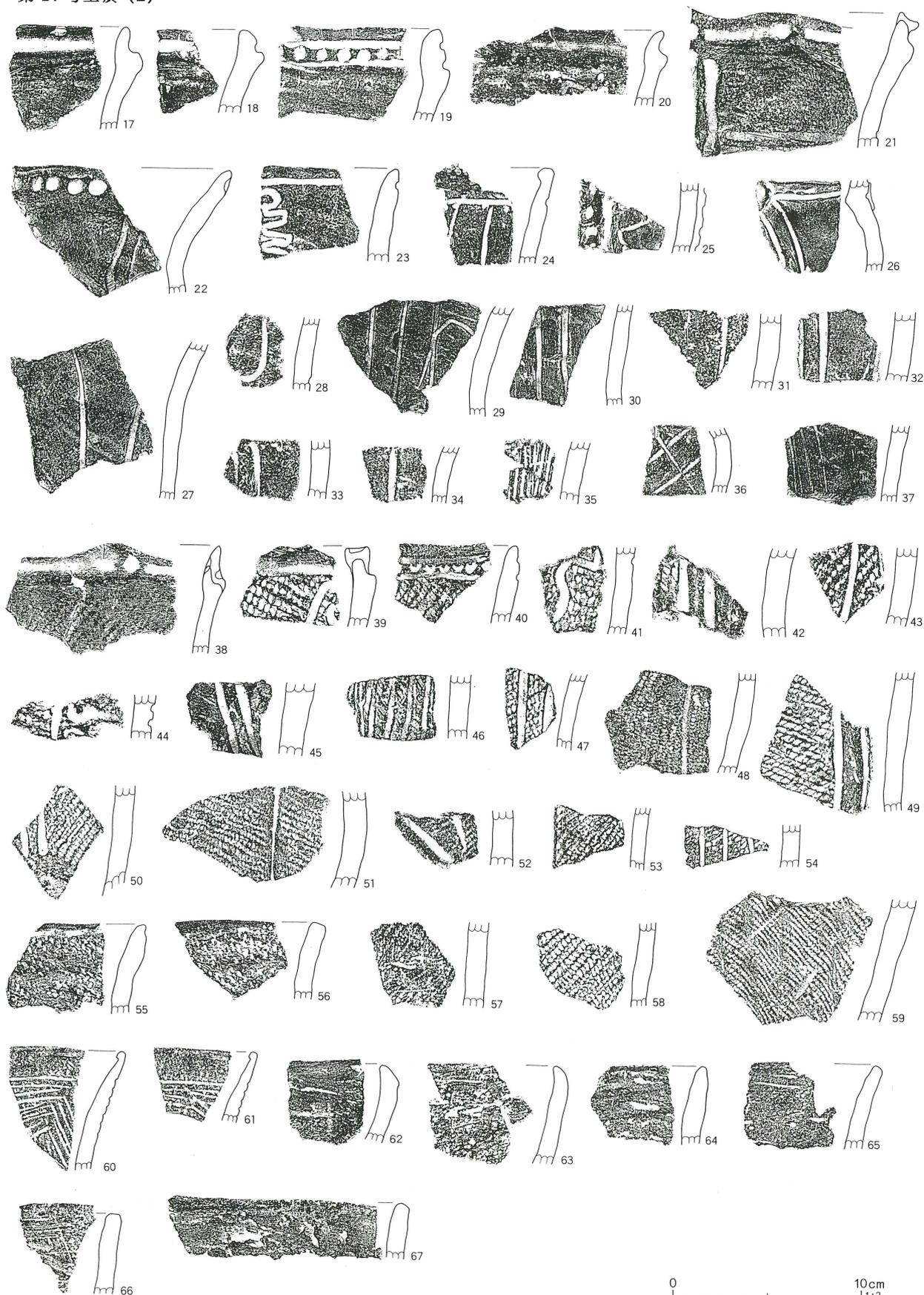


第17号土壤 (1)



第16図 土壙出土遺物 (9)

第17号土壙 (2)



つまみ部分は中心をはずす様である。長径9cm、短径8.1cmを測る。

第16号土壇出土遺物（第15図1～16）

1～5は称名寺系のⅢ群土器である。1、2は縄文系の土器群で、1は沈線の渦巻文内に、充填縄文単節LRを施す。口唇部は内側に突出する。2は押圧を施す隆帯を垂下する。3、4は列点系の土器群で、沈線区画内に円形刺突文列を充填施文する。3は角頭状の口唇部上にも、円形刺突文列を施す。5は沈線で口縁部を区画し、沈線の崩れたモチーフを描くものと思われる。

6、7、10、11は胴部の括れる小仙塚系の土器で、6、7は口縁部文様帯が発達し、6は環状貼付文を多用し、7は口縁部文様帯の沈線区画内に列点文を施文する。10は口縁部に盲孔を繋ぐ沈線が巡り、11は胴部区画線上に「8」字状貼付文が付く。

8は沈線の懸垂文系土器で、口縁部に沈線が巡り、胴部に蕨手状懸垂文が垂下する。9は口縁部を沈線で区画し、区画線から間隔の狭い平行沈線を垂下する。

12、16は橋状把手の付く壺形土器で、12は小形土器であり、口縁内面に蓋の受け口状の凸帯が巡る。16は大きな壺形土器で、肩の部分に当たり、条線文を施文する。

13～15は器面全面に刺突文を施す浅鉢、もしくは壺形土器で、北陸地方の三十稻場式系の土器である。刺突文は押し引き状で、ランダムに施文される。

第17号土壇出土遺物（第15図1～16・第16図17～67）

1は無文のⅧ群土器で、全体の7割程が現存する。推定口径22.5cm、器高29cmを測る。

2～6は称名寺系のⅢ群土器で、2は条線文系、3～6は列点文系である。3、4は口縁部破片で、3は波状を呈する。

7～16は堀之内Ⅰ式段階の、称名寺に系譜を引くモチーフを施文するⅣ群土器である。沈線区画文の中に列点文を充填施文する深鉢形土器で、7、8の口縁部には円形刺突文列を施す。口縁部を沈線で区画し、列点文を挟む平区沈線文を垂下して、胴部文様帯を分割

する。

17～20、22～25、27～34は沈線系のⅣ群土器で、17、18、20の口縁には沈線が巡り、19は口縁部文様帯に列点文を施文する。22～34は懸垂文系土器で、23は口縁部に円形刺突文列が巡り、垂下する懸垂文と斜行沈線の組合わさるモチーフを構成する。24は口縁裏面に沈線が巡り、Ⅴ群土器になる可能性が高い。25は刺突を施す隆帯が垂下し、27～29は下北原系の胴部モチーフを持ち、Ⅴ群に近い土器群も存在する。他は沈線懸垂文が垂下するものである。

21、26は胴部で括れる小仙塚系の土器で、21は波頂部に施される盲孔部分から、胴部区画にかけて沈線を垂下し、胴部を平行沈線で区画する。26は区画線上の環状貼付文から、平行沈線で渦巻状のモチーフを展開する。

35～37は条線を施文するⅦ群土器で、36は格子目状に施文する。

38～54は縄文系のⅣ群土器で、38は口縁部の山形突起下に盲孔を施し、口縁部に盲孔を繋ぐ沈線を巡らす。胴部には、地文縄文上に蕨手状懸垂文を垂下する。39は山形突起の頂部に盲孔を穿ち、口縁部に沈線を巡らせ、胴部に蕨手状懸垂文を施文する。地文縄文は、単節RLである。40は口縁部区画の平行沈線間に、竹管の半円形刺突文列を施す。41～54は縄文地文上に、沈線文を垂下する土器群で、41は蛇行懸垂文を施文する。44は平行沈線間に対向「U」字状の沈線文を挟む懸垂文を施文する。55～59は縄文施文のⅥ群土器である。

60～61は堀之内Ⅱ式のⅤ群土器であり、口縁の開く深鉢形土器に、多条沈線の幾何学文を描く。

62～67は無文のⅧ群土器である。

第18号土壇出土遺物（第17図1～18）

1～7は称名寺系のⅢ群土器で、1～3が縄文系、4～6が沈線系、7が口縁部破片である。

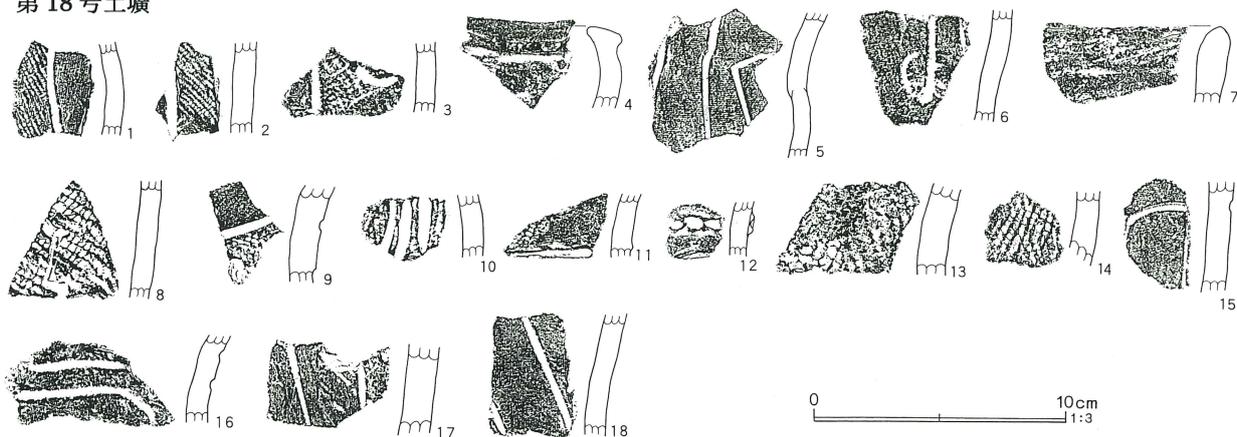
8から18は堀之内Ⅰ系のⅣ群土器で、8～14が縄文系、15～18は沈線系である。

第19号土壇出土遺物（第17図1～4）

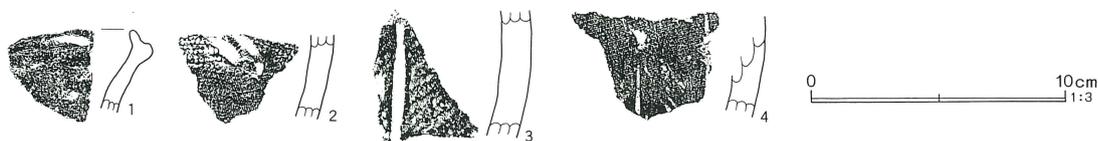
全てⅣ群土器で、1は小仙塚系の口縁部破片で、口

第17図 土壌出土遺物 (10)

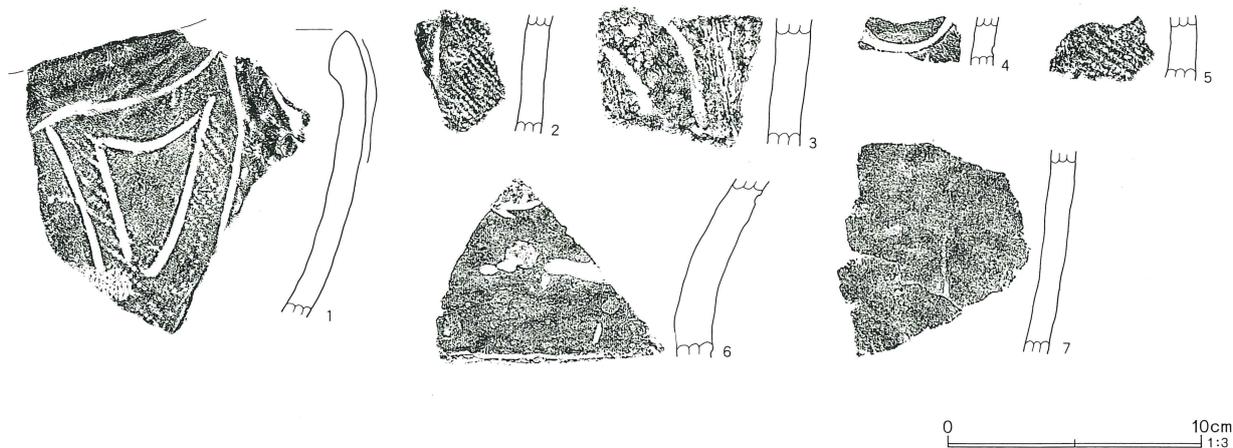
第18号土壌



第19号土壌



第21号土壌



縁部に沈線が巡る。2、3は縄文系で、地文縄文の上に沈線文を施文する。4は沈線系で、浅い沈線が垂下する。

第20号土壌出土遺物 (第18図1~28)

1は口縁部に縄文を施す深鉢形土器で、胴部が大きく張る鉢形で、胴上半と底部が現存する。Ⅵ群土器で、口径22cm、底径7.6cm、推定器高29cmを測る。

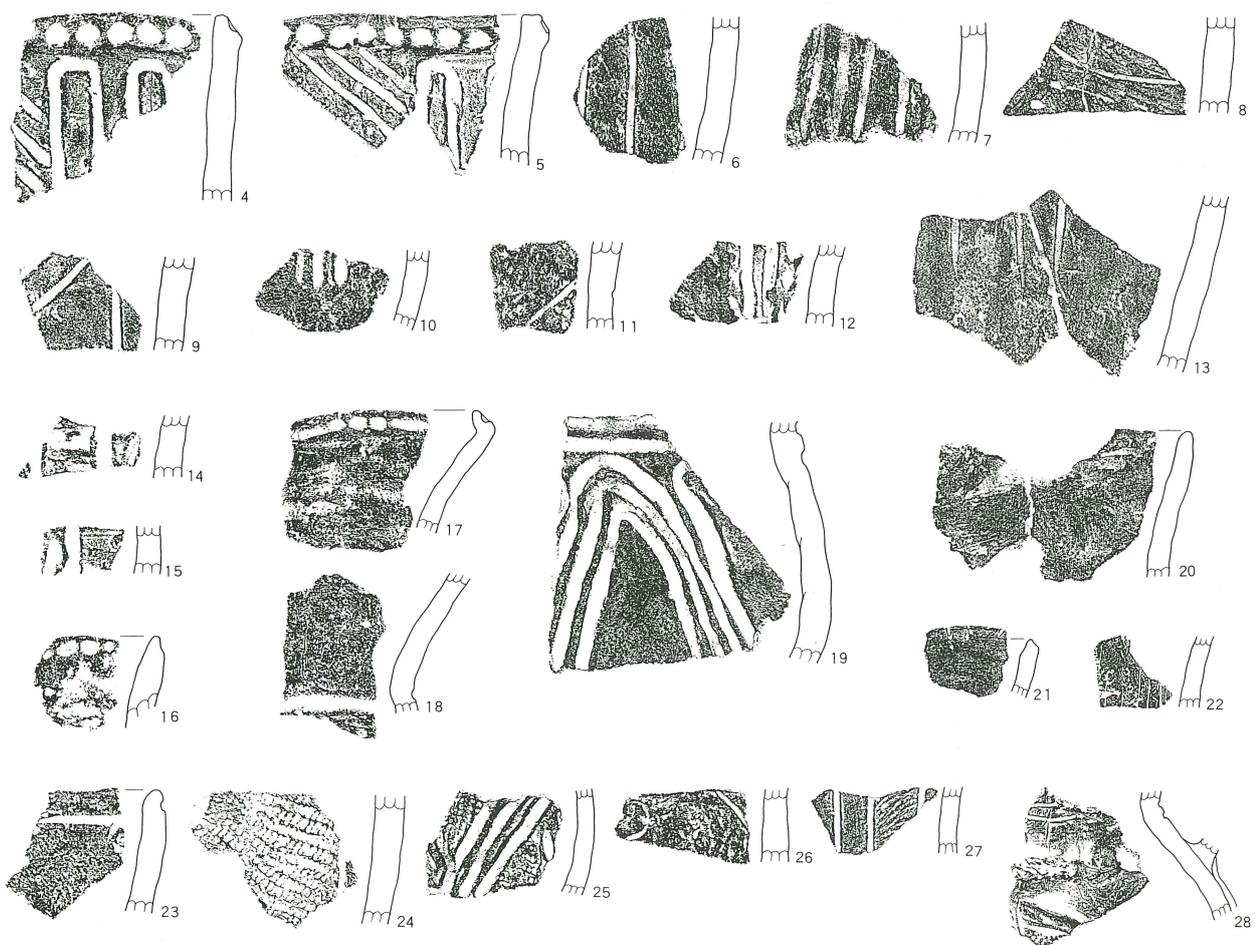
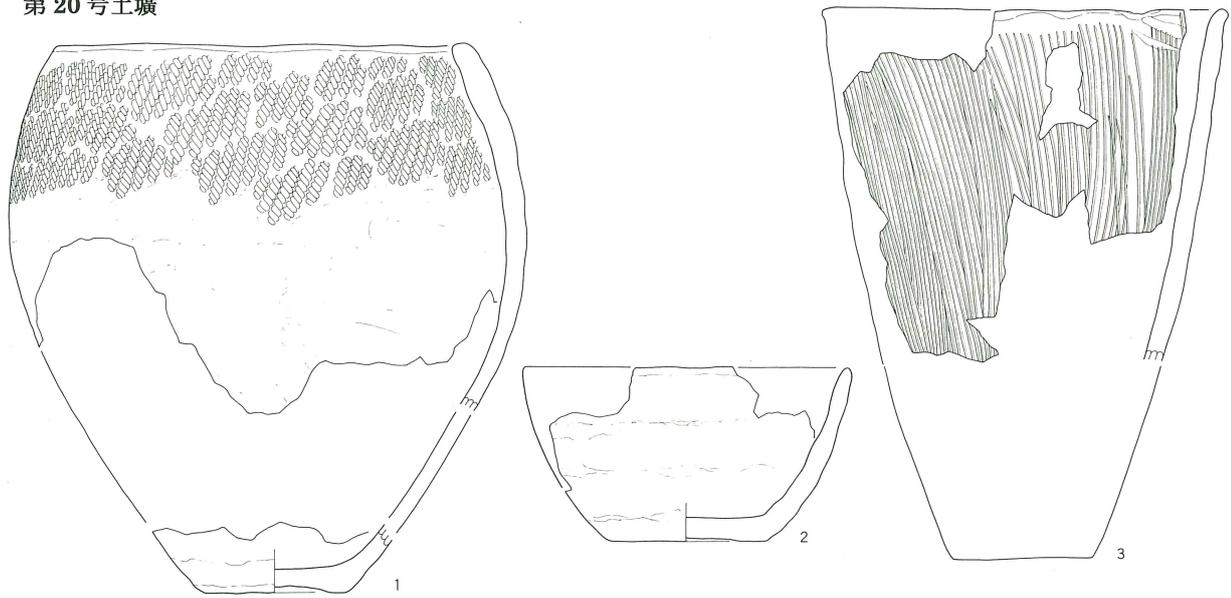
2はⅧ群の無文浅鉢形土器で、口縁部は一部が現存する。推定口径17cm、推定底径8.4cm、器高9.2cmを測る。

3は条線を施文するⅦ群土器の、深鉢形土器である。大形破片からの復元であるが、推定口径22cm、現存高17cmを測る。

4~28は堀之内Ⅰ系のⅣ群土器で、4~15は沈線系の懸垂文系土器群である。4、5は同一個体で、口縁端部に押し引状の円形刺突文を施し、U字状懸垂文と斜行沈線を組合わせた胴部文様を構成する。6~15は沈線の懸垂文を垂下するもので、8は斜行沈線を施文する。16、19は沈線系で、16は先細りの口縁部に押し引の円形刺突文列、23は沈線を施す。

第18图 土壤出土遺物 (11)

第20号土壙



17～19、25は胴部で括れる小仙塚系土器で、17の口縁部には沈線が巡る。19の胴部は3本沈線を基本として逆「U」字状の懸垂文を連結して垂下するものと思われる。

24、25、26、27は縄文系の土器で、24、27は磨消懸垂文が垂下する。20、21は無文のⅧ群土器で、22は条線のⅦ群土器である。

28は橋状の把手の付く壺形土器と思われ、胴部には隆帯のモチーフが展開する。

(3) グリッド出土遺物

神の木遺跡のグリッドからは、縄文時代の早期から後期までの土器群が出土している。遺構が形成された時期はほぼ後期段階であり、出土土器も圧倒的に多い。早・前・中期の土器群が少ないことは、遺構が検出されなかった事とも整合性がある。

土器群の分類は、遺構出土土器の項で大きな分類概略について説明したが、ここではやや詳しく土器群を分類し、説明を加えることとした。

また、石器に付いては、土器の分類の後に項目別に説明を加える。石材を入手しやすい荒川上流部において、比較的石器類が少ないのが特徴的である。

a) 出土土器

第Ⅰ群土器

縄文時代早期から前期にかけての土器群を一括する。

第1類 (第19図1～9)

早期初頭の撚糸文系土器群を一括する。1、3～5は口唇部文様帯＋口縁部文様帯＋胴部文様帯構成の第1様式で、2は口唇部文様帯＋胴部文様帯の第2様式であるが、いずれも井草Ⅰ式土器に比定される。口縁部はいずれも口唇が肥厚外反し、口唇部外端と内端の2面に同方向撚りの単節RLを施文する共通性がある。1は口縁部と胴部にLRを施文し、口唇部と胴部で原体を変えている唯一の例である。他は、同一原体を使用している。第1様式の口縁部文様帯は、口唇部下に無文部を設けることを特徴とし、やや新しい感じを受

第21号土壇出土遺物 (第17図1～7)

1～4は称名寺系のⅢ群土器で、1、2は縄文系、3は条線系、4は沈線系である。1は波状口縁を呈し、波頂部から蛇行して隆帯が垂下する。

6は胴部で区画する小仙塚系と思われるが、破片上部に沈線の弧状文が見られるため、比定しきれない。

5は縄文施文のⅥ群土器、7は無文のⅧ群土器である。

ける。

2は第2様式であるが、口縁部の形態や施文の特徴は、他の第1様式の土器群と類似する。

7～9は胴部破片で、7、8は縄文を施文するが、9は施文が不明瞭であり、撚糸文か撚糸条痕と思われる。

第2類 (第19図10～13)

早期後葉の条痕文系土器群を一括する。10は1点のみの出土であるが、野島式に比定される口縁部破片である。角頭で先細り状の口縁部に、折返し状の粘土帯を貼り付け、縦位の短沈線を施文する。沈線は角状工具で施文されたもので、絡条体圧痕文の代用と思われる。胎土に繊維を少量含む。

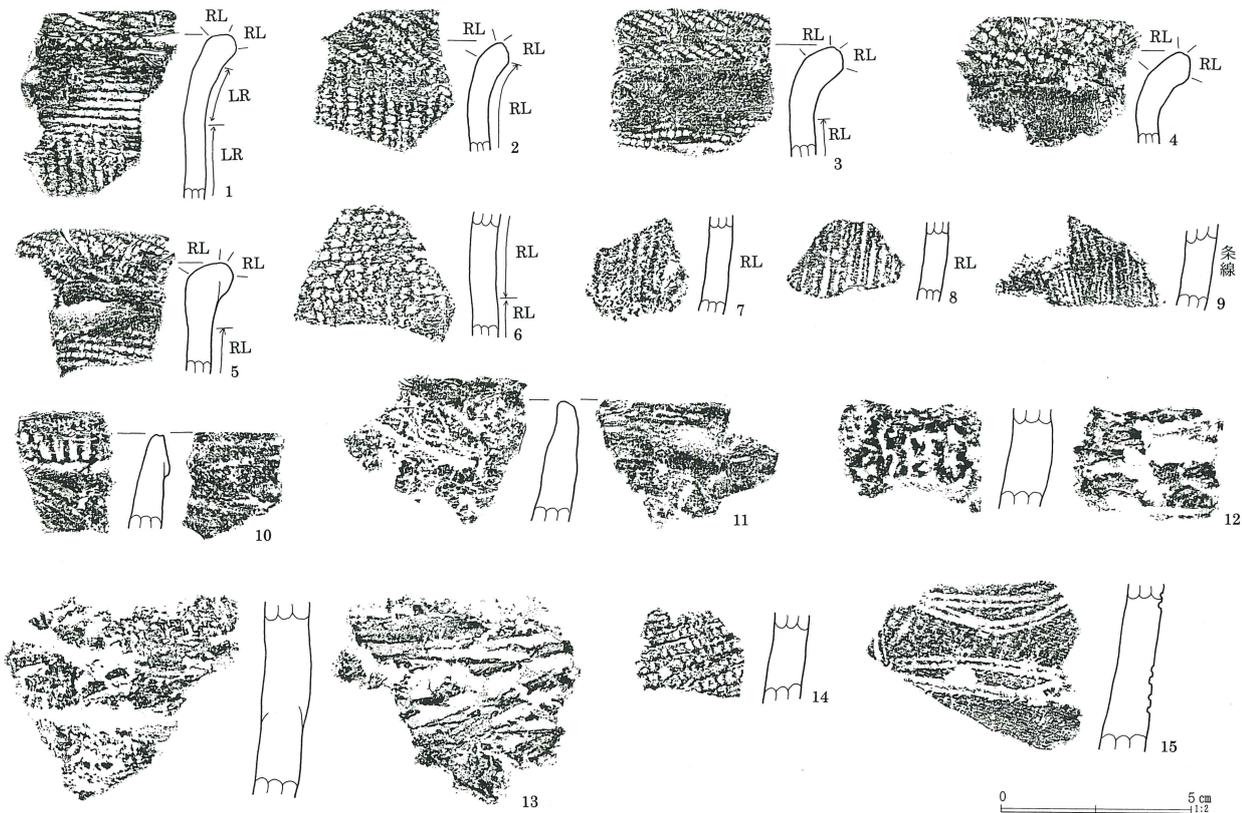
11～13は繊維を多く含み、粗いナデや条痕文を施文する、条痕文系終末期の土器群である。11は口縁部であるが、口唇部に明瞭な面を作らず、ややだらけた感じを受けるもので、ナデ状の整形を施す。12は不明瞭であるが、胴部に縦位の貝殻腹縁文を帯状に施している。所属時期は茅山上層式以降と思われる。13は貝殻腹縁文はないが、同様な特徴を持つ。

第3類 (第19図14、15)

前期の土器群を一括する。14は繊維土器の黒浜式で、単節LRを施文する胴部小破片である。

15は幅狭の結節沈線で肋骨文を描く、無繊維土器の諸磯a式土器である。

第19図 グリッド出土遺物 (1)



第Ⅱ群土器

中期末から後期初頭にかけての、加曽利E式系の土器群を一括する。

第1類 (第20図16~18)

連弧状に沈線を施文する連弧文系の土器群を一括する。16は2本沈線で口縁部を区画し2本沈線で連弧文を施文する。17は口唇部直下に2本の沈線を巡らせ、連弧文を施文するかは不明であるが、連弧文系の土器群である。

第2類 (第20図19~27)

胴部に磨消懸垂文を施文するものを一括する。すべて胴部の破片であるが、文様や形状から口縁部文様帯を持つキャリパー系 (19~22) と、口縁部文様帯を持たないもの (23~27) に分別される。後者には後期初頭のものも含まれると考えられる。23は胴部に磨消渦巻文を施文する。

第3類 (第20図28~53)

口縁部や胴部に隆帯を施文する、隆帯文系の土器群を一括する。中期加曽利E式系の土器群で、口縁部文

様帯を持たないものが多く、隆帯のほとんどが断面三角形となる微隆起伏のものである。おおまかには胴部に渦巻文などの文様を施文するもの (28~33) と、懸垂文を施文するもの (34~53) に分けられる。第3類の大半が後期段階に入るものと考えられる。

第4類 (第20図54~70)

地文に条線を施文するものを一括する。56~58は蛇行する条線文を施文し、69・70は橢圓状工具を刺突した細かい刺突文を施して、地文としているものである。工具の同一性から便宜的に第4類とした。

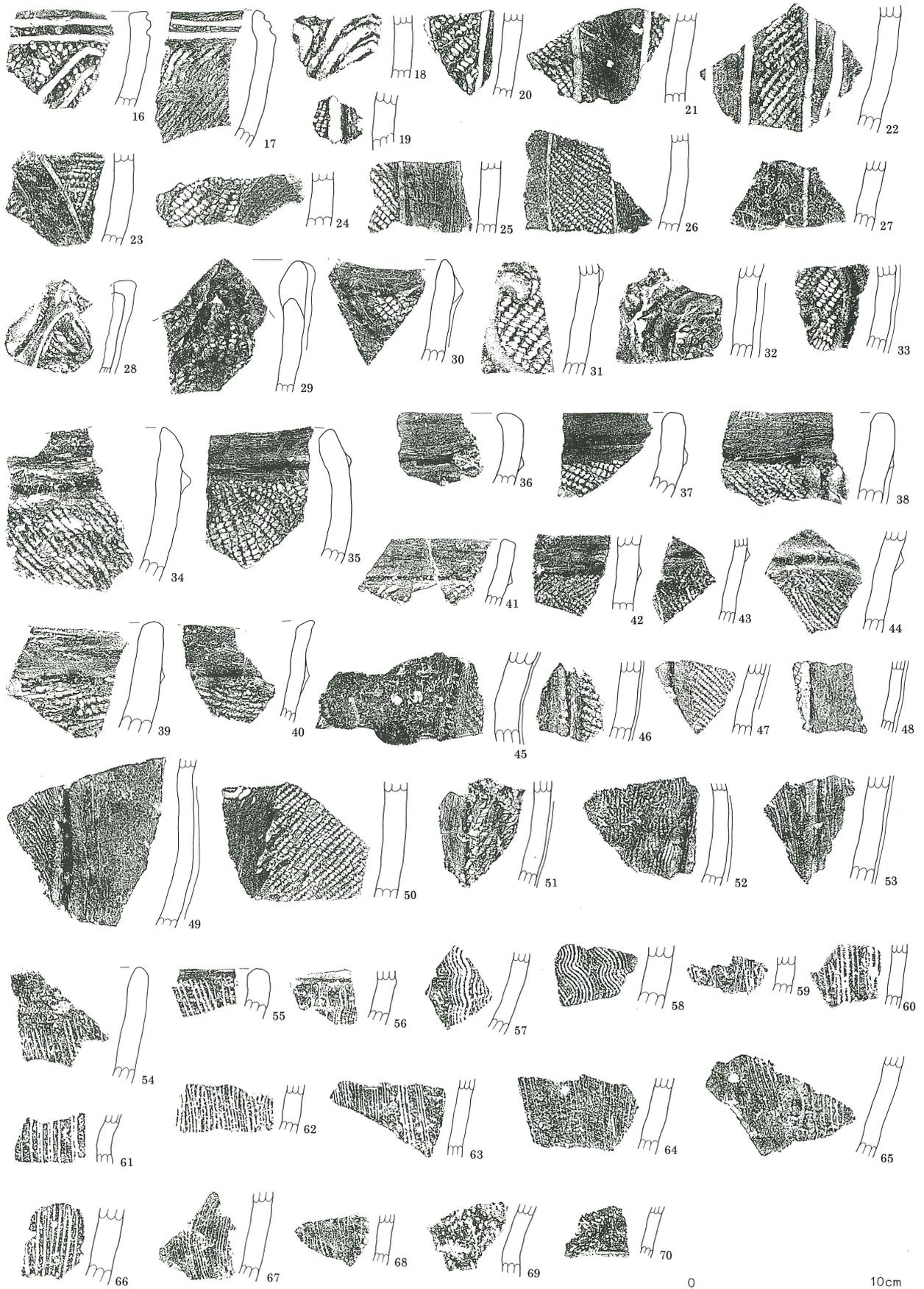
第Ⅲ群土器

後期初頭の称名寺式系土器群を一括する。

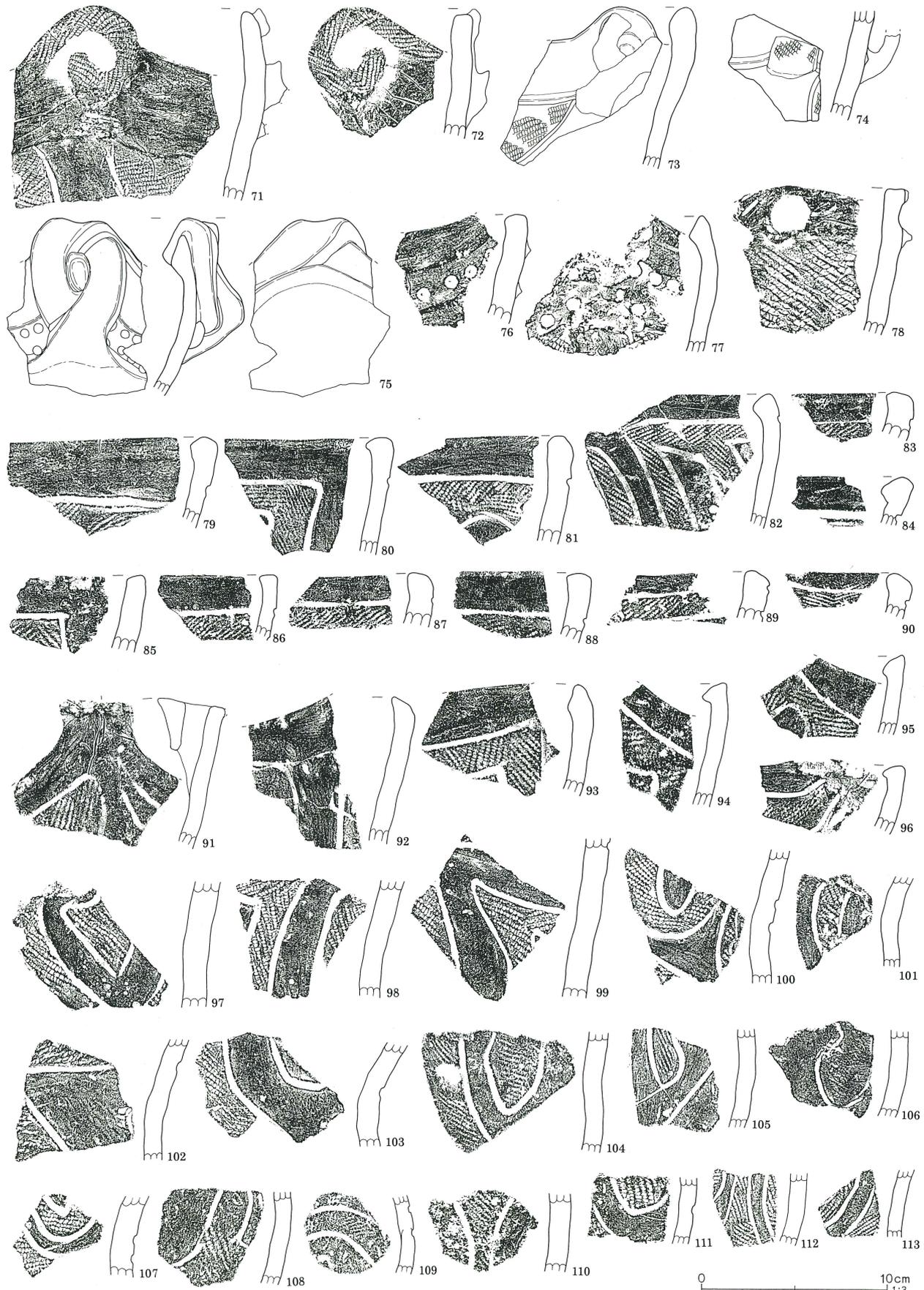
第1類 (第21図71~78)

いわゆる関沢類型とされる土器を一括する。形状は四単位波状口縁で、波頂部には突起文を貼付し、口縁部と胴部は波状口縁部に合わせて弧状に微隆起文で区画されている。また口縁部には、微隆起線文によって区画された文様帯を持つものもある。胴部には地と反

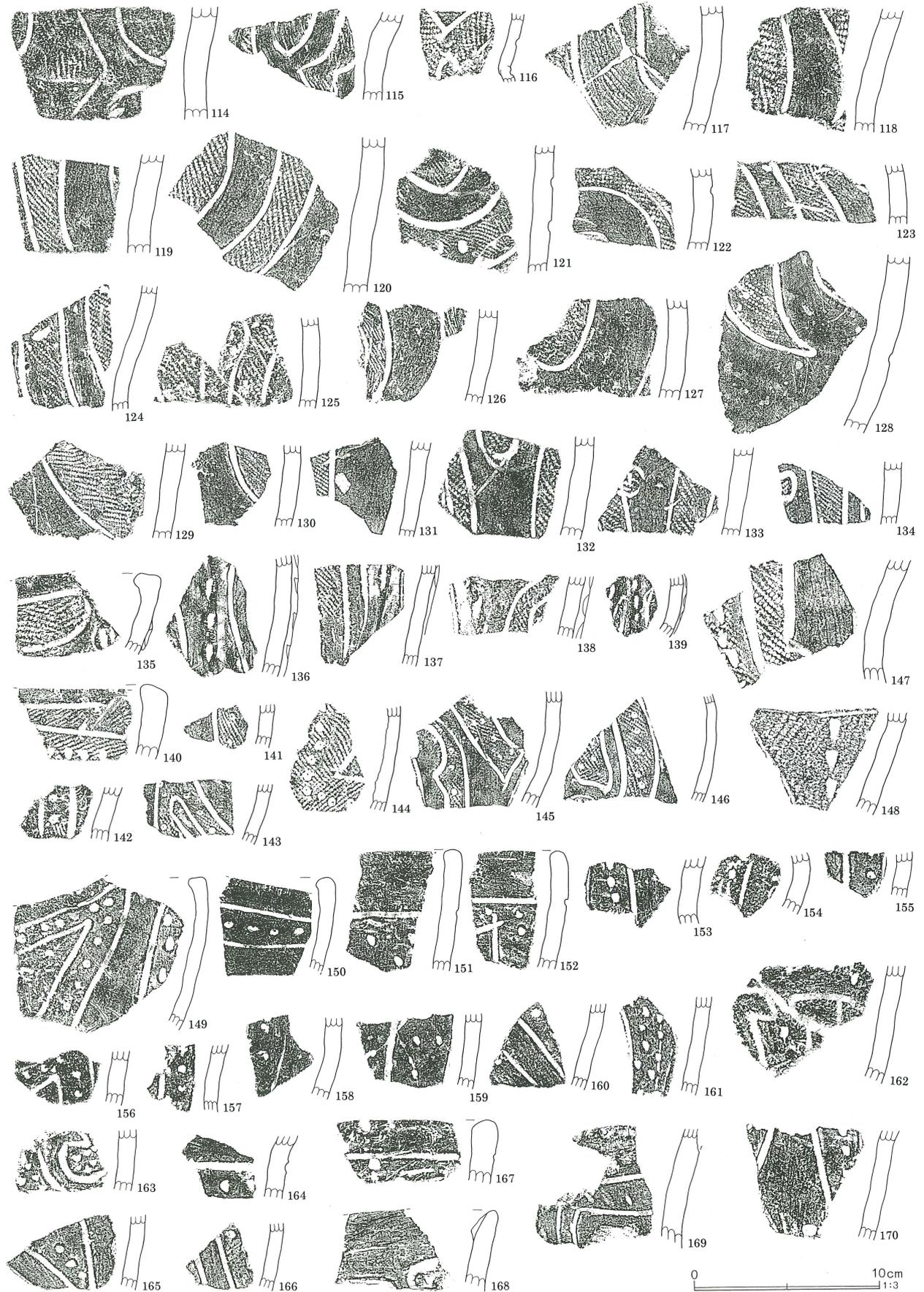
第20図 グリッド出土遺物(2)



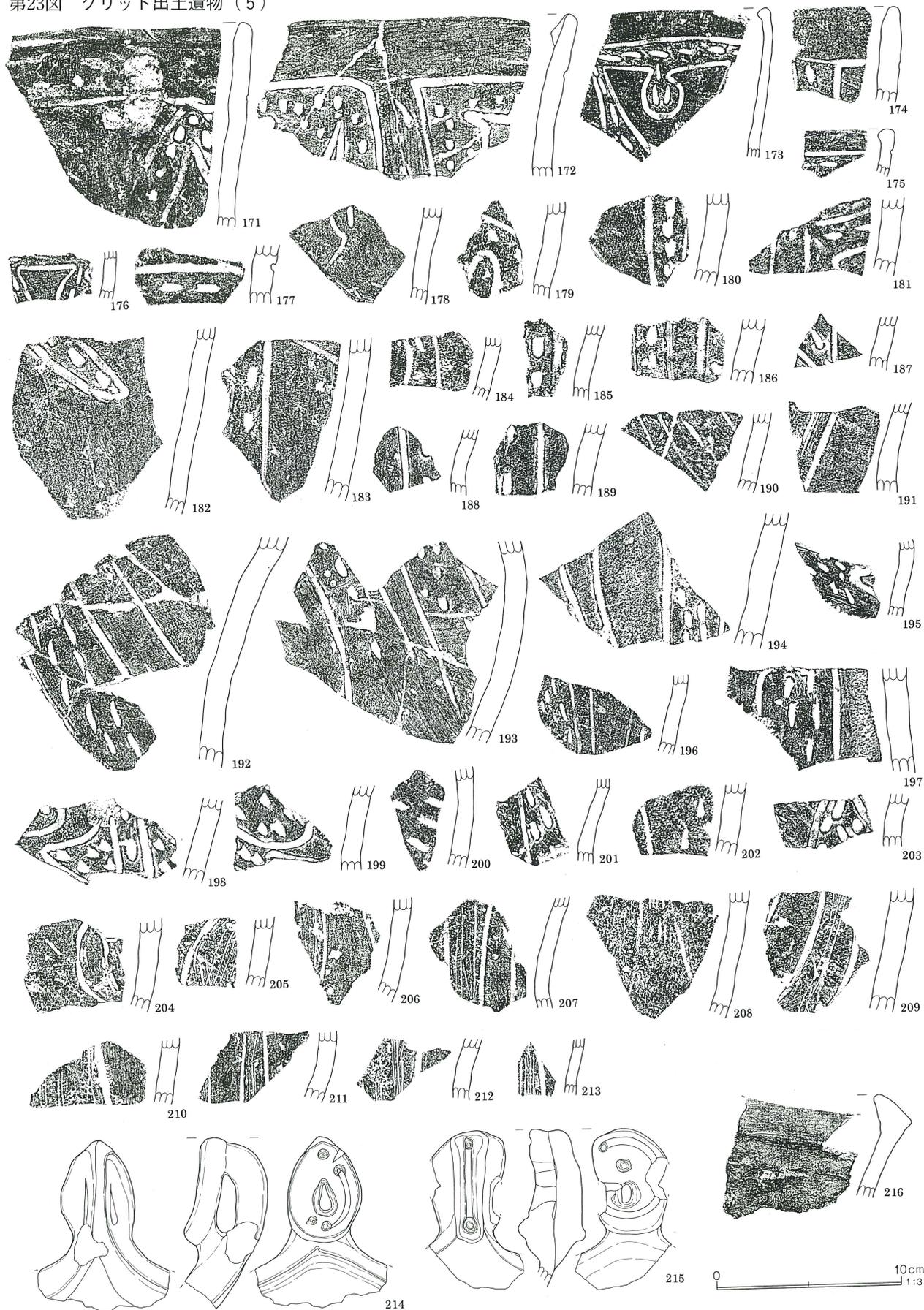
第21図 グリッド出土遺物 (3)



第22図 グリッド出土遺物（4）



第23図 グリッド出土遺物 (5)



転したJ字文が施文されるのが知られている。

出土した土器はいずれも口縁部の破片で、そのうち71～74は突起上や区画された文様帯内に縄文を施文するものである。また75～77は口縁部の区画された文様帯内に、円形刺突列を加えるもので、75、77は2列、76は1列を施文している。77の胴部の地文は縄文である。

突起の形状は71、72は渦巻状で、73、75は捻転状である。78は円形に施文されるものである。

第2類 (第21図79～113、第22図114～134)

沈線によって区画された内側、または反転部分に縄文を施文するもので、所謂縄文系の土器群を一括する。称名寺式の最古段階のものではなく、横走帯を持たない2段構成の文様を施文するものが主体を占めている。

79～131はJ字文や渦巻き文が2段構成で施文され、下段の下端は閉塞すると考えられるものである。79～96は口縁部で、79～90は平縁、91～96は波状口縁である。91は波頂部に円筒状の把手を持つものである。97～131は胴部の破片で、J字文や渦巻文が施文されている。またJ字文の先端がかえり状になるものが見られる(97、104、106)。104には補修孔が貫通している。

132～134は懸垂状の縦位構成のモチーフに、小さな「R」状文が組み合わさるものである。

第3類 (第22図135～139)

隆帯が垂下する土器群を一括する。口縁部から垂下する隆帯で、器面を縦位分割するものである。多くは2分割するものであるが、単位数、文様構成等の詳細は不明である。135の口縁部には、口縁部文様帯状の区画文が施されており、それぞれの隆帯上には押し引き状の刺突列が施されている。

第4類 (第22図140～148)

区画内などに縄文を充填し、さらに単列の列点文を施文するものを一括する。刺突の形状により2種に分類される。

a種 円形刺突 (140～146)

刺突が器面に対して垂直方向に行なわれるもので、形状が円形になるものである。

b種 押し引き状刺突 (147、148)

器面上で刺突を押し引いて施文するもので、形状が三角や楕円形状になるものである。

第5類 (第22図149～170、第23図171～203)

区画内に列点文のみを施文する、列点系の土器群を一括する。第4類と同様に、刺突の形状により2種に分類される。

a種 円形刺突 (149～166)

刺突が器面に対して垂直方向に行なわれ、形状が円形になるもの(149、150、154～158、160、165、166)が主体であるが、斜め方向に刺突を加え、半月などの形状になるもの(151、153、159、161～164)もここに含めた。刺突列は単列のものと、複列に及ぶものとに分かれる。刺突列が複数になるもの(161、163)は、斜め方向に刺突を加えるものである。

b種 押し引き刺突 (167～203)

器面上で刺突を押し引いて施文するもので、形状が三角や楕円形状になるものである。そのうち167～170は他に比べて、やや突き刺す様な刺突を行うものである。a種と同様に刺突列は単列のもの(167～191)と、複列のもの(192～203)がある。

第6類 (第23図204～213)

文様の区画内に、条線を施文するものを一括する。細かい条線を、浅く櫛歯状に施文するものが主体である。204や208は短沈線状の条線文となっている。

第7類 (第23図214～216)

称名寺系の把手の破片(214、215)と、口縁部の破片(216)である。大きな把手が1単位につき、頸部が無文となり、胴部で括れる器形を呈するものである。

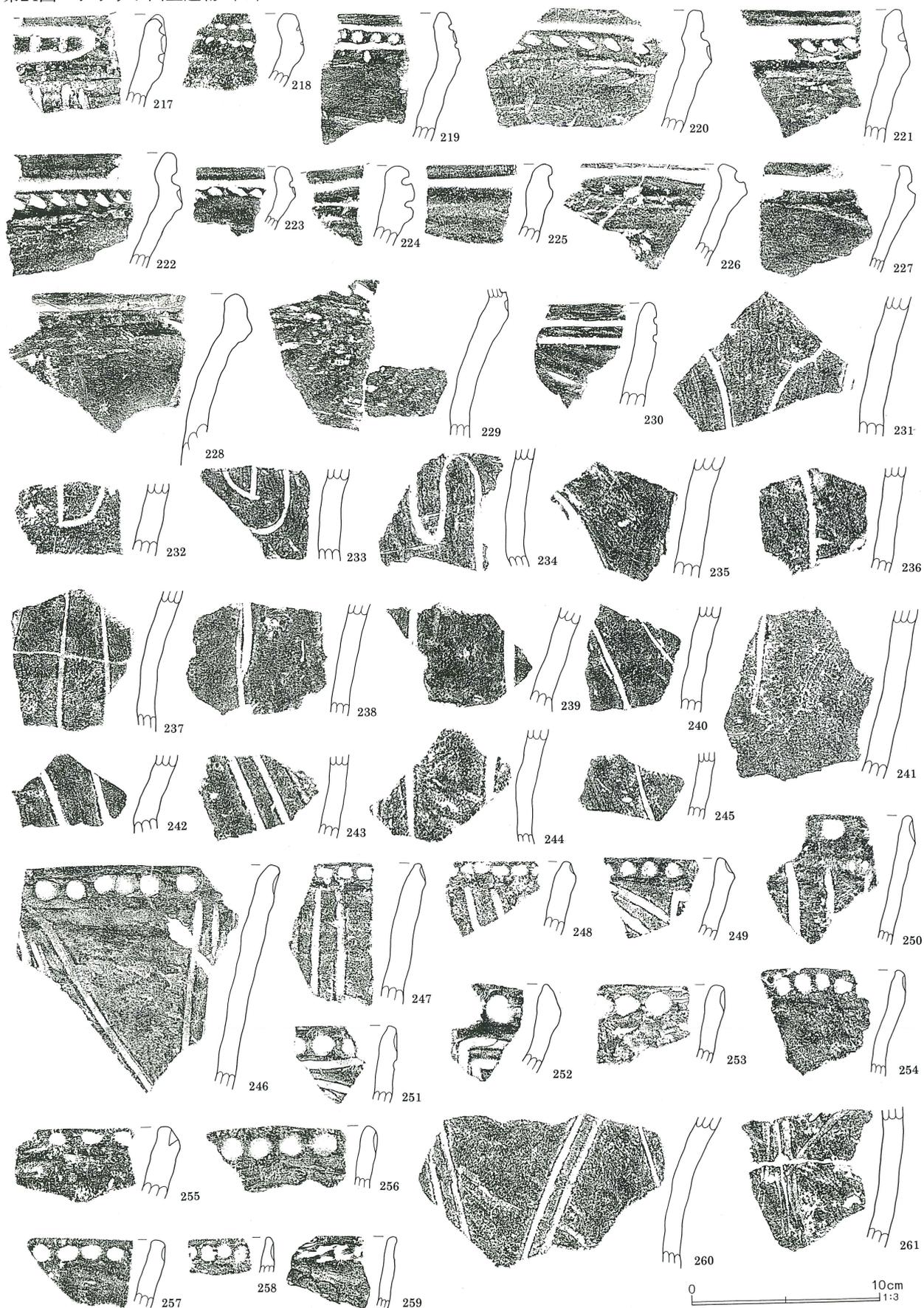
第IV群土器

後期前葉の堀之内I式系土器群を一括する。グリッドから出土した縄文土器の主体となる土器群である。

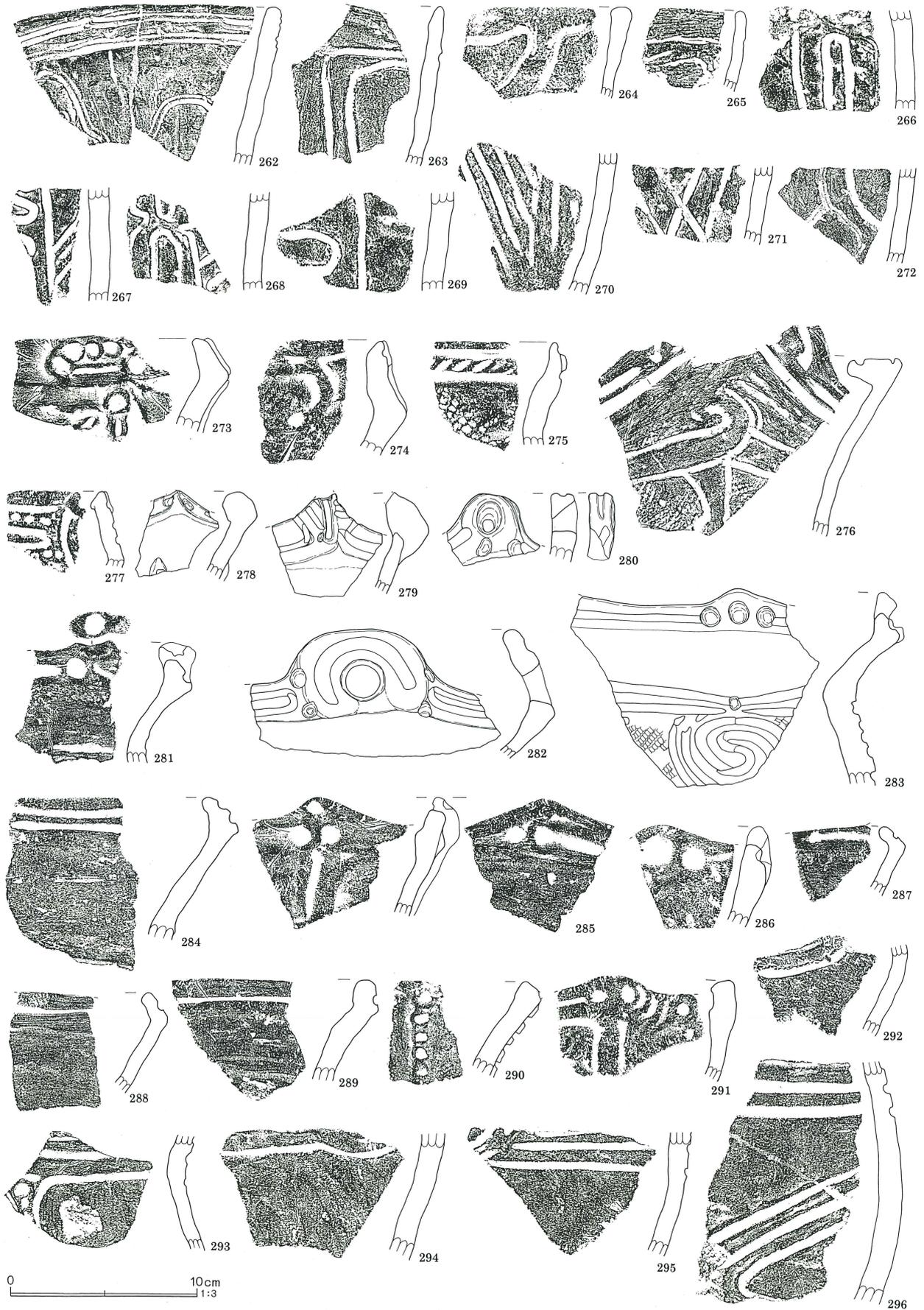
第1類 (第24図217～245)

称名寺系土器の文様構成が残るものを一括する。所謂下北原系の土器群で、口縁部文様帯が安定して見られ、沈線のみ使用し縄文を施文しない土器群である。

第24図 グリッド出土遺物(6)



第25図 グリッド出土遺物（7）



217、219は口縁部に沈線で横長の楕円区画を施し、その内側に列点などの刺突を加えるものである。218は沈線の代わりに刺突で楕円区画を描くもので、内側に施文は行なわれていない。

220～223は口縁部に沈線を一本巡らすもので、屈曲する口縁下端部には斜め方向の刺突を押し引いて施文している。229も同様と考えられる。225～228は沈線を一本巡らすのみである。230は口縁部が屈曲しないものである。

231～241は胴部の破片である。232と233は2本沈線で鈎状モチーフを描き、称名寺系の要素が強く見られる古相を持つ土器群である。

第2類 (第24図246～261、第25図262～272)

沈線文系の土器群で胴部文様が沈線による縦位構成の懸垂文、または、それと斜位の沈線文が組み合い連結する縦位構成のモチーフを持つ土器群を一括する。地文は施文されない。

a種 懸垂文系 (246～261)

沈線によって、縦位や斜位方向に懸垂文が施文されるものである。246～259は口縁部の破片で、いずれも口縁部に円形の列点を巡らせて口縁部文様帯としている。列点は口縁部をやや屈曲させて、その肩部上に列点を施文するもの(247～250、252、254、255)と、器形の変化を見ずに単に口縁部に列点を巡らすもの(246、251、253、256～259)がある。

また252と255は列点を円錐状に深く刺突しているもので、259の列点部分は押し引きながら施文している。260と261は胴部の破片である。

b種 沈線文系 (262～272)

沈線文のみ描かれるものを一括する。懸垂文だけではなく、様々な沈線文が施文される。

262～265は口縁部で、262は半截竹管状の工具で浅く施文するもので、口縁部に平行する2本の沈線を巡らし、胴部には波状に沈線を施文している。

266～272は胴部の破片である。266、268は胴部分割線として上下対向「U」字状懸垂文が垂下し、267は垂下沈線文間に蛇行懸垂文を、269は蕨手状懸垂文を

垂下させるものである。いずれも縄文施文系土器と同じモチーフ構成を持つものである。

270は縦方向の懸垂文間に複数の斜位の沈線文を施文するもので、縦位の懸垂文の中には刺突文が加えられる。描線が多条化している点に特徴がある。

第3類 (第25図273～277)

綱取系の土器群を一括する。円形須占付文やそれを繋ぐ「C」字状文などの、綱取式に見られる要素を持つ土器群を抽出した。273は屈曲する無文の口縁部に、盲孔を伴う円形須占付文が弧状のモチーフを区画する様に施文され、それを起点として胴部に縦位隆帯が垂下する。隆帯上には称名寺式の隆帯に特徴的な、押し引き状の刺突を施している。274は内屈する幅広の口縁部に「J」字状の隆帯文が垂下し、先端に盲孔が施文される。縄文を地文とする。275は口縁部の区画隆帯上に、斜位の刻みを施す。276は把手の付く称名寺系に系譜を持つ土器で、内屈する口縁部に沈線が巡り、胴部波頂部下に横位連結される磨消渦巻文が施文され、称名寺系に由来するモチーフ構成を継承している。277は内屈する口縁部文様帯内に「C」字状のモチーフが施文され、連結する沈線間に円形刺突文列が施文される。

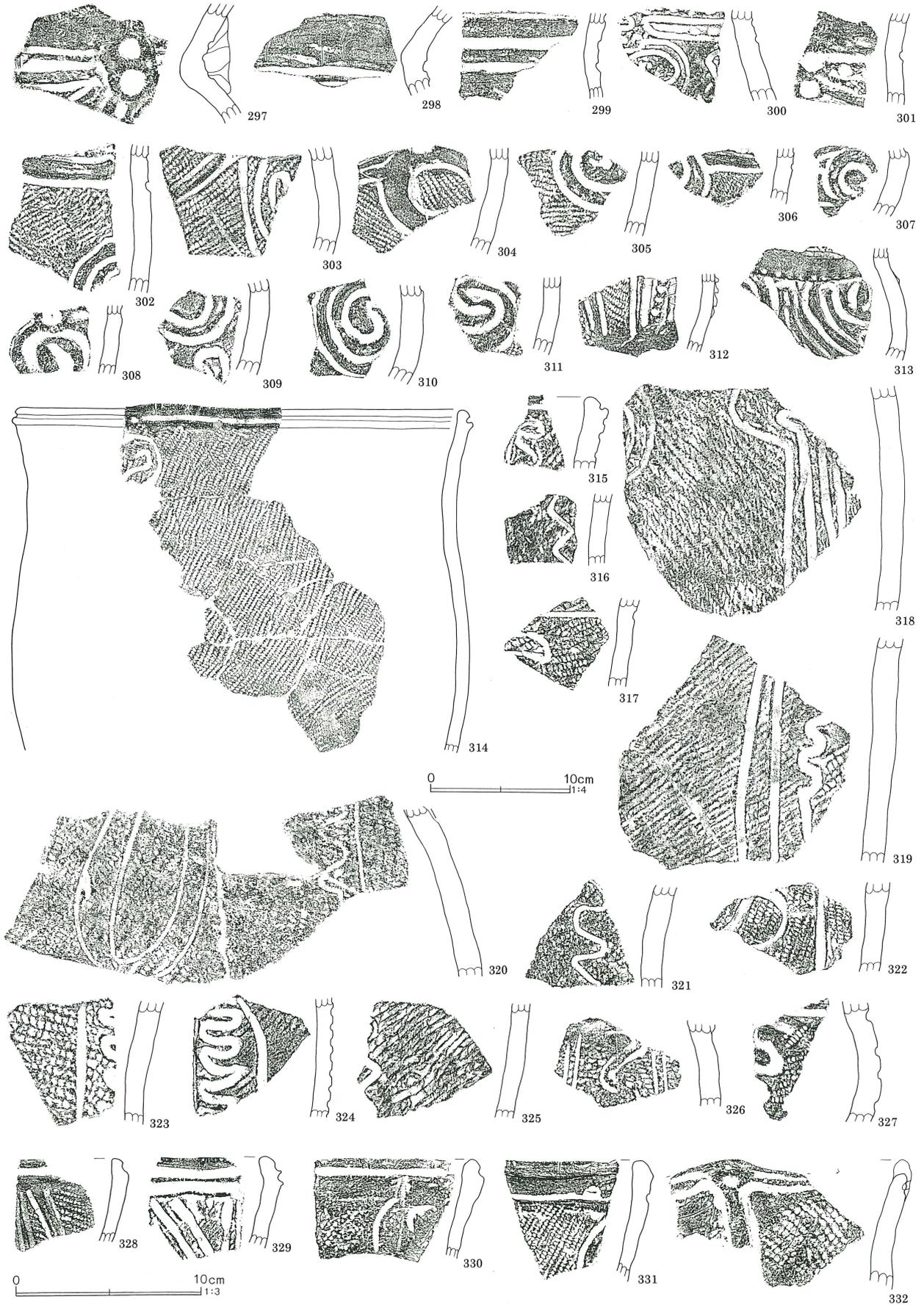
第4類 (第25図278～296、第26図297～313)

所謂小仙塚類型と呼ばれる土器群を一括する。口縁部が外反し胴上部で括れ、括れ部分を沈線で区画し胴部に文様を施文するもので、頸部が無文となるものである。

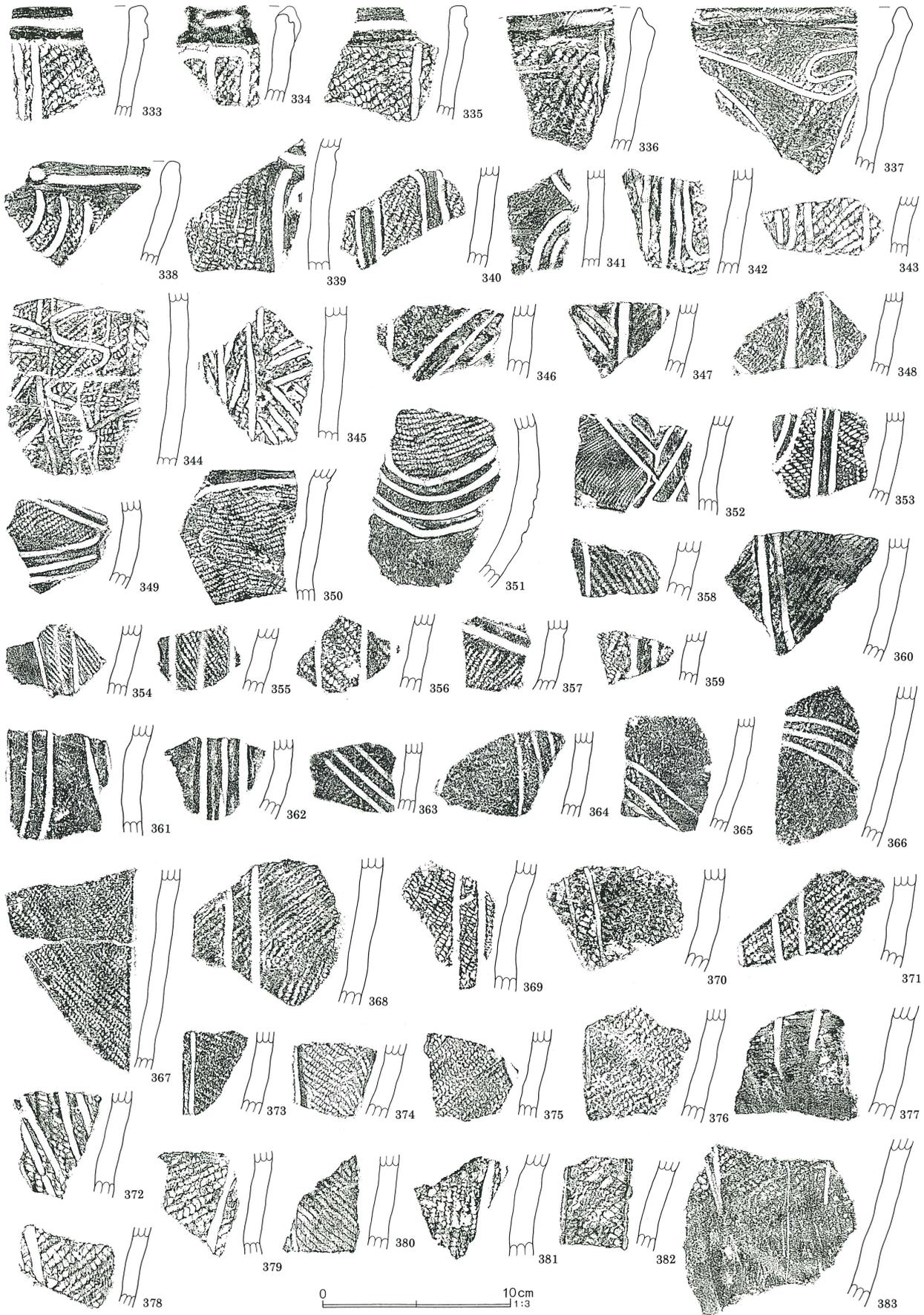
口縁部が強く内屈し、突起等の装飾がつくもの(281～283)から装飾の退化したもの(285、286)、装飾性の乏しいもの(284、287、288、289)や、隆帯(285)・沈線(291)の縦位区画文のあるもの等、種類や時間差のある土器群を一括している。291は口縁部に盲孔とそれを取り巻く左右非対称のモチーフが施文されており、新しい様相を持つものとして認識される。

胴部文様は2本または3本組みの沈線で、渦巻き文などを横位連結するモチーフを施文する。地文なしで沈線のみ施文されるもの(292～296)と、縄文を地文

第26図 グリッド出土遺物（8）



第27図 グリッド出土遺物 (9)



とするもの(283、300~312)がある。渦巻文等は胴部区画線上にある「8」字状添付文(297)や、円形貼付文(308)、縦位連結盲孔(301)等を起点として施文されている。地文が縄文のうち302~311は、沈線による文様の内側を磨り消すものである。312は胴部に刻みを施す隆帯が垂下し、胴部モチーフも懸垂文状となる。313は胴部を隆起線で区画し、重弧状のモチーフは多条沈線で施文され、新しい様相が見られる。

第5類(第26図314~332、第27図333~383)

堀之内I式系で、縄文系の土器群を一括する。地文に縄文を施文し、沈線で文様を描く土器群を一括した。綱取系や小仙塚系に含まれる胴部破片も存在すると考えられるが、一括して分類した。懸垂沈線文には蛇行沈線文と、通常の懸垂文とがある。

a種 縄文+蛇行沈線文(314~327)

縄文を地文として、蕨手状もしくは蛇行状の沈線懸垂文を施文するものである。時間差のあるものも含まれるが、ここでは一括して扱うことにする。器形としては胴部が緩く括れる深鉢形(314)や、壺形(320)、胴部が強く括れる深鉢形(326、327)等がある。蛇行沈線文には単沈線のもの、側線が付加されるものがあり、複数付加される方が新しい様相を持っている。326は半截竹管によって、文様が施文されている。

b種 縄文+沈線文(328~383)

地文縄文上に、沈線の懸垂文や、連結されるモチーフ等を描く、通常の堀之内I式土器の縄文系土器である。328~338は口縁部の破片で、328、329は本群第2類と同様の文様構成で、地文に縄文を施すものである。330、331は渦巻文か玉抱状のモチーフが垂下するものと思われ、磨消縄文で描かれる。332は外反する口縁部を持ち、胴上部で括れる器形で、胴部上半を区画するものと思われる。333~335は口縁部を角頭状に成形し、336、337は口唇部が尖る形状に成形され、337の裏面には沈線状の凹線が巡る。また、胴部モチーフも、胴上半の入り組み状沈線文が懸垂する構成を採り、新しい様相を持っている。

339~383は胴部破片で、339~344は磨消懸垂文や蛇

行沈線文を組み合わせて、胴部を縦位分割する懸垂文を構成する。345~348は擗掛け状に施文する。

349~362は平行して施文する懸垂文の内側を磨り消すものであるが、354~356は三本の懸垂文を施文し、その外側部分を磨り消している。361、362は等描線が多条化しているものも含んでいる。

363~383は破片のため明確ではないが、磨消縄文を行わないもので、363~366は3本1組で施文するものと思われる。

第6類

三十稲場系などの異系統の土器群を一括する。グリッドからは出土していない。遺構からは、器面全体に刺突文を施す三十稲場系土器が数点出土している(第15号土壇24、第16号土壇13~15)。

第V群土器

後期前葉の、堀之内I式末葉からII式にかけての土器群を一括する。第IV群について多くの土器が、グリッドから出土した。大半の土器群は、第IV群の類別に対応する系統上の、やや新しい段階の土器群と認識されるもので、明瞭な堀之内II式に伴う可能性のある土器群を一括した。

第1類(第28図394、395)

第IV群第1類からの系譜下にある第V群段階での下北原系は、口縁部文様帯が無くなり懸垂文は細線化している。グリッドからは胴部破片が2点出土した。口縁部分は不明だが、細線化した懸垂文が縦方向に施文されている。

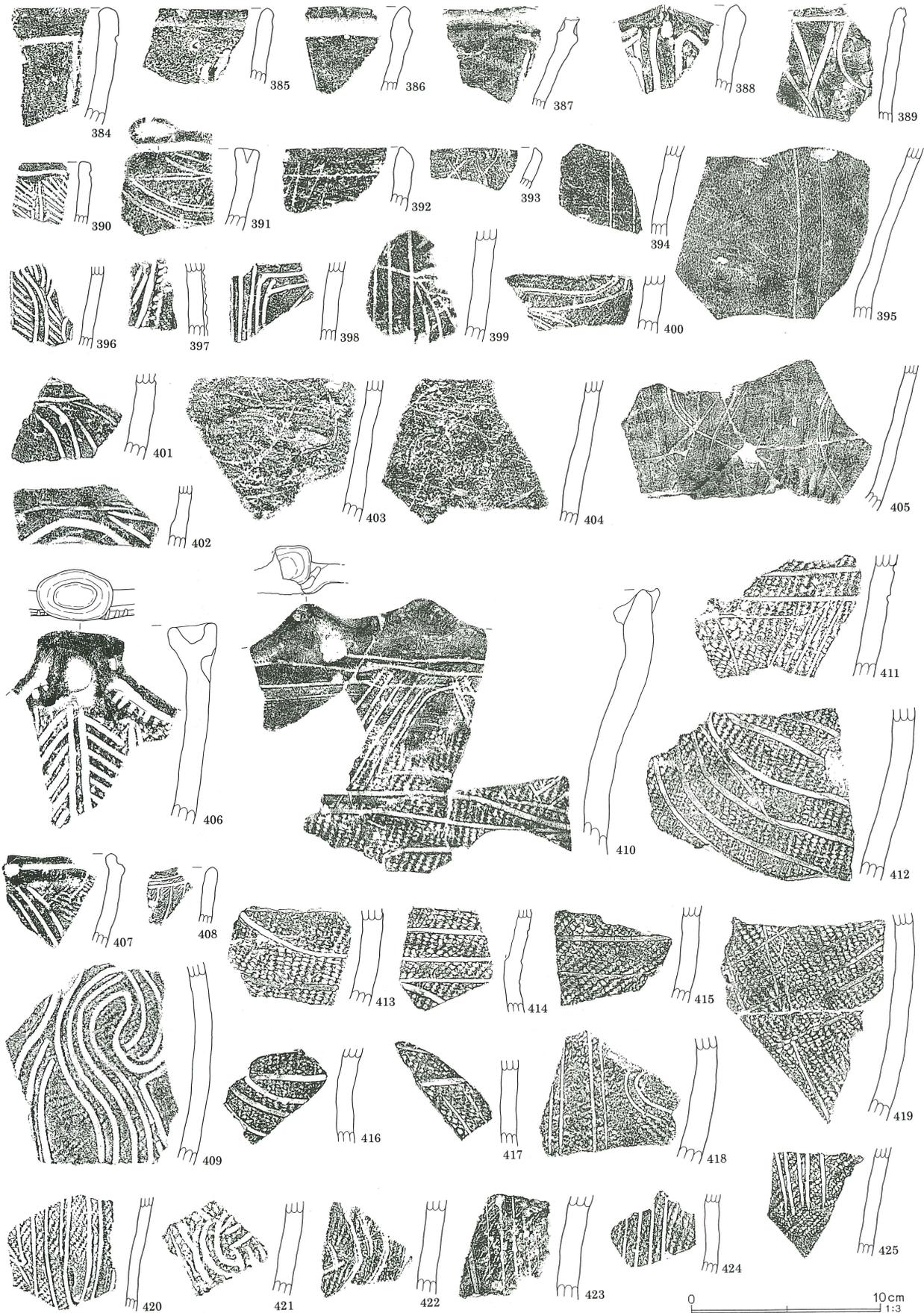
第2類(第28図384~393、396~405)

地文を施文しない沈線の懸垂文系土器群で、第IV群第2類と同様2種に細分される。

a種 懸垂文系(384~393、396~402)

懸垂文は前段階より多条となり、沈線は細線化している。文様も縦方向と斜方向の組み合わせから、崩れた構成が見られる。390、396、397は多条化が進んでいる。また392、393は極細い条線状に施文しており、口縁部の形状からもほかに比べ新しい段階と考えられ

第28図 グリッド出土遺物 (10)



る。

b種 沈線文系 (403~405)

いずれも胴部下半の破片である。沈線は極細線化して文様を施文している。文様構成は不明である。405の器面には、縦方向のケズリが認められる。

第3類 (第28図409)

第IV群第3類系の綱取系土器群は、第V群土器においては明確でなく、該当する土器は抽出できなかった。しかし綱取系の新しい段階の土器群は、南三十稲場系と類似することから409を挙げることができよう。409は端部が渦巻き、文様が入り組むような構成を採ること等から南三十稲場式系の要素と考えられる。

第4類 (第29図427~431)

小仙塚系の土器群で口縁部が外反し胴上部で括れ、括れ部分を沈線で区画し、胴部の地文縄文上に文様を施文するものである。

427、428は口縁部の破片で、427は波頂部分で頂部下に円孔が貫通し、その周囲には対弧状に多条化した沈線を施文する。428は口縁部から刺突の入った隆帯を垂下させるもので、口縁部内側に沈線を巡らせる。

429~431は胴部破片だが、胴部文様には特徴的であった渦巻文は見られず、弧状のモチーフが施文される。431は多条沈線による左流れのモチーフが施文されており、409との関連が想定される。

第5類 (第28図406~408、410~425、第29図426、432~437)

堀之内I式末葉~II式の、地文に縄文を持ち沈線で文様を施文する土器群を一括する。

第1類~4類同様に、第IV段階より沈線は多条化となり、施文する沈線も細線化する傾向が見られる。

406~410は口縁部の破片で、406は波頂部に筒状の突起を貼付するもので、両側に盲孔を施文し、そこを起点として口縁部に沈線を一本施文している。文様は、縦位の区画が密な肋骨文を施文している。410は双頭の山形突起を持ち、片側の波頂部の内側には円盤状の把手を貼付する。胴上半部には多条沈線による鋸歯状文を施文し、文様帯には地文縄文が僅かに残る。

胴部の文様は様々で、411は多重の三角形状文を描

いている。413~419は410の胴部破片と思われ、文様帯横位区画線下に、右流のクランク状に垂下するモチーフを描いている。

また、420、421は3本沈線で施文され、モチーフは懸垂文を取り囲む構成となっている。

432~437は同一個体ではないが、施文や胎土が良く似通っている1群である。432は口縁部が外反し、胴中ほどで膨らみ底部に至る器形である。文様は胴上部の括れ部分で1本沈線を巡らし、胴中ほどの最大径を持つ部分で2本の沈線を巡らすが、下方の沈線は途中で途切れている。沈線で区画された内側は、地文として単節LRの縄文を横方向に施文するのみである。口縁の波頂部は、破損しているため明確な形状は不明である。波頂部下には2本沈線で山形文を施文し、沈線の内側に単節LR縄文を充填施文する。また口縁の内側には、浅い凹線上の沈線を1本巡らす。推定口径21.5cm、胴最大径22.4cm、現存高20cmを測る。433は口縁部に無文帯を持ち、432と類似する口縁部破片であるが、器形が異なる。口縁裏面に明瞭な沈線を巡らせ、胴部には単節LR縄文を横位施文する。434~436は胴部の地文縄文上に、クランク状に右流れする沈線文を施文するものである。

第6類 (第29図438~463、第30図464~493)

堀之内II式のバケツ形の深鉢形土器で、磨消縄文を施文する土器群を一括する。

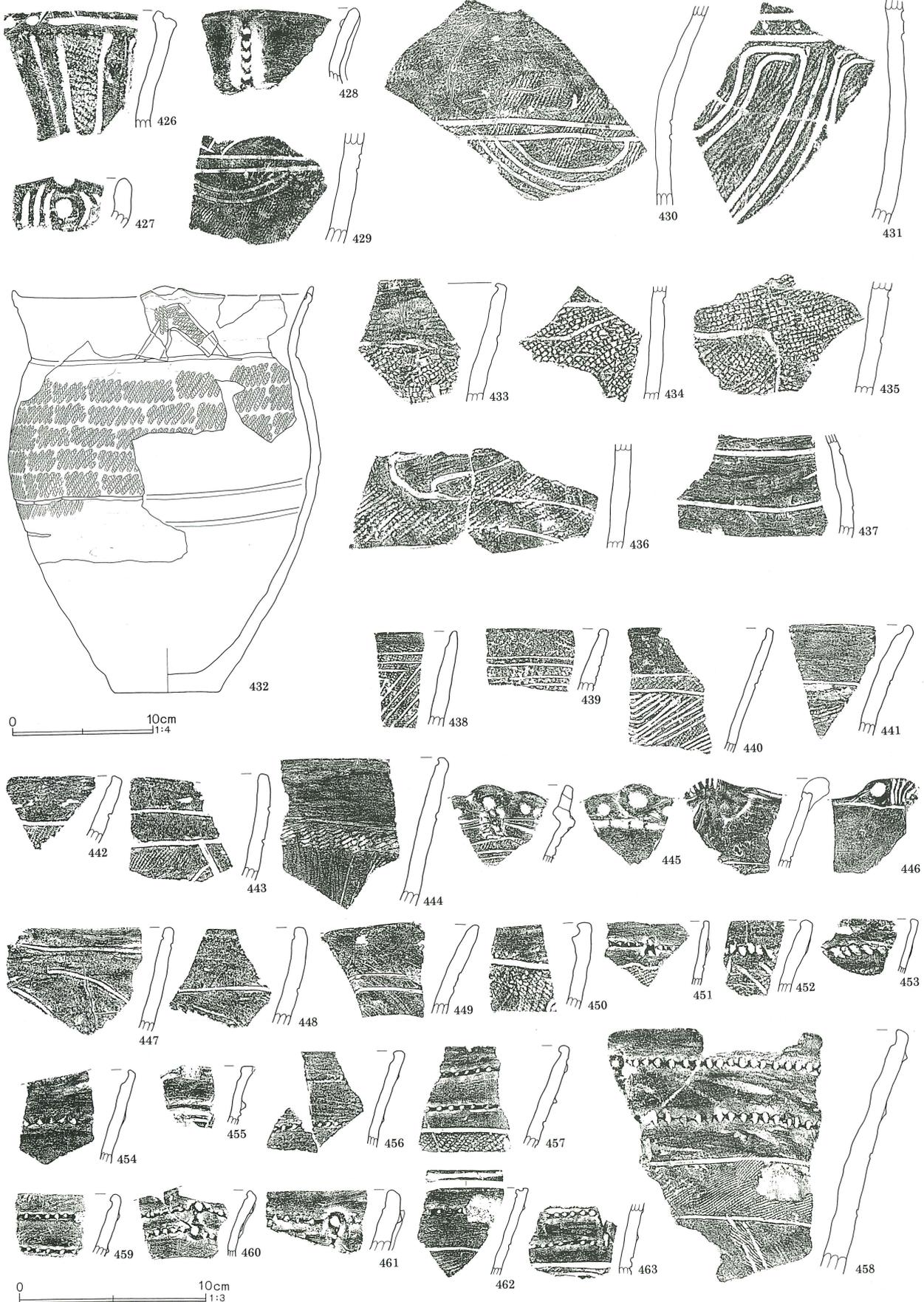
第6類はa~d種に4細分される。a、bは口縁部、c、dは胴部の細分である。

a種 口縁部に隆帯を貼付しないもの (438~450)

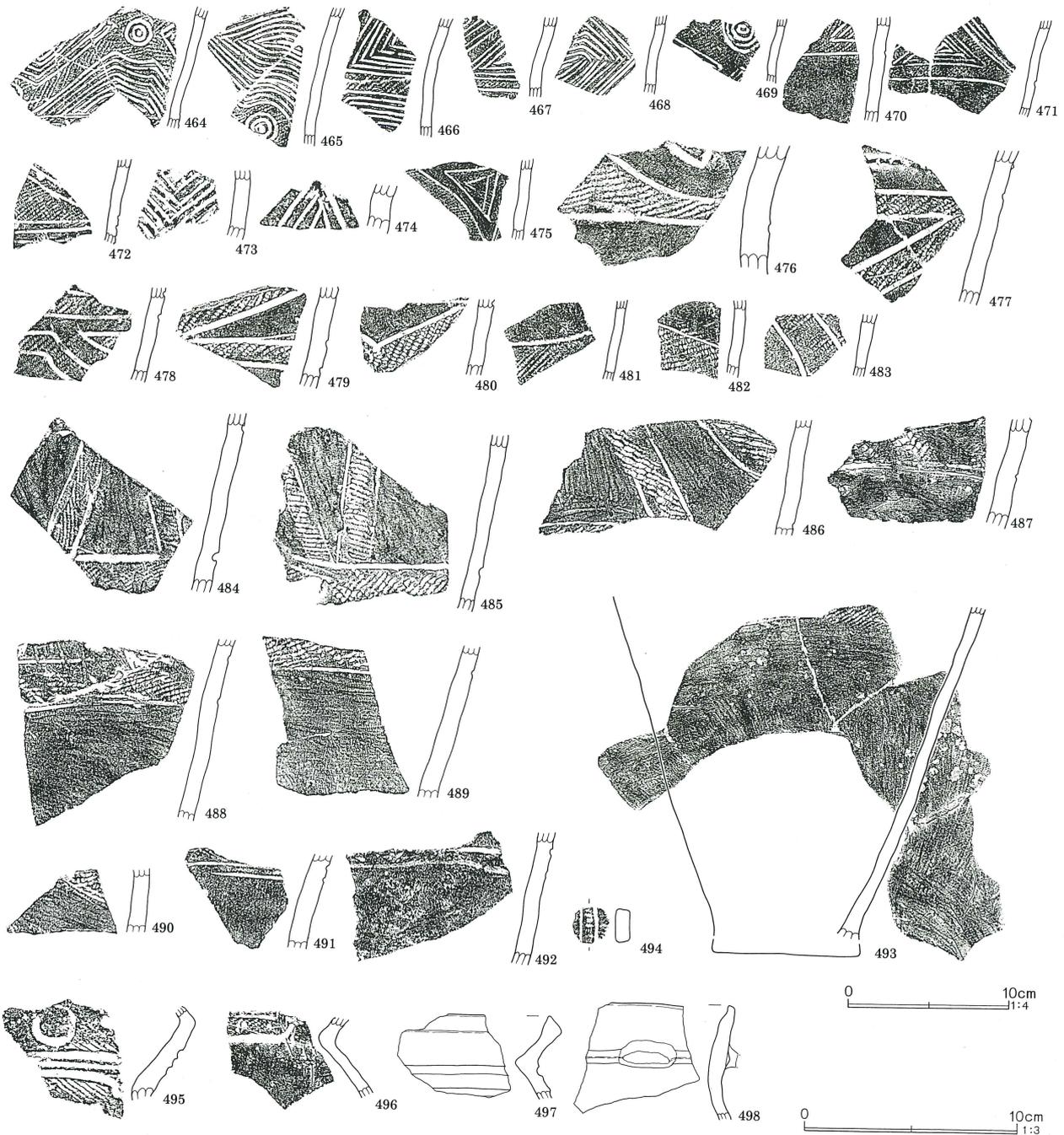
438~440は地文縄文上に、多条沈線の重三角文などを施文するものである。口縁部裏面には、凹線状の沈線が巡る。

441~444は磨消縄文の帯縄文で、モチーフが描かれるものである。442は上端区画の沈線と、地文縄文が残る破片である。443は、帯状に施文する沈線区画内を磨り消すものである。444は上端区画の沈線下に、帯状に縄文が残るように磨消したものである。445、446は口縁部の突起部分で445は3つの山を作り出し、

第29図 グリッド出土遺物 (11)



第30図 グリッド出土遺物 (12)



それぞれ1つずつ円孔を貫通させている。文様は複数の沈線を横方向に施文する。446は突起の外から内側に5本の沈線を施文し、その傍らに円孔を刺突する。内面と口唇部には沈線を施文する。447~449は地文が浅く細い条線で、450には懸垂文が残る。

b種 口縁部に隆帯を貼付するもの (451~458)

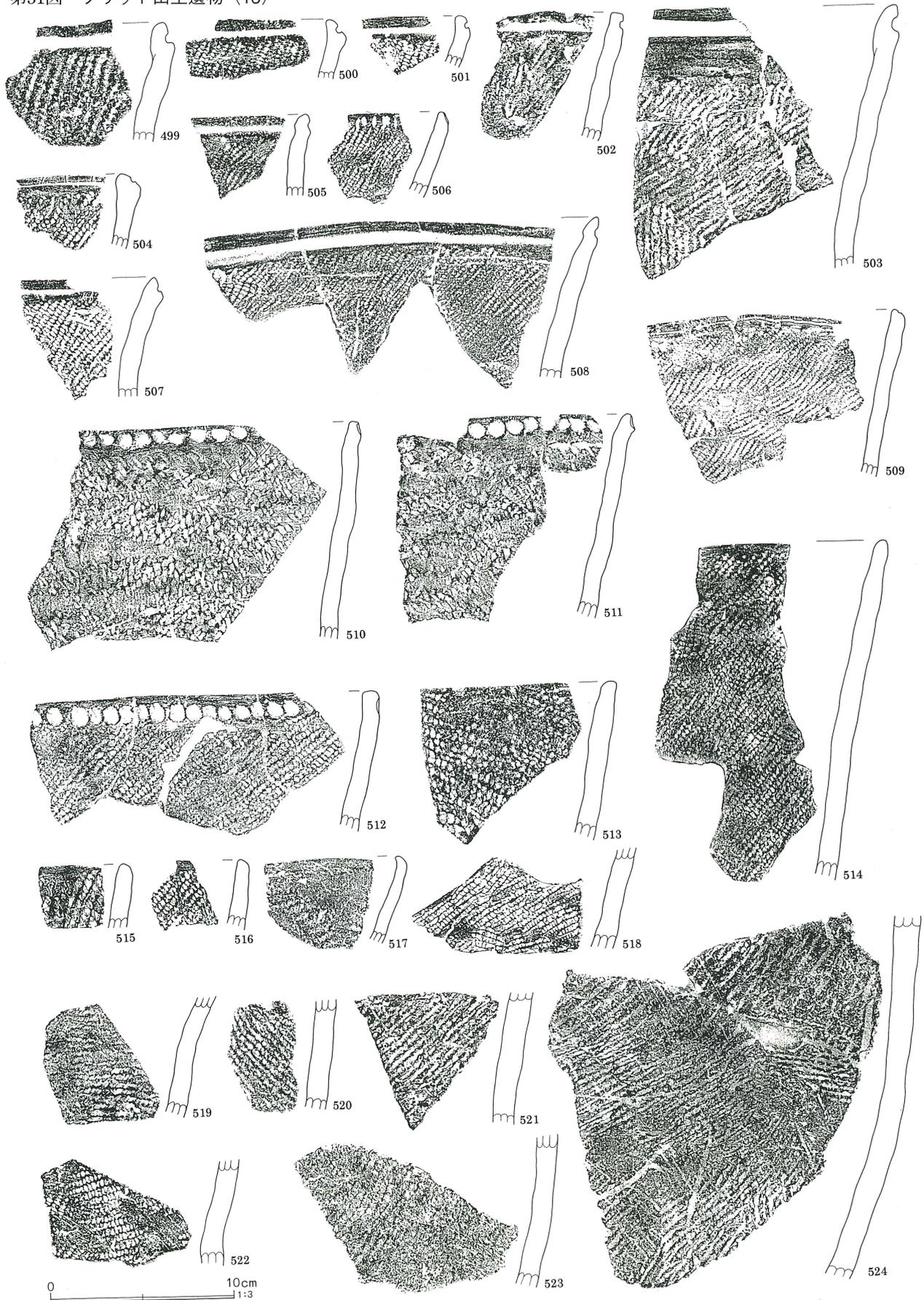
1本の隆帯が巡るもの (451~455、462) と、2本の隆帯が巡るもの (456~461) がある。455以外の隆

帯上には、刺突による刻み目が施文されている。452は地文上に多重の沈線が施文されるもので、他の土器の文様は、帯状に施文された2本の沈線内に縄文が充填されるものである。462は口唇部に沈線を施文するもので、II式でも新しい段階と考えられる。

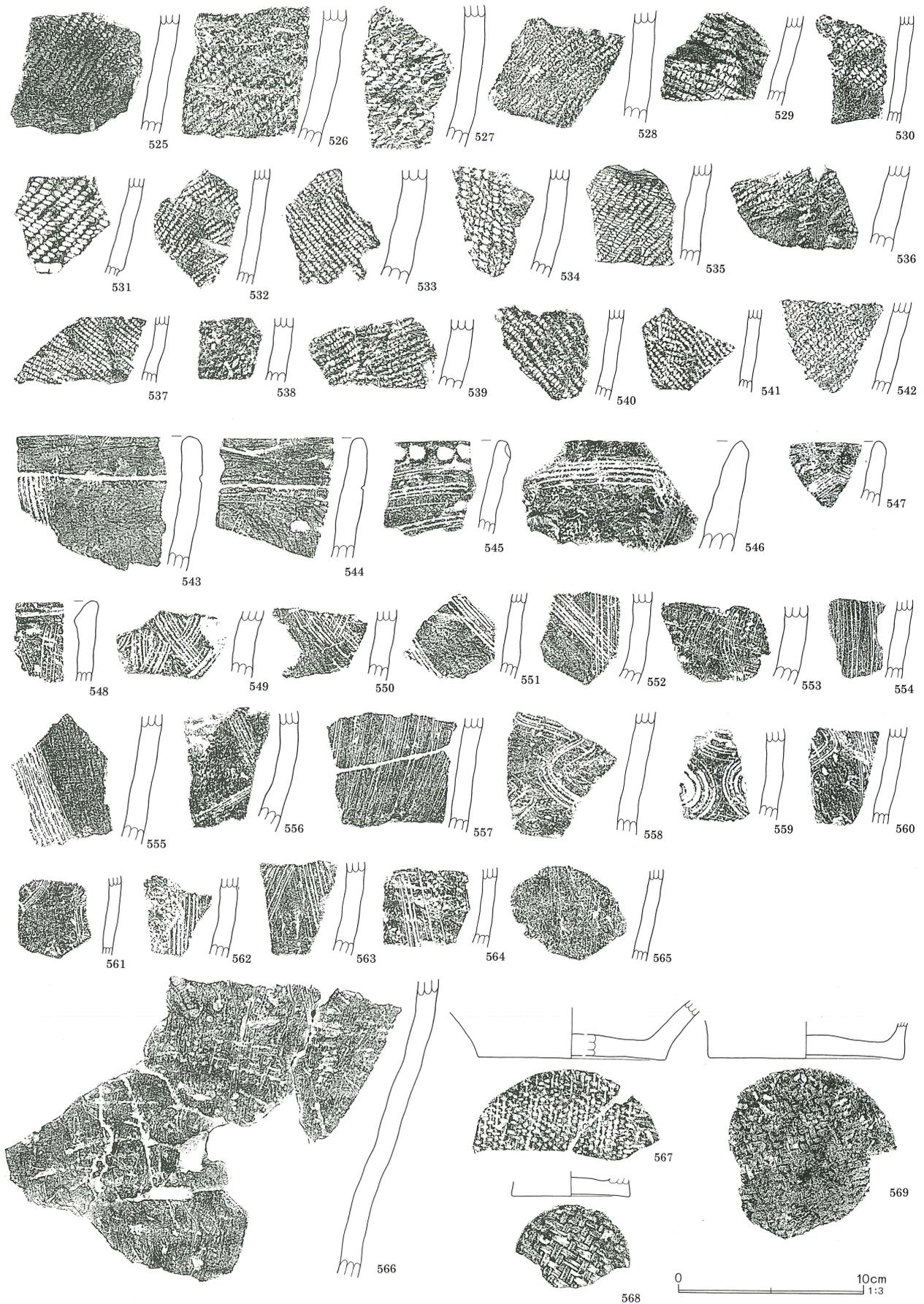
c種 多重沈線で文様を施文するもの (464~474)

地文縄文上に沈線を施文するものである。帯縄文の区画内に多重沈線を充填施文する土器群 (464~468)

第31図 グリッド出土遺物 (13)



第32図 グリッド出土遺物 (14)



であり、帯縄文と沈線充填部との関係が入れ替わっている部分(469)もある。全体的な構成は、円形モチーフと三角モチーフが組み合わさる構成となる。470～474は多重の三角文や菱形文が、沈線で描かれるものである。

d種 沈線区画内に縄文を充填するもの(474～493)

2本沈線で囲まれた内側に縄文を充填するものである。沈線は三角形状や弧状に施文される。477は口縁部周辺の破片で、口縁部を巡る隆帯が残存している。

484～493は同一個体と考えられるもので、胴部下半から底部にかけての土器である。2本沈線内に縄文を充填するもので、縦長の三角文が構成されている。無文部分には、ミガキが施されている。文様の空白部分が多いことから、Ⅱ式後半の土器と考えられる。

第Ⅵ群土器(第31図499～524、第32図525～542)

縄文のみを施文する土器群を一括する。胴部破片では他の文様要素との複合関係が不明であるが、破片内に縄文のみ施文されている土器群を抽出した。その殆どが、堀之内式系土器に相当すると考えられる。

499～517は口縁部の破片である。いずれも第Ⅳ・Ⅴ群段階の縄文施文土器で、堀之内Ⅰ～Ⅱ式にかけての土器群である。

499～509は口縁部に凹線状の沈線を巡らすものである。506は刻みをいれながら、横方向にずらして施文するもので、円形刺突文と沈線文との折衷的な様相を示す。第Ⅳ群土器第5類土器の縄文施文部分や、小仙塚系土器の縄文が施文される口縁部分が含まれる可能性がある。499～501、503、504、507が堀之内Ⅰ式、他が堀之内Ⅰ式末葉～Ⅱ式前葉と考えられる。499～501、504～509は単節LR、502は無節Rの縄文を横方向に施文する。また503は口縁部の沈線下部分を、幅を持って磨り消すものである。地文は口縁部直下では無節Rを横方向に、胴上部は斜め方向に施文する。また胴中央部からは原体を変えて、無節Lの縄文を斜め方向に施文している。

510～512は、角頭状を呈する口外端部に円形刺突列

を連続して施文するものである。地文縄文を施すのみの土器群であり、第Ⅳ群第2類の口縁部に共通する部分がある。いずれも第Ⅳ群段階内と思われるが、堀之内Ⅰ式でも比較的新しい段階の土器群である。

513～517は地文のみの土器である。いずれも第Ⅴ群段階の縄文施文土器と思われ、堀之内Ⅱ式段階の土器群が主体を占めるものと思われる。その中でも、517は口縁部裏面に浅い凹線状の沈線が巡ることから、比較的新しい段階の土器と判断される。地文は単節LRを横または斜め方向に施文する。

518～542は胴部の破片である。520、523、529、531、534、535、540が単節RL、他は単節LRの縄文を横または斜め方向に施文するものである。

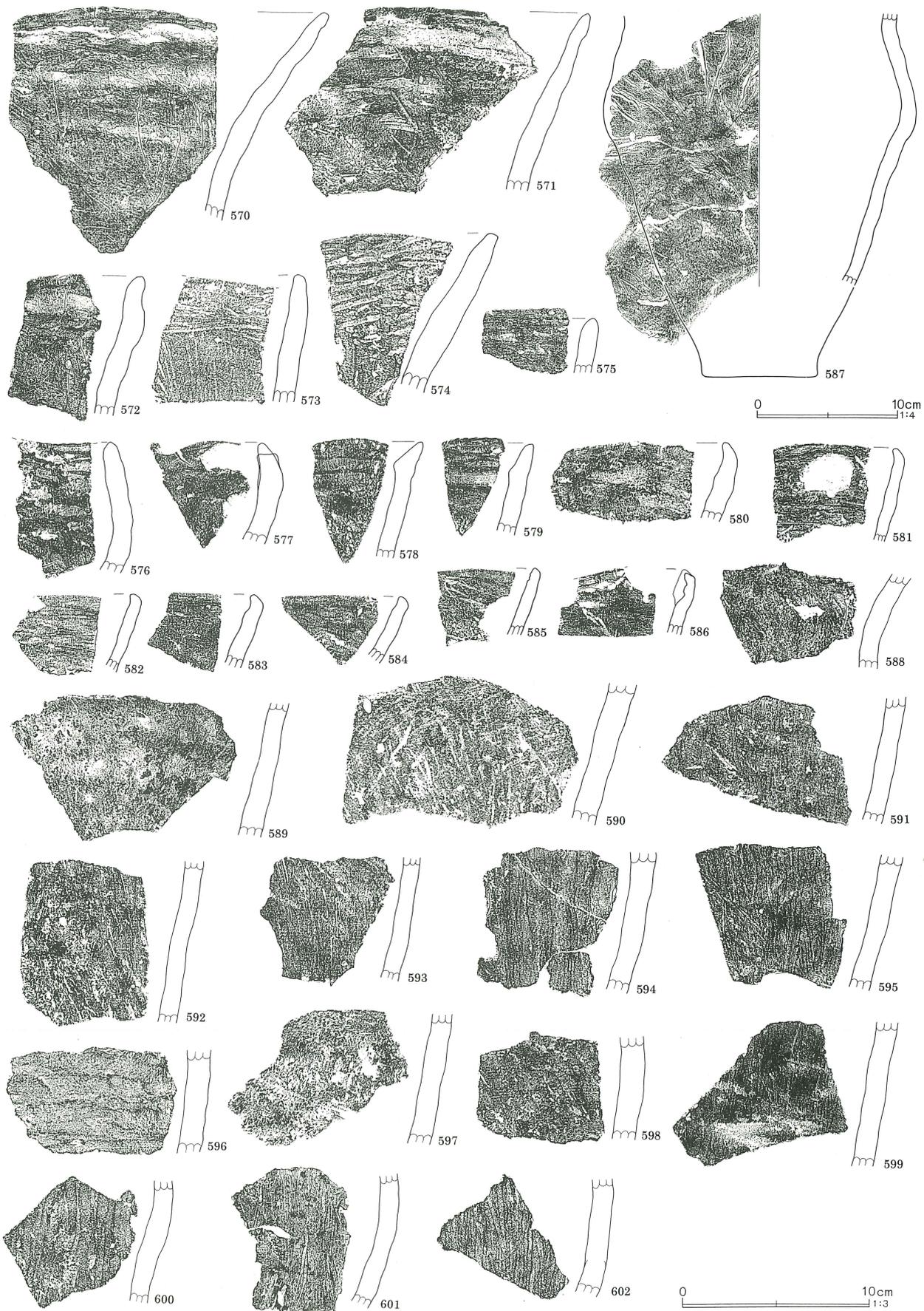
第Ⅶ群土器(第32図543～566)

地文に条線文のみを施文する土器群を一括する。条線文の要素は、本遺跡では中期終末の第Ⅱ群段階から存在する。ここでは第Ⅲ群から第Ⅴ群にかけての土器群を抽出したが、混在の可能性もある。

543～548は口縁部の破片である。543、544は口縁部と胴部を沈線で区画するもので、第Ⅲ群に系譜のみられる称名寺式系土器である。時期的には、第Ⅳ群に伴うものと判断される。545は第Ⅳ群第2類土器の、地文に横位の条線文を施すもので、堀之内Ⅰ式系土器である。546～548は口縁部の区画等が不明瞭で、比較的粗い条線が施文されることから、第Ⅴ群に伴う可能性が高いものと判断される。

549～566は胴部破片である。地文の条線には縦、斜め方向に施文するもの(549～552、554～557、562～566)、曲線的に施文するもの(553、558～561)がある。殆どが第Ⅳ群段階と思われるが、564、565の様に浅くて不明瞭な条線文は第Ⅴ群の堀之内Ⅱ式段階に位置付けられるものと思われる。558～560は蛇行条線文を施文するが、第Ⅱ群とはベースとなる土器本体の胎土、焼成等が異なり、その識別は容易である。559は第Ⅴ群段階の可能性もある。

第33図 グリッド出土遺物 (15)



第Ⅷ群土器 (第33図570~602)

無文の土器群を一括する。胴部破片では、有文土器群の無文部を抽出している可能性があるが、破片内が無文のものを一括した。

570、571は胴部で括れ、口縁部が大きく開く器形を呈し、やや粗い整形を施す粗製深鉢形土器である。両者とも口縁部に沈線を意識した様な成形を施す。572は口縁部に浅い凹線を巡らせ、573~575は直行する口縁部が開く器形を呈する。

576、577は口縁部が内彎し、577の口唇部には強い押圧による刻みを施している。578、579は同一個体で、口唇部が尖り、内面に明瞭な稜を持つ。580~586は口縁部がやや内彎する器形で、580、581は裏面に幅広の凹線状の整形を巡らす。582~586は裏面に沈線を巡らすもので、586は2本沈線を施文する。572、576、577は第Ⅳ群の可能性があり、大半は第Ⅴ群段階の無文土器で、堀之内Ⅰ式終末からⅡ式にかけての土器群である可能性が高い。

胴部破片は比較的整形が丁寧なものが多く、Ⅱ式段階に特徴的な、596に見られる指頭で横位の稜が付くような整形を施すものは少ない。587は頸部で括れ、胴部が大きく張る器形の無文土器で、胴最大径22.4cm、現存高16.6cmを測る。

第Ⅸ群 (第30図494~498、第32図567~569)

その他の土器群を一括する。

第30図494は、第Ⅴ群の深鉢形土器の破片を使用した土製円盤である。径1.6cmを測る。

第30図495~498は注口土器の破片で、498は把手部分が破損している。

第32図567~569は網代痕を持つ底部破片である。567は推定底径11.7cm、569は10.5cm、568は6.5cmを測る。

b) 出土石器 (第34図)

スクレイパー (1)

1点出土している。両側縁を刃部として使用している。長さ2.6cm、幅2.1cm、厚さ0.9cm、重さ4.91g、石質

はチャートである。

尖頭器 (2)

基部は欠損している。やや厚手で、刃部の角度は鈍い。残存する長さ3.0cm、幅2.6cm、厚さ0.8cm、重さ6.35g、石質は頁岩である。

石鏃 (3~7)

3は二等辺三角形の石鏃で、挟りが浅く入る。先端と片側の脚部が欠損している。残存する長さ2.5cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm、重さ1.35g、石質はチャートである。4と5は正三角形に近い形状で、挟りが深く入るものである。ともに片側の脚部の先端を欠損する。4の残存する長さ1.9cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重さ0.62g、石質は黒曜石である。5は残存する長さ2.2cm、幅2.0cm、厚さ0.5cm、重さ1.10g、石質はチャートである。6、7は未製品と考えられるものである。6は裏面に大きく1次剥離を残すもので、長さ2.4cm、幅1.9cm、厚さ0.5cm、重さ1.81g、石質は黒曜石である。7は長さ2.3cm、幅1.8cm、厚さ0.5cm、重さ1.35g、石質はチャートである。

打製石斧 (8・9)

8は側縁部の中央付近に挟りが入るもので、刃部に自然面が残る。器面は風化が進んでいる。長さ9.9cm、幅5.3cm、厚さ1.4cm、重さ78.37g、石質はホルンフェルスである。9は刃部のみが残存するもので、裏面は自然面をそのまま残している。表面は1次剥離を大きく残す。残存する長さ3.7cm、幅4.9cm、厚さ0.9cm、重さ20.60g、石質はホルンフェルスである。

砥石 (10)

10は約4分の1が残存するもので、薄い小形の砥石である。残存する長さ5.2cm、幅4.7cm、厚さ1.7cm、重さ46.53g、石質は砂岩である。

磨石類 (11~17)

磨石には、凹石や敲石などの機能も持つものが多い。そのためそれらを明確に分類することが困難であるため、ここでは磨石類として一括して扱うこととする。

11~13は磨石で、明確な凹部は持っていない。11は小形で縦長の磨石で、下半部と裏面を欠損する。残存

第34図 グリッド出土遺物 (16)



する長さ4.8cm、幅3.3cm、厚さ1.6cm、重さ28.95g、石質は石英玢岩である。12は扁平なもので、裏面の一部分が凹み状になっている。磨面は表裏両面の他、面を持つ周縁部分も磨面としている。下半分が欠損するもので、残存する長さ10.3cm、幅9.2cm、厚さ3.5cm、重さ469.92g、石質は安山岩である。13は肉厚の球状に近いもので、磨面はほぼ全面にわたっている。表面の一部には浅い凹みが残されている。半分は欠損するもので、長さ5.7cm、幅7.6cm、厚さ4.6cm、重さ223.68g、石質は安山岩である。

14~16は磨面のほかに明瞭な凹部を持ち、凹石として使用されたものである。14は表面のほとんどが風化のため剥落するもので、表面の一部には磨面が残る。下端部を欠損するもので、残存する長さ10.4cm、幅6.5cm、厚さ2.5cm、重さ185.26g、石質は安山岩である。15は中央部分に凹部を持つもので、周縁は敲打されており面を成している。裏面は磨面としてよく使用されており、光沢を持っている。完形で長さ11.2cm、幅6.7cm、厚さ3.7cm、重さ388.48g、石質は安山岩である。16は肉厚なもので両面に磨面を持つ。一部分が残存するもの

で、長さ6.8cm、幅6.2cm、厚さ5.2cm、重さ322.41g、石質は閃緑岩である。

17は凹石で、磨石としては使用されていない。両面に複数の凹部を持つものである。側縁の一部が残存するもので、長さ7.8cm、幅8.5cm、厚さ5.2cm、重さ471.65g、石質は安山岩である。

石皿 (18~20)

いずれもごく一部分が破片として残るものである。18は長さ5.0cm、幅6.8cm、厚さ5.1cm、重さ219.02g、石質は安山岩である。19は長さ7.4cm、幅7.6cm、厚さ4.3cm、重さ225.72g、石質は安山岩である。20は長さ7.8cm、幅4.1cm、厚さ5.7cm、重さ176.34g、石質は安山岩である。

石錘 (21、22)

グリッドから2点出土している。いずれも自然石の両端部を打欠いて、挟りを入れるものである。挟りを上下方向とすると、21は縦長、22は横長となる。

21は長さ4.8cm、幅3.2cm、厚さ1.5cm、重さ31.43g、石質は砂岩である。22は長さ2.6cm、幅3.8cm、厚さ1.2cm、重さ16.45g、石質は砂岩である。

第1表 土壌一覧表

番号	位置	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	形態	主軸方位	出土土器	出土石器
1	B-3	1.22	1.08	0.42	楕円形	N-45°-E	II群・IV群・VI群・VII群	敲石
2	B-2	0.66	0.62	0.28	円形	N-41°-W	IV群	石皿・磨石
3	B-2	1.16	1.08	0.43	楕円形	N-44°-W	III群・VII群	
4	B-3	1.00	0.95	0.45	円形	N-45°-E	III群・IV群	
5	B-2	0.64	0.49	0.26	楕円形	N-5°-W	IV群・VII群	
6	B-3	0.92	0.84	0.59	楕円形	N-43°-W	IV群・VI群・VIII群	
7	B-3	0.58	0.52	0.16	楕円形	N-89°-E	IV群	
8	B-3	1.24	1.08	0.64	楕円形	N-12°-W	III群・IV群・VII群	
9	B-3	0.80	—	0.36	楕円形	N-50°-W	IV群・VII群	
10	B-3	0.92	0.78	0.50	楕円形	N-54°-E	III群・IV群・V群・VII群	
11	B・C-3	0.64	0.52	0.30	楕円形	N-39°-E	IV群	
12	B-3	0.51	0.44	0.26	楕円形	N-48°-W	IV群・VI群	
13	B-3	0.64	62.00	0.14	円形	N-52°-E	IV群	
14	B-3	1.10	0.82	0.99	楕円形	N-35°-W	V群・VII群	石皿
15	A・B-3	0.70	0.40	0.16	楕円形	N-54°-W	III群・IV群・VI群・VII群	
16	B-3・4	1.58	1.38	0.81	楕円形	N-39°-W	III群	
17	A-3	1.40	1.34	1.12	楕円形	N-63°-W	III群・IV群・V群・VI群・VII群・VIII群	
18	B-3	1.17	—	0.32	楕円形	—	III群・IV群	
19	B-3	0.82	0.68	0.26	楕円形	N-55°-W	IV群	
20	B・C-3	0.98	0.82	0.28	楕円形	N-48°-E	IV群・VII群・VIII群	
21	C-2	0.66	0.59	0.33	楕円形	N-22°-W	III群・VI群・VIII群	